仙台市文化財調査報告書第 398 集

六 反 田 遺 跡

第 9 次発掘調査報告書

2012 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第 398 集

六 反 田 遺 跡

第 9 次発掘調査報告書

2012 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序　文

仙台市の文化財文化財保護行政に対しまして、日ごろからご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。市内には、旧石器時代から近世に至るまで、数多くの埋蔵文化財が残っています。当教育委員会といたしましては、市民の皆様からのご理解・ご協力のもと、これらの文化財を保存・活用し、次世代へ継承していけるように努めています。

本報告書は仙台市立大野田小学校の校舎増築計画に伴い、平成23年度に実施しました六反田遺跡第9次発掘調査成果をまとめたものです。

大野田小学校が所在する大野田地域は、仙台市内でも数多くの遺跡が分布している地域で、現在、富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査が行われています。近年、春日社古墳の革盾や六反田遺跡の木棺墓、大野田官衙遺跡など重要な発見がありました。

今回の調査の結果、奈良から平安時代にわたる土地利用の変遷の様子が明らかになりました。また、今回の調査地点は小学校の敷地内に位置しており、小学校の授業と連携し、児童、教員及び保護者を対象とした遺跡見学会を実施しました。

本報告書が学術研究はもとより、市民の皆様にも広く活用され、地域の歴史と文化財に関心を抱く契機になれば幸いです。

最後になりましたが、昨年3月11日に発生した東日本大震災では、仙台市内も大きな被害を受け、校舎が被災した学校もあります。現在仙台市は「ともに、前へ仙台　～3.11からの再生～」を掲げて、復興計画を進めているところです。そうした中、発掘調査ならびに本報告書刊行にあたり、多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことを深く感謝申しあげる次第です。

平成24年3月

仙台市教育委員会

教育長　青沼　一民

例　　言

1. 本書は「仙台市立大野田小学校校舎増築計画」に伴い、仙台市教育委員会が平成23年度に実施した六反田遺跡第9次発掘調査の成果についてまとめたものである。
2. 本書の作成業務は仙台市教育委員会が国際文化財株式会社に委託をして行った。
3. 報告書刊行にあたっては、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査指導係庄子裕美、工藤信一郎の監理の下、国際文化財株式会社が担当した。
4. 本書の執筆については第1章第1節を庄子裕美が、第2節以下第2章～第4章を川又理枝(国際文化財株式会社)が行った。
5. 本調査の実施に際し、仙台市立大野田小学校および仙台市教育委員会総務企画部学校施設課の協力を得ている。
6. 調査・整理に関する全ての資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 建設省国土地理院発行の地形図を使用した場合は図中に示した。
2. 遺構図中の座標値は、日本測地系「平面直角座標第X系」を基準とし、グリッド値は隣接する「仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業」事業地内の測量基準点(X＝-198.400km・Y＝3.900km)を原点とする10m×10mグリッドを基準とした。図中および本文記載の方位北は、全て座標北を基準としている。
3. 断面図中の数値は、海抜高度(T.P)を示す。
4. 本書中の土色の記載には『新版 標準土色帖』2000年版(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)を使用した。
5. 調査において検出された遺構については以下の遺構記号を使用し、遺構ごとに番号を付した。
   SB：掘立柱建物跡　SD：溝跡　SI：竪穴住居跡・竪穴遺構　SK：土坑　SX：性格不明遺構　P：ピット
   小溝状遺構群については、時期的なまとまりを示すアルファベットと、所属する群を示す算用数字の組み合わせにより表している。例えば「B8－1」は小溝状遺構群B群の8の1を示す。
6. 遺構図の縮尺はスケールとともに図中に示した。
7. 竪穴住居跡、掘立柱建物跡における主軸方位の計測は、想定される遺構壁の長辺に平行する線を基準として計測し、文中に示した。その他の遺構については検出長軸をもって計測した。
8. 遺構図に使用したスクリーントーンは、その都度図中に示した。
9. 出土遺物の登録には以下の遺物記号を使用し、種別毎に番号を付した。
   A：縄文土器　B：弥生土器　C：土師器(非ロクロ調整)　D：ロクロ土師器　E：須恵器　Ka：打製石器
   Kc：礫石器　Kd：石製品　N：金属製品　P：土製品
10. 遺物実測図の縮尺は、打製石器は2/3(石鏃のみ1/1)、このほかは1/3とした。
11. 土師器実測図に使用したスクリーントーン、[　　]は黒色処理を示している。
12. 石器・石製品の実測図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。
    [　　]火ハネ　[　　]節理
13. 石器の分類基準は「下ノ内遺跡・春日社古墳・大野田官衙遺跡ほか」(仙台市教育委員会2011b)に準じた。
14. 遺物観察表において(　)は復元値を示している。なお、器高・段幅の計測は原則として断面とした。
15. 遺構一覧表において(　)は推定、|　|は検出長を示している。
16. 掲載した遺物写真の縮尺は原則として遺物実測図に準じた。ただし、その縮尺での掲載が困難な場合は、適宜縮尺を変更した。
17. 座標値及び海抜高度については、平成23年3月11日の東日本大震災前のものを使用している。
18. 本文中の「灰白色火山灰」(山田・庄子1980)は、これまでの仙台市域の調査報告や東北中北部の研究から、「十和田a火山灰(To-a)」と考えられている。降下年代は現在、西暦915年(延喜15年)と推定されており、本書もこれに従う。
    山田一郎・庄子貞雄1980「宮城県に分布する灰白色火山灰」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』
    仙台市教育委員会2000「沼向遺跡第1～3次調査」仙台市文化財調査報告書第241集
    小口雅史2003「古代北東北の広域テフラをめぐる問題－十和田aと白頭山(長白山)を中心に－」『日本律令の展開』吉川弘文館

目　次

序文

第1章　調査の概要 …… 1

第1節　調査に至る経緯 …… 1
1.調査経緯 …… 1
2.調査要項 …… 1
第2節　遺跡周辺の地理的環境と歴史的環境 …… 1
1.地理的環境 …… 1
2.歴史的環境 …… 3
第3節　調査の方法と経過
1.調査の方法 …… 3
2.調査の経過 …… 3
3.普及活動について …… 4

第2章　基本層序 …… 4

第3章　検出遺構と出土遺物 …… 10

第1節　Ⅲa層上面検出遺構 …… 10
1.溝跡 …… 12
2.土坑 …… 12
3.性格不明遺構 …… 13
4.遺構外出土遺物 …… 14
第2節　Ⅴ層上面検出遺構 …… 15
1.竪穴住居跡 …… 16
2.掘立柱建物跡 …… 28
3.溝跡 …… 36
4.土坑 …… 37
5.小溝状遺構群 …… 41
6.遺構外出土遺物 …… 45
第3節　下層部の調査 …… 50

第4章　まとめ …… 52

第1節　出土遺物について …… 52
第2節　遺構の変遷について …… 55
第3節　まとめ …… 56

挿図目次

第１図　六反田遺跡の位置と周辺遺跡分布図 …… 2
第２図　六反田遺跡基本層対応模式図 …… 4
第３図　調査区位置図・グリッド配置図 …… 6
第４図　基本層序柱状図 …… 6
第５図　基本層序　東壁 …… 7
第６図　基本層序　南壁・西壁（１） …… 8
第７図　基本層序　西壁（２）・北壁 …… 9
第８図　Ⅲａ層上面遺構配置図 …… 11
第９図　SD１～４溝跡断面図 …… 12
第10図　SK１土坑平面図・断面図 …… 13
第11図　SX２性格不明遺構平面図・断面図 …… 13
第12図　SX３性格不明遺構平面図・断面図 …… 13
第13図　SX５性格不明遺構平面図・断面図 …… 13
第14図　SX７性格不明遺構平面図・断面図 …… 14
第15図　Ⅲａ層遺物出土分布図 …… 14
第16図　Ⅲａ層出土遺物（１） …… 14
第17図　Ⅲａ層出土遺物（２） …… 15
第18図　Ⅴ層上面遺構配置図 …… 17・18
第19図　SI１竪穴住居跡平面図 …… 19
第20図　SI１竪穴住居跡断面図 …… 20
第21図　SI１竪穴住居跡掘り方平面図 …… 22
第22図　SI１竪穴住居跡出土遺物（１） …… 23
第23図　SI１竪穴住居跡出土遺物（２） …… 24
第24図　SI２竪穴住居跡平面図・断面図 …… 26
第25図　SI２竪穴住居跡出土遺物 …… 27
第26図　SB１掘立柱建物跡平面図・断面図 …… 28
第27図　SB２掘立柱建物跡平面図 …… 29
第28図　SB２掘立柱建物跡断面図 …… 30
第29図　SB３掘立柱建物跡平面図・断面図 …… 31
第30図　SB４・５掘立柱建物跡平面図・断面図 …… 32
第31図　SB６掘立柱建物跡および周辺土坑・
　SB７掘立柱建物跡平面図 …… 33
第32図　SB６掘立柱建物跡および周辺土坑・
　SB７掘立柱建物跡断面図 …… 34
第33図　SD５溝跡断面図・出土遺物、
　SD７溝跡断面図 …… 36
第34図　SK４・11土坑平面図・
　遺物出土分布図・断面図 …… 37
第35図　SK13土坑平面図・遺物出土分布図・断面図、
　SK５・８・10土坑平面図・断面図 …… 38
第36図　SK12・14・15～17・19・20・22土坑
　平面図・断面図 …… 39
第37図　SK４・11・13土坑出土遺物 …… 40
第38図　小溝状遺構群変遷図 …… 41
第39図　小溝状遺構群出土遺物 …… 42
第40図　小溝状遺構群断面図・
　エレベーション図（１） …… 43
第41図　小溝状遺構群断面図・
　エレベーション図（２） …… 44
第42図　Ⅳ層遺物出土分布図 …… 45
第43図　Ⅳ層出土遺物（１） …… 45
第44図　Ⅳ層出土遺物（２） …… 46
第45図　遺構外出土遺物（縄文土器） …… 47
第46図　遺構外出土遺物（弥生土器他） …… 48
第47図　遺構外出土遺物（石器） …… 49
第48図　トレンチ１・２平面図・
　断面図・遺物出土分布図 …… 50
第49図　トレンチ３平面図・
　断面図・遺物出土分布図 …… 51
第50図　下層トレンチ出土遺物 …… 51
第51図　遺構変遷図 …… 53・54

挿表目次

第１表　調査区断面注記表 …… 10
第２表　SI１竪穴住居跡床面施設観察表 …… 20
第３表　SI１竪穴住居跡土層注記表 …… 21
第４表　SI２竪穴住居跡土層注記表 …… 27
第５表　SB１掘立柱建物跡計測表・
　土層注記表 …… 29
第６表　SB６掘立柱建物跡および周辺土坑・
　SB７掘立柱建物跡計測表・土層注記表 …… 35

写真図版目次

写真図版１　調査区周辺・調査区全景 …… 60
写真図版２　基本層序 …… 61
写真図版３　SI１竪穴住居跡（１） …… 62
写真図版４　SI１竪穴住居跡（２）・
　SI２竪穴住居跡（１） …… 63
写真図版５　SI２竪穴住居跡（２）・
　掘立柱建物跡（１） …… 64
写真図版６　掘立柱建物跡（２） …… 65
写真図版７　土坑（１） …… 66
写真図版８　土坑（２） …… 67
写真図版９　土坑（３） …… 68
写真図版10　土坑（４） …… 69
写真図版11　出土遺物（１） …… 70
写真図版12　出土遺物（２） …… 71
写真図版13　出土遺物（３） …… 72

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

１．調査経緯

六反田第９次調査は、六反田遺跡内で計画された仙台市立大野田小学校校舎増築計画に伴う埋蔵文化財の事前調査である。東側には大野田官衙遺跡が隣接している。

本遺跡のある大野田地域には、仙台市内でも多くの遺跡が分布しているところである。これまで本遺跡では、地下鉄南北線に伴う発掘調査や、大野田小学校の給食棟建設に伴う発掘調査が行われている。また、平成７年から富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査が継続して行われている。

近年、大野田地区では宅地開発が進み、大野田小学校では児童数の増加がみられることから、校舎の増築工事が計画された。周辺におけるこれまでの調査状況から、計画地内においても古墳時代から平安時代を中心とする遺構、遺物が良好に存在する可能性が極めて高いと予測された。仙台市教育委員会は、学校施設課より、平成 23 年６月 30 日付け、教総施第 773 号で提出された「仙台市立大野田小学校校舎増築建設計画と埋蔵文化財のかかわりについて（協議）」（平成 23 年７月 13 日付け、教生文第 108-4 号により県通知を伝達）に基づき、校舎増築工事範囲において、本調査を実施することになった。

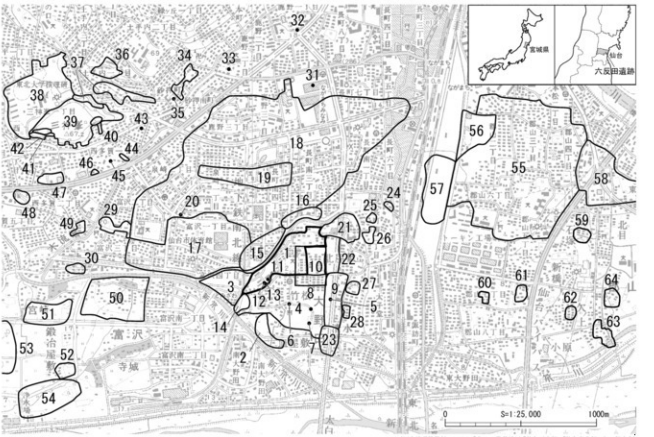
２．調査要項

遺跡名：六反田遺跡（宮城県遺跡番号第 01189 号）
所在地：宮城県仙台市太白区大野田字六反田 10 － 5
対象面積：約９００㎡
調査面積：約７６０㎡
調査原因：学校校舎増築計画に伴う発掘調査
調査担当：文化財調査指導係主事　鈴木　隆
　　文化財調査指導係主事　庄子裕美
調査組織：国際文化財株式会社東北支店
　　主任調査員　川又理枝
　　調　査　員　土　任隆
調査期間：平成 23 年８月８日～平成 23 年 12 月 19 日
整理期間：平成 23 年 12 月 20 日～平成 24 年３月 23 日

第２節　遺跡周辺の地理的環境と歴史的環境

１．地理的環境

六反田遺跡が位置する富沢・大野田地区は仙台市の南部に位置する。この地区は南縁を名取川、北縁を広瀬川、北西縁を青葉山丘陵によって画された沖積地で、「郡山低地」と呼称されている。富沢・大野田地区には、名取川の支流である笊川など、いくつもの小河川が網目状に且つ蛇行しながら流れており、自然堤防・旧河道跡・後背湿地などが複雑に入り組んだ地形が形成されている（註 1）。六反田遺跡は主に笊川によって形成された標高約 10 ～ 12m 前後の自然堤防上に立地し南西から北東方向への傾斜が認められる（仙台市教育委員会 2000b）。遺跡の構成土壌は主に粘土質シルト・シルト質粘土を主体としている。



（国土地理院発行　２万５千分の１数値地図「仙台西南部」「仙台東南部」を一部改変）

No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	六反田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文（中～晩）～近世
2	伊古田Ⅱ遺跡	自然堤防	畑跡他	古墳～平安
3	下ノ内遺跡	自然堤防	集落跡・墓跡	縄文（中～晩）～中世
4	大野田古墳群	自然堤防	古墳・集落跡	縄文～中世
5	王ノ壇古墳	自然堤防	古墳	古墳
6	森田社古墳	自然堤防	古墳	古墳
7	島居塚古墳	自然堤防	古墳	古墳
8	大野田官衙遺跡	自然堤防	官衙跡	古墳～奈良
9	王ノ壇遺跡	自然堤防	集落跡・屋敷跡	縄文（後）～中世
10	袋前遺跡	自然堤防	集落跡	縄文・古墳～平安
11	五反田古墳	自然堤防	古墳	古墳
12	五反田石相墓	自然堤防	墓跡	古墳
13	五反田木相墓	自然堤防	墓跡	古墳
14	伊古田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文～平安
15	下ノ内遺遺跡	自然堤防	集落跡・墓跡・水田跡	縄文（早・前・後）～中世
16	袋東遺跡	自然堤防	包含地	古墳・平安
17	山口遺跡	自然堤防・後背湿地	集落跡・水田跡	縄文～平安
18	富沢遺跡	後背湿地	集落跡・水田跡・散布地	旧石器～近世
19	泉崎遺遺跡	自然堤防・後背湿地	水田跡・墓地	縄文（後）・弥生～古墳・平安
20	教塚古墳	後背湿地	古墳	古墳
21	六袋遺跡	自然堤防	集落跡	奈良～平安
22	大野田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文（後）・弥生（中）・古墳～平安
23	島屋敷遺跡	集落跡・生産遺跡・屋敷跡・包含地	自然堤防	奈良～平安・中世
24	長町六丁目遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
25	長町南遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
26	新田遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
27	北屋敷遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
28	長町清水遺跡	古墳か	自然堤防	古墳か
29	富沢清水遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
30	堀ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安
31	金岡八幡古墳	古墳	後背湿地	古墳
32	一塚古墳	丘陵	古墳	古墳
33	二塚古墳	丘陵	古墳	古墳
34	砂押屋敷遺跡	段丘	集落跡	奈良～平安
35	砂押古墳	丘陵	古墳	古墳
36	土手内遺跡	丘陵	集落跡・生産遺跡	縄文～古墳
37	土手内横穴群	丘陵斜面	横穴古墳・窯跡	古墳
38	戸ノ口遺跡	丘陵	段丘	平安
39	三神峯遺跡	集落跡	段丘	縄文
40	金山窯跡	窯跡	段丘	古墳
41	三神峯古墳群	古墳	段丘	古墳
42	富沢窯跡	窯跡	段丘	古墳～平安
43	金洗沢古墳	丘陵	古墳	古墳
44	裏町東遺跡	集落跡	段丘	平安
45	裏町古墳	丘陵	古墳	古墳
46	原東遺跡	集落跡	段丘	弥生～平安
47	原遺跡	集落跡・古墳	段丘	弥生～平安
48	西台窯跡	窯跡	段丘	奈良～平安
49	富沢上ノ台遺跡	集落跡	段丘	縄文・平安
50	富沢海跡	自然堤防・後背湿地	城館跡	戦国
51	鍋台屋敷Ⅱ遺跡	集落跡・生産遺跡	自然堤防	縄文・奈良～中世
52	鍋台屋敷Ⅱ遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・奈良～中世
53	南ノ東遺跡	集落跡	自然堤防・後背湿地	弥生・平安
54	六本松遺跡	集落跡	自然堤防	平安
55	都山遺跡	自然堤防	官衙関連・分院跡・集落跡	縄文（後・晩）・弥生（中）・古墳～近世
56	西台畑遺跡	自然堤防	散布地	縄文・弥生（中）・古墳～近世
57	長町駅東遺跡	自然堤防・後背湿地	集落・水田跡	弥生～中世
58	北目城跡	自然堤防	城館跡・集落跡・水田跡	縄文（後）弥生～近世
59	矢来遺跡	生産遺跡・包含地	自然堤防・後背湿地	古墳～平安
60	的場遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
61	鷹ノ巣遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安
62	欠の上Ⅰ遺跡	生産遺跡	自然堤防・後背湿地	平安～中世
63	欠の上Ⅱ遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安、近世
64	欠の上Ⅲ遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安、近世

第１図　六反田遺跡の位置と周辺遺跡分布図

２．歴史的環境

1976 年に開始された六反田遺跡の発掘調査は、今回の調査で第９次を数える。これまでに行われた周辺の調査によって、名取川が形成した自然堤防と後背湿地の変化に伴う土地利用の変遷が明らかになってきている。

縄文時代　笊川流域の自然堤防上に生活が営まれていたことが確認されている。六反田遺跡では中期中葉の竪穴住居跡が確認されている。また六反田遺跡から下ノ内遺跡の一帯では中期後葉から後期初頭の集落が確認されている。

弥生時代　中期には笊川対岸の後背湿地に水田が営まれている。後背湿地から自然堤防への移行域に立地する山口遺跡、下ノ内浦遺跡では遺物包含層が形成されている。今回の調査では調査区北側で中期から後期の遺物が出土した。

古墳時代　前期の住居跡は下ノ内遺跡・伊古田遺跡・六反田遺跡で確認され、中期には大野田古墳群として知られる古墳群が東側一帯に形成されている。六反田遺跡第１次調査では木棺墓・石棺墓が確認されている。

奈良時代　山口遺跡、下ノ内浦遺跡、下ノ内遺跡、六反田遺跡一帯で集落跡が営まれている。六反田遺跡では今回の調査の南西に位置する第１・３・４次調査、北東に位置する第２・５次調査において奈良時代の竪穴住居跡が確認され、今回の調査においても同時期の竪穴住居跡を確認している。

平安時代　笊川右岸の微高地全域で集落が営まれている。笊川対岸の富沢遺跡では 10 世紀前半以降の水田跡が全域で確認されている。六反田遺跡第２次調査では乾田が確認され、南西の第１・３・４次調査、北西の第５次調査においては平安時代の竪穴住居跡が確認されている。笊川対岸の山口遺跡では平安時代末葉の河川跡が確認されている。また耕作に伴って残されたと考えられる「小溝状遺構」はこれまで遺跡内のほとんどの調査地において確認されており、自然堤防上を生産域として利用した人々の生産活動を知る上で、貴重な成果が得られている。

なお、六反田遺跡範囲の東側は、平成 21 年度に新たに遺跡登録がなされた「大野田官衙遺跡」とその遺跡範囲を一部共有しており、遺跡の東約 1.5km に位置する国指定史跡「仙台郡山官衙遺跡群　郡山官衙遺跡　郡山廃寺跡」とも密接な関係を有していたと考えられる遺構群が確認されている。

第３節　調査の方法と経過

１．調査の方法

調査は現在の盛土層を重機により除去する事から始めた。基本層Ⅲａ層直上までを重機により除去し、以下の層を人力によって調査を行った。調査区周囲の西側と南側には土層観察と排水を兼ねた側溝を掘り、基本層序の確認を行った。遺構確認面では平面の計測・写真撮影を行い、側溝で断面の土層堆積状況を観察、計測・写真撮影を行った。

調査で設定したグリッドは隣接する「仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業」事業地内の測量基準点 (日本測地系：X = -198.400km・Y = 3.900km) を原点とする 10m × 10m グリッドを基準とした（第３図）。遺構平面図は、トータルステーションを使用して計測し、断面図はトータルステーションとデジタルカメラを用いた写真実測を行い、一部手実測による計測・図化を併用した。

出土遺物は出土年月日順に番号をつけ、遺構別、層位別に取り上げ、登録を行った。出土遺物のうち報告書掲載資料及び観察資料に関しては、新たに遺物登録番号を付した。遺物の実測に関しては、手実測で作成した。

２．調査の経過

調査は８月 29 日から表土掘削を開始し、基本層Ⅲａ層上面検出遺構の調査を９月９日～９月 28 日に、基本層Ⅴ層上面検出遺構の調査を９月 29 日～ 12 月９日にかけて行った。その後基本層Ⅺ層上面までの下層トレンチ調査を３か所の試掘坑を設定して行い、12 月 27 日の埋戻し終了をもって現地調査の全工程を終了した。

３．普及活動について

六反田遺跡第９次調査の調査地点は、仙台市立大野田小学校の敷地内である。本調査において、文化財課は学校の授業と連携し、小学校４～６年生と教職員、保護者を対象とした遺跡見学会を計画した。そのうち、４年生の児童については、遺跡見学会を行う前に、総合的な学習の授業の一環として９月８日に出前授業を行った。また、学校の希望により、遺跡見学会に先立ち、発掘調査の様子や小学校周辺に所在する遺跡について、校内テレビ放送で写真パネルなどを用いて説明を行った。

10月31日には４年生と教職員を対象に、11月１日には５・６年生と保護者を対象に遺跡見学会を実施した。遺跡見学会では、本調査で検出した竪穴住居跡について担当者から説明、地層についての説明、六反田遺跡から出土した土師器、須恵器について説明をし、出土した遺物の観察を行った。遺跡見学会に参加した児童は342人、教職員と保護者は45名である。

遺物観察の様子

遺跡見学会

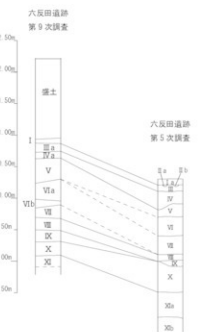
第２章　基本層序

基本層は、層厚140～160cmの現代の盛土下にⅠ層からⅪ層を確認し、当該調査区の基本層序として大別した。このうちⅠ層～Ⅴ層は、大野田地区で実施された六反田遺跡第５次調査（仙台市教育委員会 2000b）の基本層Ⅰ層～Ⅴ層と対応するが、これらの層については大野田地区全体で実施されている仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業関係遺跡の基本層Ⅰ～Ⅴ層に対応するとされる（仙台市教育委員会 2000b・2011b）。

今回の調査では、調査区東側にかかるSI１竪穴住居跡上層の堆積状況からⅢ層を分層している。

Ⅵ層以下は下層トレンチ調査で確認した。六反田遺跡第５次調査と、今回の調査の基本層で大きく異なる層はⅥ層である。六反田遺跡第５次調査のⅥ層は暗褐色の粘土質シルトとされ、今回の調査では確認されなかった層である。この層以下では土質や混入物・出土遺物など、土層に見られる特徴が少なく対応関係がやや不明瞭である。また大野田小学校給食棟の増改築に伴い実施された六反田遺跡第２次調査（仙台市教育委員会 1984b）の基本層とは、一部対応することが可能である。

基本層の対応関係については、基本土層注記表（第１表）において六反田遺跡第５次調査（前掲）の発掘調査における基本層および、六反田遺跡第２次調査（前掲）における基本層との対応関係を示した。以下、各層の特徴について記載する。



第２図　六反田遺跡基本層対応模式図

Ⅰ層：　2.5Y6/2（灰黄色）シルト
近代～現代の水田耕作土で層厚 10 ～ 30cm である。上面は盛土時に削平されている箇所があるが、調査範囲全域で確認される。下位には酸化鉄が集積する。

Ⅱ層：　今回の調査では確認できなかったが、六反田遺跡第５次調査では黒褐色～褐灰色の粘土質シルトを主体とする細別２層が確認されている。

Ⅲ層：　今回の調査ではⅢａ・Ⅲｂの２層に分層される。
Ⅲａ層：10YR4/1 ～ 10YR4/2（褐灰色～灰黄褐色）粘土質シルト
上面はマンガンが集積し、下面は起伏がみられる。層厚は 10 ～ 50cm である。六反田遺跡第２次調査および六反田遺跡第５次調査では平安時代の水田耕作土が検出されている。上面は 10 世紀初頭以降の遺構確認面である。
Ⅲｂ層：調査区東側の SI1 竪穴住居跡の上層に堆積しているⅢ層を、堆積状況から小溝状遺構 D 群の耕作土と考えられるⅢb-1 層と、灰白色火山灰を含むⅢb-2 層に細別した。Ⅲb-1 層は 10YR3/2（黒褐色）の粘土質シルト層である。10YR4/2（灰黄褐色）粘土質シルト、10YR5/4（にぶい黄褐色）粘土質シルトをブロック状に含み、下面はやや起伏している。
Ⅲb-2 層は 10YR4/2（灰黄褐色）のシルト質粘土層で、レンズ状に堆積する。灰白色火山灰を斑状に含むⅢb-2a 層、層状に含むⅢb-2b 層、あまり含まないⅢb-2c 層に細別される。

Ⅳ層：　10YR3/2（黒褐色）粘土質シルト
南側でマンガン粒を多く含む。Ⅳａ層・Ⅳｂ層の２層に細別されるが、土質に明瞭な差は認められない。いずれも下面は大きく起伏し、耕作土と考えられる。Ⅳａ層の層厚は 10 ～ 30cm。Ⅳｂ層はⅣａ層に伴う耕作の影響で残存しない箇所が多く、Ⅳａ層の耕作が及ばなかった範囲として５～ 10cm 程が途切れがちに確認された。六反田遺跡第２次調査における８層（奈良時代の遺構確認面）に相当すると考えられる。

Ⅴ層：　10YR5/4（にぶい黄褐色）シルト質砂～細粒砂　自然堆積層
酸化鉄を斑状に含み、北側ではグライ化がすすんでいる。層厚は 10 ～ 30cm である。下面の標高は南側がやや高く、上面は古代の遺構確認面である。六反田遺跡第２次調査における９層に相当する。

Ⅵ層：　10YR5/4（にぶい黄褐色）細砂～粗砂　自然堆積層
細砂を主体とするⅥａ層と、小礫をやや多く含むⅥｂ層とに細別される。南側では層厚 10 ～ 30cm である。北側では 50cm 程に層厚を増し、粘土や小礫などがブロック状に混入する。Ⅵａ層からは縄文土器片（後期末葉～晩期初頭）が１点出土している。土層の特徴から六反田遺跡第５次調査のⅦ層に相当すると考えられる。

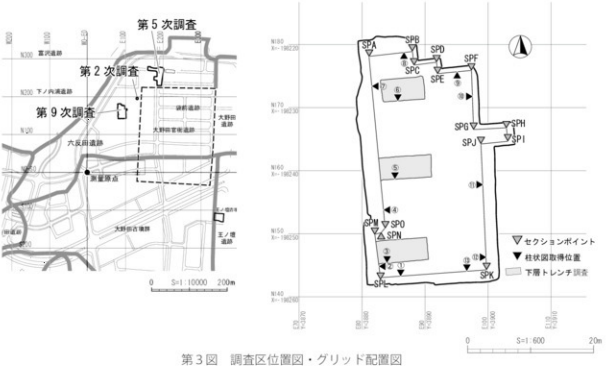
Ⅶ層：　10YR4/2（灰黄褐色）シルト質粘土　自然堆積層
層厚は 30 ～ 40cm である。

Ⅷ層：　2.5Y4/2（暗灰黄色）細砂　自然堆積層
炭化物を微量含む。層厚は 25cm ～ 40cm である。縄文土器（後期）細片が１点出土している。六反田遺跡第５次調査におけるⅧ層に相当する。

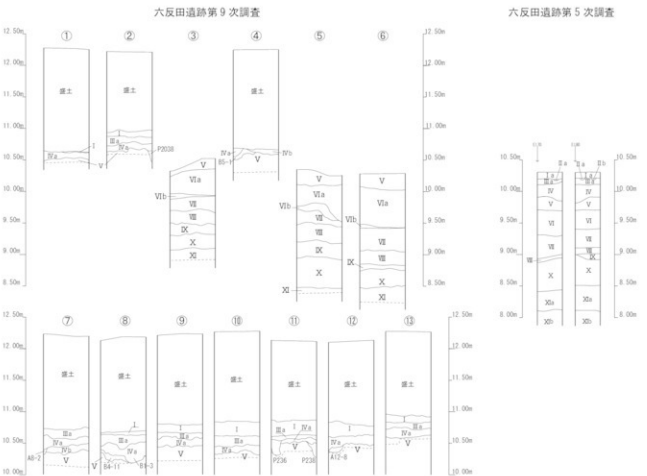
Ⅸ層：　2.5Y4/2 ～ 4/3（暗灰黄色～オリーブ褐色）粘土　自然堆積層
細砂を多く含み、炭化物を微量含む。層厚は 15 ～ 30cm である。

Ⅹ層：　2.5Y3/2（黒褐色）粘土　自然堆積層
炭化物を少量含む。層厚は 20 ～ 40cm である。Ⅹ層下面は縄文時代の土器細片が出土しているが、小片のため遺物の時期は不明である。

XI 層：　2.5Y4/2（暗灰黄色）細粒砂　自然堆積層
下位は砂質シルトで、調査範囲北側では礫をやや多く含む。



第３図　調査区位置図・グリッド配置図



第４図　基本層序柱状図

第５図　基本層序　東壁

第６図　基本層序　南壁・西壁（１）

第７図　基本層序　西壁（２）・北壁

基本層　調査区断面土層注記表

層位 大別	層位 細別	土色		土性	備考	六反田遺跡 第５次調査	六反田遺跡 第７次調査
Ⅰ		2.5Y6/2	灰黄色	シルト	砂をやや多く含む。畑の下位は酸化鉄が集積している。	Ⅰ	
Ⅱ	a	10YR4/1 ～ 10YR4/2	褐灰色 ～灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/2 暗灰黄色シルトを少量、2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルトをやや多く含む。植土位にマンガンが集積する。	Ⅱ	
	b-1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルトをやや多く、2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトを少量含む。酸化鉄斑紋状、マンガン粒状。		
	b-2a	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y6/2 灰黄色シルトを少量、2.5Y3/2 黒褐色粘土を部分的に偏状に含む。		
	b-2b	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	2.5Y6/2 灰黄色シルトを偏状に含む。		
	b-2c	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	2.5Y6/2 灰黄色シルト・10YR4/1 褐灰色シルト質粘土をやや多く含む。		
Ⅳ	a	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを含む。	Ⅳ	8
	b	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックをやや多く含む。		
Ⅴ		10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質砂		Ⅴ	9
Ⅵ	a	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質砂	細砂を多量に含む。礫文土器（後期末～晩期初頭）出土。	Ⅵ～Ⅹ	14～16
	b	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質砂	細砂～粗砂を多量、小礫をやや多く含む。		
Ⅶ		10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土			
Ⅷ		2.5Y4/2	暗黄褐色	細砂	炭化物微量含む。礫文土器（後期）出土。		
Ⅸ		2.5Y4/2 ～2.5Y4/3	暗黄褐色 ～オリーブ褐色	粘土	細砂分をやや多く、炭化物微量含む。		
Ⅹ		2.5Y3/2	黒褐色	粘土	炭化物微量含む。礫文土器細片出土。		
Ⅹ-1		2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	細砂分を多く含む。		

SI 1　住居跡　調査区断面内土層注記表

部位	層位	土色		土性	備考
住居堆積土	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	10YR4/1 褐灰色粘土質シルト・2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトを含む。
	2a	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	10YR4/1 褐灰色粘土質シルトをやや多く、2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトを少量含む。
	2b	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	10YR3/3 暗褐色シルトをやや多く、2.5YR5/4 黄褐色粘土質シルト小ブロックを少量含む。
	2c	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5YR3/4 黄褐色粘土質シルトブロックを多く含む。
	2d	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	10YR3/3 暗褐色シルト・2.5YR5/4 黄褐色粘土質シルトを少量含む。
貼床	3	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	10YR3/3 暗褐色シルトをやや多く、2.5YR5/4 黄褐色粘土質シルト小ブロックを部分的に多く含む。
	4	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトを少量含む。
周溝	5	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトをやや多く含む。
掘り方	6a	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトブロックをやや多く含む。
	6b	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトブロックをやや多く、炭化物粒・焼土粒を部分的にやや多く含む。
	7	2.5Y5/4	黄褐色	粘土質シルト	2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルトを粒状もしくはブロック状にやや多く含む。

SI 2　住居跡　調査区断面内土層注記表

対応面	部位	層位	土色		土性	備考
新段階住居	住居堆積土	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトを少量、焼土粒・炭化物粒を少量含む。
		2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトを少量、焼土粒・炭化物粒を少量含む。
	埋設堆積土	3a	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトブロックをやや多く含む。焼土粒・炭化物粒を少量含む。
		3b	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトを多く含む。
		4a	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト粒を多く、炭化物粒を少量含む。
		4b	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト粒を多く、炭化物粒をやや多く含む。
	埋設天井	5	7.5YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト粒を多く、炭化物粒を多量含む。
		6a	2.5Y5/3	黄褐色	粘土質シルト	埋設天井残存範囲。
		6b	10YR1.7/1	黒色	粘土質シルト	天井内壁の被熱範囲。
	埋設壁際	7	2.5Y5/3	黄褐色	粘土質シルト	被熱し炭化物が付着している。
	床直上堆積土	8	2/5Y4/1	黄灰色	粘土	2.5Y6/1 黄灰色粒を含む。
	周溝	9	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	2.5YR5/3 黄褐色粘土質シルト粒を少量、焼土・炭化物粒をやや多く含む。酸化鉄斑紋状。
		10	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物粒を少量含む。
	新床構築土	11	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトブロックを多量、焼土粒・炭化物粒を少量含む。
古段階住居	古段階住居埋設	12	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y4/4 オリーブ褐ブロックを多く含む。焼土粒・炭化物粒をやや多く含む。
		13	7.5YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	埋設痕跡。部分的に焼・被熱範囲が残存する。炭化物を含む。
	古床掘り方	14	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	2.5YR5/3 黄褐色粘土質シルトブロックをやや多く、焼土・炭化物粒を少量含む。
		15	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	2.5YR5/3 黄褐色粘土質シルトブロックを多量、焼土・炭化物粒をやや多く含む。
		16	2.5Y5/3	黄褐色	粘土質シルト	2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルトを少量含む。

第１表　調査区断面注記表

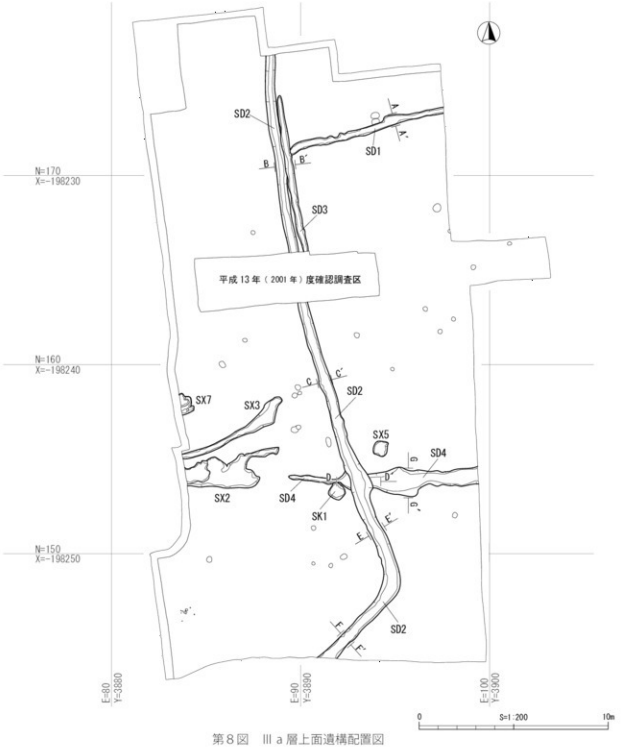
第３章　検出遺構と出土遺物

第１節　Ⅲａ層上面検出遺構

Ⅲａ層上面では層上位のマンガン集積層直下を遺構確認面とし、遺構検出作業を行った。Ⅲａ層の確認面標高は南西が最も高く 10.80m 前後であり、北東が最も低く 10.50 ～ 10.60m であった。一方、調査区南東ではⅢａ層は確認されず、Ⅰ層直下で暗褐色粘土質シルトのⅣａ層上面が確認されている。このように、Ⅲａ層の上位層が近現代の水田耕作土であるⅠ層であること、そのため本来のⅢａ層上面が残存していない可能性が高いことなどから、本項で扱う各遺構の正確な帰属時期は不明であるが、いずれも灰白色火山灰の降灰後の堆積

層中で検出されていることから、10 世紀初頭以降の遺構と考えられる。

確認された遺構は溝跡４条（SD １～４）、土坑１基（SK １）、性格不明遺構４基（SX ２・３・５・７）である。このうち、溝跡に関しては六反田遺跡第２次調査で平安時代の水田耕作土が確認されているため、水田区画に伴う溝跡の可能性も考えられる。土坑は遺構確認時に４基を確認したが、調査の結果 SK １のみを土坑として認定した。性格不明遺構は SX １～８を確認したが、SX ２と SX ４、SX ７と SX ８はそれぞれ同一の遺構であることから、SX ２、SX ７を遺構として認定した。また調査区南西端のⅢａ層中で遺物がまとまりを持って出土した範囲を SX １および SX ６としたが、遺構プランが確認できなかったことから、遺物出土分布図として第 15 図に示した。このため、SK ２～４、SX １・４・６・８が欠番となっている。



第８図　Ⅲａ層上面遺構配置図

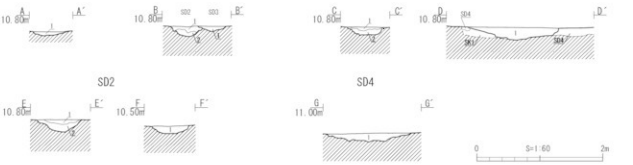
１．溝跡

（１）SD １溝跡（第８・９図、図版１）　N171 ～ 173・E89 ～ 97 グリッドで検出した。SD ３と重複関係にあり、本遺構が古い。検出した長さは 8.5m を測り、東端は調査区外へ延びる。主軸方向は E － 15° － N である。規模は幅 36 ～ 55cm、深さ２～ 5cm で、断面形は浅い皿型である。傾斜方向は明確には捉えられなかった。堆積土は１層で灰白色火山灰の薄層が観察される。遺物は土師器坏の細片が出土している。

（２）SD ２溝跡（第８・９図、図版１）　N144 ～ 176・E88 ～ 95 グリッドで検出した。SD ３・４と重複関係にあり、SD ３より古く SD ４より新しい。溝の形状は緩いカーブを描くＬ字状で、検出した長さは 34m を測るが、北端・南端ともに調査区外へ延びる。主軸方向は北側で N － 13° － W、南側で E － 46° － N である。溝の規模は幅 52 ～ 98cm、深さ 10 ～ 25cm で、断面形は浅い皿型である。傾斜方向は明確には捉えられなかった。堆積土は２層で、１層と２層の層離面には灰白色火山灰の薄層が観察される。遺物は土師器坏・甕、須恵器甕の細片が出土している。

（３）SD ３溝跡（第８・９図、図版１）　N166 ～ 174・E88 ～ 90 グリッドで検出した。SD ２と重複関係にあり、本遺構が新しい。検出した長さは 8.3m を測り、南端は削平される。主軸方向は N － 10° － W である。規模は幅 28 ～ 43cm、深さ 10 ～ 20cm で、断面形は浅い皿型である。傾斜方向は明確には捉えられなかった。堆積土は２層で、１層と２層の層離面には灰白色火山灰の薄層が観察される。遺物は須恵器坏・蓋・甕細片が出土している。

（４）SD ４溝跡（第８・９図、図版１）　N153 ～ 154・E89 ～ 99 グリッドで検出した。SD ２、SK １と重複関係にあり、本遺構が古い。検出した長さは 10m を測るが、東端は調査区外へ延びる。主軸方向は E － 0° ～ 1° － N である。規模は幅 22 ～ 134cm、深さ 10 ～ 15cm で、断面形は浅い皿型である。傾斜方向は明確には捉えられなかった。堆積土は１層である。遺物は土師器坏・甕細片、須恵器甕細片が出土している。



SD １溝跡　土層注記表

遺構	層位	土色	土性	備考
SD 1	1	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト	灰白色火山灰を微量含む。酸化鉄斑状沈。

SD ４溝跡　土層注記表

遺構	層位	土色	土性	備考
SD 4	1	2.5Y6/1	黄灰色	砂質シルト	灰白色火山灰を微量含む。酸化鉄斑状沈。

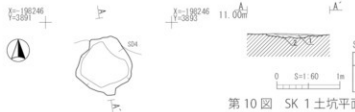
SD ２・３溝跡　土層注記表

遺構	層位	土色	土性	備考
SD 2	1	2.5Y6/1	黄灰色	砂質シルト	酸化鉄斑状沈。
	2	2.5Y5/1	黄灰色	砂質シルト	灰白色火山灰を微量含む。酸化鉄斑状沈。
SD 3	1	2.5Y6/1	黄灰色	砂質シルト	酸化鉄斑状沈。

第９図　SD １～４溝跡断面図

２．土坑

（１）SK １土坑（第 10 図）　N152 ～ 153・E91 ～ 92 グリッドで検出した。SD ４と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形は不整円形で、規模は長軸・短軸ともに 95cm、深さ５～ 10cm を測る。断面形は皿状で、壁面は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸が見られる。堆積土は２層である。遺物は出土していない。

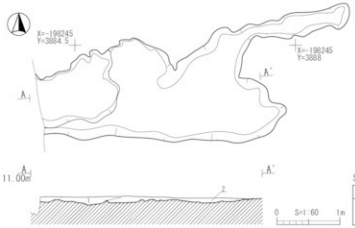


SK１土坑　土層注記表

遺構	層位	土色	土性	備考
SK１	1	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂質シルト	植下部に酸化鉄集積。
	2	5YR5/2	灰褐色	シルト	マンガン粒多量。

第 10 図　SK１土坑平面図・断面図

３．性格不明遺構

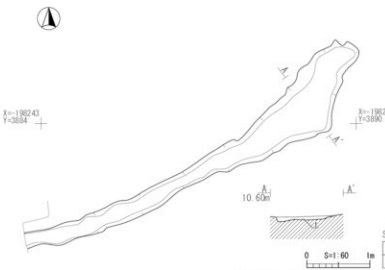


（１）SX２性格不明遺構（第 11 図）　N153 ～ 154・E83 ～ 85 グリッドで検出し、西端は調査区外へ延びる。平面形は不整形で、規模は長軸 122cm、短軸 78cm、深さ 15 ～ 20cm を測る。断面形は皿状で、壁面は緩やかに立ち上がり、遺構底面はやや凹凸が見られる。堆積土は２層で、土師器細片が出土している。

SX２　土層注記表

遺構	層位	土色	土性	備考
SX２	1	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト	酸化鉄斑状に。
	2	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト	マンガン粒・酸化鉄斑状に。

第 11 図　SX２性格不明遺構平面図・断面図

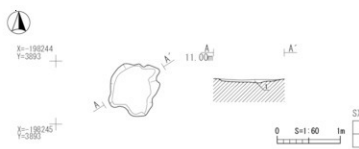


（２）SX３性格不明遺構（第 12 図）　N155 ～ 158・E83 ～ 89 グリッドで検出し、西端は調査区外へ延びる。平面形は溝状で、主軸方向は E － 30°－ N である。南側に位置する SX2 性格不明遺構と堆積状況が類似するため、関連性を考慮して溝跡ではなく性格不明遺構とした。規模は長軸 608cm、短軸 32 ～ 91.5cm、深さ 10 ～ 15cm である。断面形は皿状で、壁面は緩やかに立ち上がり、遺構底面はわずかに凹凸が見られる。堆積土は１層で、土師器坏細片、須恵器甕細片が出土している。

SX３　土層注記表

遺構	層位	土色	土性	備考
SX３	1	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト	マンガン粒・酸化鉄斑状に。

第 12 図　SX３性格不明遺構平面図・断面図

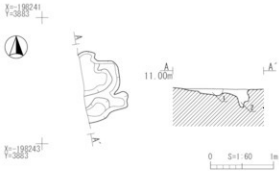


（４）SX５性格不明遺構（第 13 図）　N155・E93 ～ 94 グリッドで検出した。平面形は不整円形で、規模は長軸 96cm、短軸 74cm、深さ 10cm である。断面形は皿状で、底面は凹凸が見られる。堆積土は１層で、遺物は出土していない。

SX５　土層注記表

遺構	層位	土色	土性	備考
SX５	1	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト	マンガン粒・酸化鉄斑状に。

第 13 図　SX５性格不明遺構平面図・断面図



（5）SX 7 性格不明遺構（第 14 図）　N157 ～ 158・E83 ～ 84 グリッドで検出し、西側の調査区外へ延びる。平面形は不整形と思われ、規模は長軸 110cm、短軸 70cm、深さ 10 ～ 30cm である。断面形は皿状で、底面は起伏する。堆積土は 2 層で、遺物は出土していない。

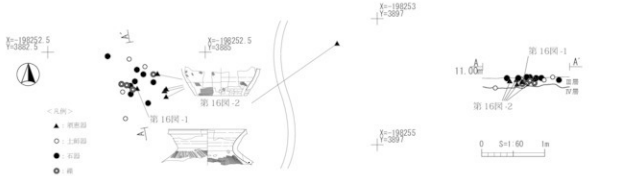
SX 7　土層注記表

遺構	層位	土色		土性	備考
SX 7	1	5Y5/1	灰色	粘土質シルト	地下部に酸化鉄多量。
	2	5YR4/2	灰褐色	粘土質シルト	酸化鉄斑状。

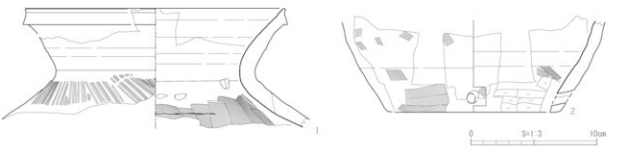
第 14 図　SX 7 性格不明遺構平面図・断面図

4．遺構外出土遺物

（1）Ⅲ a 層遺物出土範囲（第 15・16 図、図版 11）　調査区南西の N146 ～ 148・E83 ～ 85 グリッド周辺の基本層Ⅲ a 層中では遺物がまとまって出土した。須恵器の破片、非ロクロ土師器坏の破片、石器、被熱した礫等が出土したが、遺物に伴う明瞭なプランは確認できなかったため、出土位置を平面図と垂直分布図として示した。これらの遺物のうち、須恵器甕 1 点と須恵器甑 1 点を第 16 図に図示した。1 は須恵器甕である。外側へ張り出す肩部から頸部へ直角に近い角度で屈曲し、緩やかに外反して口縁部へいたる器形である。口唇部は面を持ち、外面側がわずかに垂下する。外面肩部に平行タタキ目が、内面にはヘラナデによる調整痕が観察される。2 は甑の体下半から底部と推測される。底部下端付近に焼成前に施された穿孔を四方に有すると推測される。調整は、外面にヘラナデ、内面はヘラナデ後、胴部下端付近でヘラケズリが施された痕が観察される。



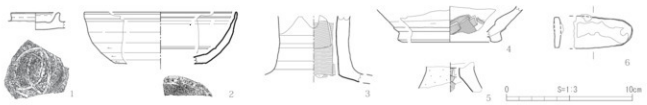
第 15 図　Ⅲ a 層遺物出土分布図



図版番号	登録番号	出土位置			種別	器種	部位	法量（cm）			外面調整	内面調整	備考	写真図版
		グリッド	遺構	層位				口径	底径	器高				
16-1	E-001	N147 E84	—	準粘土	須恵器	甕	口縁～肩	(20.5)	—	(9.5)	口縁～頸：ロクロ調整、肩：平行タタキ目	口縁～頸：ロクロ調整、肩：ヘラナデ	内面に工具痕	11-1
16-2	E-002	N147 E85	—	準粘土	須恵器	甑	胴下半～底	—	(13.7)	(7.2)	ロクロ調整、ヘラナデ	ロクロ調整、 ヘラナデ→胴下端：ヘラケズリ	焼成前穿孔、四孔と思われる	11-2

第 16 図　Ⅲ a 層出土遺物（1）

（２）その他の出土遺物（第 17 図、図版 11）　基本層Ⅲａ層では、土師器片 313 点、須恵器片 58 点の他、縄文土器・弥生土器の破片、石器などが出土している。土師器は主として非ロクロ整形の坏・甕の破片であり、ロクロ土師器は細片１点のみの出土であった。須恵器は甕の破片が 37 点とやや多い。出土遺物の中から須恵器４点と、土師器１点、金属製品１点を第 17 図に図示した。１は須恵器蓋の凹状摘み部分である。内面に当て具痕が観察される。２は須恵器坏である。底部を欠損する。体部下半から口縁部に向かって緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部と体部との境に段を有し、内面体部下半には沈線状の稜を有する器形である。調整は、外面体部下半から底部外周に回転ヘラケズリ整形が施される。３は須恵器長頸瓶の頸部である。口縁及び体部を欠損しており全体の形状は不明である。ロクロ調整で、内面付け根部分にヘラケズリ、頸部にヘラナデを施された痕跡が観察される。４は須恵器の壺の底部と推測される。口縁から体部上半は欠損しており全体の器形は不明である。調整は、外面体部にロクロ調整後下端に回転ヘラケズリ、底部高台貼付け後ナデが施される。内面はロクロ調整後ヘラナデが施され、下端の一部に自然釉が付着する。５は土師器器台の脚部付け根の破片である。受け部及び脚部下半は欠損するため全体の器形は不明である。調整は、外面は摩滅のため判然としない。内面はヘラナデが施され、わずかにヘラミガキの痕跡が観察される。６は刀子の柄の一部である。



図版番号	登録番号	出土位置			種別	器種	部位	法量（cm）			外面調整	内面調整	備考	写真図版
		グリッド	遺構	層位				口径	底径	器高				
17-1	E-003	N161 E89	—	Ⅲ層	須恵器	蓋	つまみ	—	—	1.4	ロクロ調整	ロクロ調整、あて具痕	自然釉付着、凹型つまみ	11-3
17-2	E-005	N152 E97	—	Ⅲ層	須恵器	坏	口縁～体部	(12.0)	—	(4.5)	ロクロ調整、体下半：回転ヘラケズリ	ロクロ調整		11-4
17-3	E-006	N153 E88	—	Ⅲ層	須恵器	長頸瓶	頸部	—	—	(5.1)	ロクロ調整	ロクロ調整、ヘラナデ、頸部基：ヘラケズリ		11-5
17-4	E-004	N158 E85	—	Ⅲ層	須恵器	長頸壺	底部	—	(7.2)	(2.8)	ロクロ調整、下端：回転ヘラケズリ→高台貼付	ロクロ調整、下端ヘラナデ	内面の一部に釉が残存	11-6
17-5	C-001	N158 E94	—	Ⅲ層	土師器	器台	受け部	孔径 (1.4)	—	(2.4)	摩滅	ヘラナデ、ヘラミガキ	内外面摩滅	11-7

図版番号	登録番号	出土位置			種別	器種	法量（cm）			重量	備考	写真図版
		グリッド	遺構	層位			全長	幅	厚さ	(g)		
17-6	N-001	N149 E98	—	Ⅲ層	金属製品	刀子	(4.7)	(2.6)	(0.8)	20.3	柄の一部　刃部欠損	11-8

第 17 図　Ⅲａ層出土遺物（２）

第２節　Ⅴ層上面検出遺構

基本層Ⅴ層は自然堆積層であり、上面は基本層Ⅳ層に伴う耕作痕や遺構掘り方等による凹凸が見られる。このため層上面の標高は一定ではないが、おおよそ南から北に下り傾斜する傾向がうかがえる。このうち南西が最も高く標高 10.65m 前後であり、北西が最も低く標高 10.28m 前後である。一方、東側の標高は北東で 10.45m 前後、南東で 10.40m 前後で南北間の高低差はあまり無い。標高値の高い南西では N147 － E83 グリッド付近のⅢａ層中では遺物がまとまって出土しており、N146 ライン以南のⅣａ層中でも多くの遺物が出土した。このため検出面をⅣ層が残存する高さに設定し、小溝状遺構の調査を行なった後、確認面を下げて下位の遺構 SI2 の検出作業を行った。Ⅴ層上面では小溝状遺構 17 群、溝跡２条、土坑 17 基、性格不明遺構１基、竪穴住居跡２軒、掘立柱建物跡７棟の他、多数のピットを検出した。検出した遺構については他の遺構との重複関係の観察から、大別９期に区分されることが明らかとなったが、これについては第４章で述べる。

以下、検出された遺構と遺構内出土遺物について、遺構の種別ごとに報告する。

１．竪穴住居跡

Ⅴ層上面では２軒の竪穴住居跡 SI １・SI ２を検出した。SI １は調査区中央東側に位置し、SI ２は調査区南端に位置する。ともに調査区内で遺構の全範囲を確認することはできなかった。Ⅴ層上面で検出した遺構の中で最も古い時期に属する遺構である（第３章第２節参照）。以下、各竪穴住居跡について個別に記載する。

（１）SI １竪穴住居跡（第 19 ～ 23 図、図版３・４・11）

【位置・確認】調査区中央東側 N161 ～ 170・E94 ～ 103 で、竪穴住居跡全体の 2/3 程を検出した。北東部および南東部の隅は調査区外に延びる。床面は１面であるが、柱の建て替えが行われている。

【新旧関係】小溝状遺構 B17 群・C ３群・D ２群と重複関係にあり、本遺構が古い。

【規模・形態】検出した規模は、南北約 8.5m、東西約 8m を測り、平面形は隅丸方形を呈する。

【主軸方位】西壁基準で N － 6 ～ 7° － W である。

【堆積土・構築土】大別７層に分層した。１～４層は住居内堆積土である。堆積土上位には住居跡の凹地に堆積したⅢ b-1 層と灰白色火山灰を含むⅢ b-2 層がある。Ⅲ b-2 層は灰白色火山灰の堆積状況からⅢ b-2a ～Ⅲ b-2c 層に細別される。住居堆積土である１層は、レンズ状に堆積しており、下面は起伏していない。２層は 2a ～ 2d 層まで細別することができる。2a 層は黄褐色粘土質シルトをブロック状にやや多く含む層で、小溝状遺構 B17 群の耕作土である。住居床面にこの小溝状遺構の掘り方が部分的に確認されている。３層は床面直上の堆積土で、４層は住居壁際に堆積している。５層は周溝内堆積土であり、６～７層は掘り方である。６層は暗褐色系の粘土質シルトのブロックを多く含み、焼土・炭化物等を多く含む層を 6b 層として細別した。

【壁面】やや外傾しながら、緩やかに立ち上がっている。壁際の堆積土の状況から、壁材を立てたのちに掘り方との間を埋め戻し、壁面を構築している状況が確認できる部分がある。壁面の一部を小溝状遺構 B17 群に削平される。残存する壁高は、北西で 45cm 前後、南西で 45 ～ 50cm 前後、東側で 30cm 前後を測る。

【床面】ほぼ平坦だが、住居の南壁際と東壁際では床面がやや高くなり、５～ 10cm の高低差を生じる。

【柱穴】P １～ P20 を確認した。P １～ P ６は床面で確認し、P ７～ P14 は掘り方調査中に確認した。柱穴の重複状況等から、柱の建て替えが行われたと考えられる。

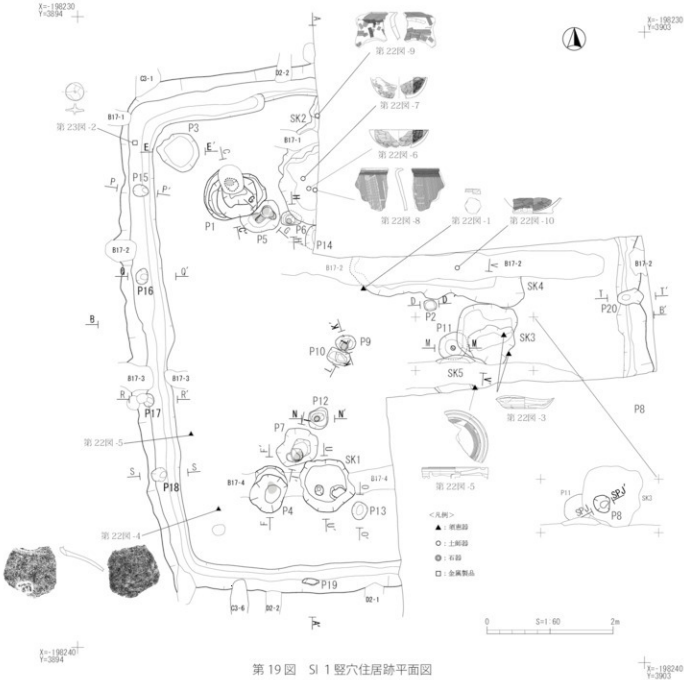
主柱穴は P １・P ４・P ５・P ７が相当し、P １・P ４は新段階の主柱穴、P ５・P ７は古段階の主柱穴と考えられる。

P １は北西の主柱穴で、規模は長軸約 100cm、短軸約 84cm、深さ約 100cm を測る。底面で柱痕跡を確認しているが、柱は抜き取られた跡があり住居内堆積土２層に類似する堆積土が混入する。P ４は南西の主柱穴で、規模は長軸約 60cm、短軸約 55cm、深さ約 62cm を測る。上部を小溝状遺構 C17 群に削平されるが、柱痕跡が残存している。P ５は北西の古段階主柱穴で、柱穴の北西で P １と重複する。残存する規模は長軸 64cm、短軸 45cm、深さ約 83cm を測る。底面には径 10cm 前後、深さ 5cm 程度の凹みが確認され、柱痕跡と考えられる。柱痕跡は、円形に変色した箇所も含め３箇所確認されており、複数回の建て替えが行われたと考えられる。柱は抜き取り後、埋め戻され P １が構築されている。堆積土４層中から被熱した礫が出土している。P ７は南西の古段階主柱穴で、規模は長軸約 70cm、短軸約 60cm、深さ約 87cm を測る。柱は抜き取られ埋め戻されている。２層は柱痕跡で底面は円形に変色化し、周囲に酸化鉄が集積する。

P ６、P ８～ P12 は柱痕跡を持つ。いずれの柱穴も柱は抜き取られた後、埋め戻されており、底面では柱痕跡が深さ５cm 程の凹みとして確認された。P11 の１層は柱痕跡で、底面に径 10cm、深さ 10cm 程の凹みが確認された。P ６・P ９・P12 の柱痕跡では底部の浅い凹みに、褐灰色の変色が認められる。各柱穴の規模は一辺が 30cm 前後で、深さは 40 ～ 50cm 前後である。これらの柱穴はその規模と位置から、床面の間仕切り等の施設に伴うものであった可能性がある。

P15 から P20 は壁柱穴と考えられ、主柱穴の延長線上の壁面に位置している。住居西壁では、約 120 ～ 190cm 間隔で４穴が検出された。これらの柱穴の規模は 20 ～ 30cm 前後、検出した深さ約 10 ～ 50cm で、

第18図　Ⅴ層上面遺構配置図



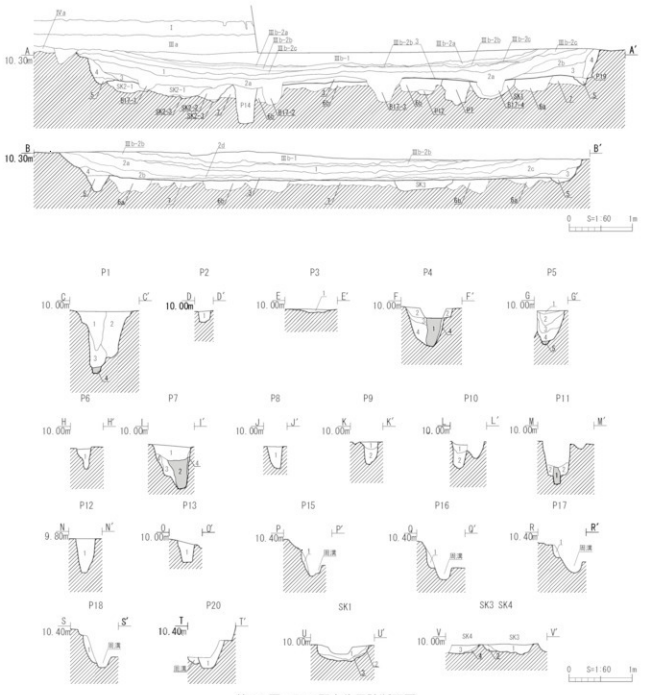
第 19 図　SI 1 竪穴住居跡平面図

掘り方はほぼ垂直に立ち上がる。

【周溝】壁際をほぼ全周する。溝幅 15 ～ 25cm、深さ 10 ～ 25cm を測る。北側では幅が狭くなり、規模が小さくなる。

【カマド】調査範囲からは確認されなかったが、調査区東壁・北壁断面において焼土・炭化物を多量に確認していることから、住居北壁中央に位置していたと考えられる。

【その他の施設】土坑状遺構として SK 1 ～ SK 6 を確認した。SK 1 は住居南西に位置する。小溝状遺構 B17- 4 に削平され、堆積土の一部は消失している。SK 2 は推定されるカマドの西側に位置し、調査区北壁外に延びる。1 層は焼土・炭化物を多く含み、やや乱れた層状に堆積する。SK 3 は住居中央からやや東寄りに位置する。土坑底面から P 8 が確認された。形状は不整形で、堆積土の状況から施設の建替えに伴って掘り返した床面構築土



第 20 図　SI １竪穴住居跡断面図

SI １住居跡　床面施設観察表

遺構名	平面形	規模（cm）	深さ（cm）	備考
SK1	不整円	84 × (84)	24	
SK2	不整形	(200) × (60)	19	調査区東壁外に延びる。
SK3	不整形	110 × 90	14	
SK4	不整形	280 × (90)	21	調査区北壁外に延びる。
SK5	不整形	(70) × (60)	15	
SK6	隅丸方形	50 × (30)	15	擬り方下で検出。
P1	不整円	100 × (84)	100	主柱穴。柱痕跡２箇所。
P2	不整円	20 × 20	16	
P3	不整円	70 × 60	17	
P4	不整円	60 × 55	62	主柱穴。柱痕跡１箇所。
P5	不整円	64 × (45)	83	柱痕跡３箇所。
P6	不整楕円	30 × 20	50	柱穴と思われる。
P7	不整円	70 × 60	87	柱痕跡１箇所
P8	不整円	25 × 25	38	SK3 下面で検出。柱穴と思われる。
P9	不整楕円	35 × 25	42	擬り方で検出。柱痕跡１箇所。
P10	不整楕円	35 × 25	47	擬り方で検出。柱穴と思われる。
P11	隅丸方形	50 × 40	78	擬り方で検出。柱痕跡１箇所。
P12	隅丸方形	35 × 30	53	擬り方で検出。
P13	不整円	30 × 25	23	擬り方で検出。
P14	不整円	(40) × (15)	49	擬り方で検出。柱穴と思われる。
P15	不整円	25 × 20	6	壁柱穴
P16	不整円	25 × 20	40	壁柱穴
P17	不整円	20 × (15)	20	壁柱穴
P18	不整形	30 × 20	46	壁柱穴
P19	不整円	25 × 10	38	壁柱穴
P20	不整円	40 × 25	37	壁柱穴

第２表　SI １竪穴住居跡床面施設観察表

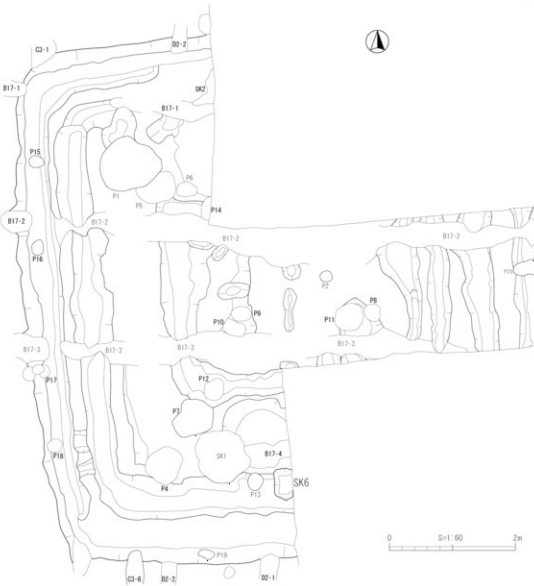
SI 1竪穴住居跡　A断面・B断面土層注記表

部位	層位	土色		土性	備考
基本層	Ⅲb-1	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルトをやや多く、2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトを少量含む。酸化鉄斑紋状。マンガン粒状。
	Ⅲb-2a	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y6/2 灰黄色シルトを少量、2.5Y3/2 黒褐色粘土を部分的に層状に含む。
	Ⅲb-2b	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト	2.5Y6/2 灰黄色シルトを層状に含む。
	Ⅲb-2c	2.5Y4/1	黄灰色	シルト質粘土	2.5Y6/2 灰黄色シルト・10YR4/1 褐灰色シルト質粘土をやや多く含む。
住居堆積土	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	10YR4/1 褐灰色粘土質シルト・2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトを含む。
	2a	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	10YR4/1 褐灰色粘土質シルトをやや多く、2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトを少量含む。
	2b	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	10YR3/3 暗褐色シルトをやや多く、2.5YR5/4 黄褐色粘土質シルト小ブロックを少量含む。
	2c	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5YR5/4 黄褐色粘土質シルトブロックを多く含む。
	2d	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	10YR3/3 暗褐色シルトをやや多く、2.5YR5/4 黄褐色粘土質シルトを少量含む。
	3	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	10YR3/3 暗褐色シルト・2.5YR5/4 黄褐色粘土質シルト小ブロックを部分的に多く含む。
	4	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトを少量含む。
周溝	5	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトをやや多く含む。
掘り方	6a	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトブロックをやや多く含む。溝状の掘り方外周の堆積土。
	6b	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトブロックをやや多く、炭化物粒・焼土粒を部分的にやや多く含む。
	7	2.5Y5/4	黄褐色	粘土質シルト	2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルトを粒状もしくはブロック状にやや多く含む。
SK2	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトを少量、焼土粒・炭化物粒をやや多く含む。
	2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトを多量、焼土粒・炭化物粒を多量含む。
	3	2.5Y5/4	黄褐色	粘土質シルト	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルトを少量、焼土粒・炭化物粒を少量含む。

SI 1竪穴住居跡　施設土層注記表

断面	部位	層位	土色		土性	備考
C	P1	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y5/3 黄褐色シルト質粘土を少量、炭化物を多量、焼土粒を微量含む。
		2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	炭化物をやや多く、焼土粒を微量含む。
		3	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y5/3 黄褐色シルト質粘土を少量、炭化物を微量含む。
		4	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	柱痕跡。2.5Y5/3 黄褐色シルト質粘土をやや多く含む。
D	P2	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土粒を多量含む。
E	P3	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	炭化物を多量、焼土粒・2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土少量含む。
F	P4	1	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	柱痕跡。炭化物・焼土粒を微量含む。
		2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土をやや多く含む。
		3	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土を少量、炭化物を微量含む。
		4	2.5Y4/3	黄褐色	粘土質シルト	焼土粒を微量含む。
G	P5	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土をやや多く、炭化物・焼土粒を微量含む。
		2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質粘土を微量含む。
		3	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土を少量、焼土粒を微量含む。
		4	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土ブロックを多量含む。焼土・炭化物を多量含み、被熱した礫が出土している。
		5	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	柱痕跡。2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土をやや多く、炭化物を微量含む。
H	P6	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質粘土・炭化物を微量含む。
I	P7	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	炭化物・マンガンを少量含む。
		2	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	柱痕跡。2.5Y5/3 黄褐色シルト質粘土をやや多く含む。
		3	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質粘土を少量含む。
		4	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質粘土を微量含む。
J	P8	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルトをやや多く、炭化物・焼土粒を微量含む。
K	P9	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルトを少量、2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルトを微量含む。
		2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土をやや多く含む。
L	P10	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルトをやや多く、2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土を少量含む。
		2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土を少量含む。
M	P11	1	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	柱痕跡。焼土粒を微量含む。
		2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土・炭化物を少量含む。
N	P12	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土をやや多く、炭化物を多量に含む。
O	P13	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質粘土を少量、焼土粒を微量含む。
A	P14	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルトをやや多く、2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土を少量含む。
P	P15	1	2.5YR4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色シルト質粘土小ブロックをやや多く、焼土粒を微量含む。
Q	P16	1	2.5YR4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色シルト質粘土小ブロックを含む。
R	P17	1	2.5YR4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色シルト質粘土小ブロックを含む。
S	P18	1	2.5YR4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色シルト質粘土小ブロックを含む。
A	P19	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルトを少量、2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルトを微量含む。
T	P20	1	10YR4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色シルト質粘土小ブロックをやや多く、焼土粒を微量含む。
U	SK1	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	10YR4/1 褐灰色土ブロック・焼土ブロック・炭化物をやや多く含む。
		2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	焼土粒・炭化物少量含む。
		3	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルトブロックをやや多く、焼土粒・炭化物を少量含む。
V	SK3・SK4	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	焼土ブロック・炭化物を少量含む。SK3 堆積土。
		2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質粘土をやや多く含む。SK3 堆積土。
		3	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	焼土粒を少量、炭化物を多量含む。SK4 堆積土。
		4	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質粘土少量、炭化物微量含む。SK4 堆積土。

第３表　SI 1竪穴住居跡土層注記表

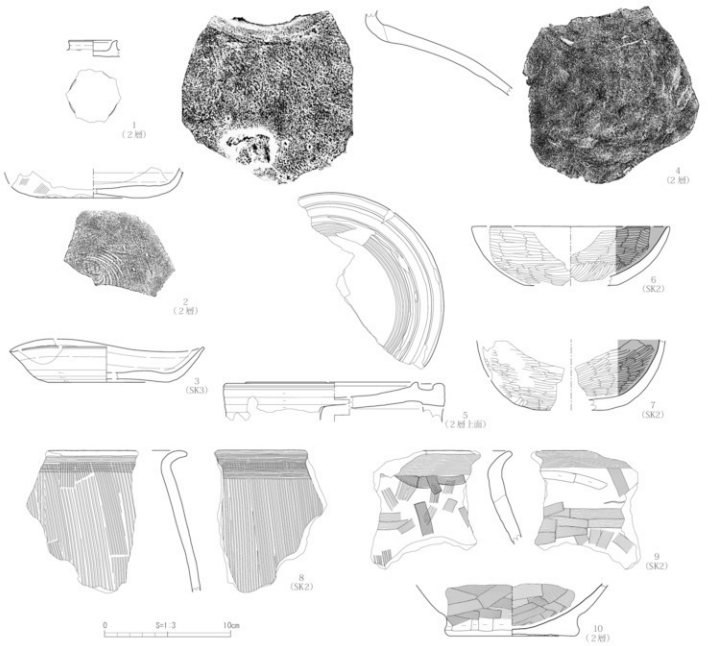


第 21 図　SI 1竪穴住居跡掘り方平面図

を埋めたことが推測される。SK 4は住居中央よりやや北側に位置する。調査区北壁外に延びるやや大型の掘りこみを確認した。焼土・炭化物をやや多く含み、形状は不整形で東西に長い。SK 5はSK 3の南西直近で確認した。焼土・炭化物を多く含む。小溝状遺構 B17-3に大きく削平され、残存状況は悪い。SK 6は住居南側の掘り方底面に位置し、調査区東壁外に延びる。わずかに被熱を受けた焼土ブロックを多量に含む。

【掘り方】中央は平坦だが、住居壁に沿って溝状の掘り方を２重に持つ。

【出土遺物】Ⅲb-2 層中から１層上面で出土したものと、２層中および床面付近で出土したものとに大きく二分される。遺物は出土数が多い順に土師器甕破片、土師器坏破片、須恵器甕破片、須恵器坏破片などが出土している。他、須恵器円面硯の破片、須恵器蓋、石製品、金属製品、被熱を受けた自然礫等が出土している。このうち須恵器蓋１点・坏２点・甕１点・円面硯１点の５点、土師器坏２点・甕３点の５点を第 22 図に、金属製品２

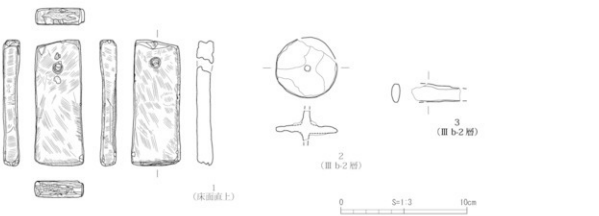


図版番号	登録番号	出土位置			種別	器種	部位	法量（cm）			外面調整	内面調整	備考	写真図版
		グリッド	遺構	層位				口径	底径	器高				
22-1	E-010	N166E99	SI1	2層	須恵器	蓋	つまみ	—	—	—	ロクロ調整	ロクロ調整	外面：自然釉付着、内面つまみ	11-9
22-2	E-009	N180～183 E96～99	SI1	2層	須恵器	坏	体下半～底	—	(8.7)	(2.4)	ロクロ調整、底部：回転糸切り →体下半：手持ちヘラケズリ	ロクロ調整		11-10
22-3	E-008	N166E101	SI1	SK3	須恵器	坏	口縁～底	15.4	9.4	2.7～3.5	ロクロ調整、体下半～底：回転ヘラケズリ	ロクロ調整	内外面自然釉付着、歪みあり	11-11
22-4	E-011	N163E97	SI1	2層	須恵器	甕	体上半	—	—	(6.7)	平行タタキ目	ヘラナデ、指頭圧痕	外面煤減、自然釉付着	11-12
22-5	E-012	N180～183 E92～95	SI1	2層上面	須恵器	円面硯	上面部	17.4	—	(3.1)	外面：回転ヘラケズリ、海：カキメ、ナデ	回転ヘラケズリ	台部透かし三窓	11-13
22-6	C-004	N168E98	SI1	SK2	土師器	坏	口縁～体下半	(15.6)	—	(3.7)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	内面黒色処理	11-14
22-7	C-006	N168E98	SI1	SK2	土師器	坏	体～底	—	(9.0)	(5.6)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	内面黒色処理	11-15
22-8	C-007	N168E98	SI1	SK2	土師器	甕	口縁～体上半	—	—	(11.2)	頸～体：ハケメ→口縁：ヨコナデ	頸～体：ハケメ→口縁：ヨコナデ	土孔２種	11-16
22-9	C-008	N168E98	SI1	SK2	土師器	甕	口縁～体上半	—	—	(9.4)	体：ハケメ→ヘラナデ、口縁～頸：ヨコナデ	体：ハケメ→ヘラケズリ、口縁～頸：ヘラナデ	外面煤減、内外面煤減	11-17
22-10	C-005	N167E101	SI1	2層	土師器	甕	体下半～底	—	(10.0)	(4.1)	底外面：ヘラケズリ→体：ヘラナデ	ヘラナデ	底部に木葉痕	11-18

第 22 図　SI 1 竪穴住居跡 出土遺物（1）

点、石製品１点を第 23 図に図示した。

第 22 図１は須恵器蓋の凹状摘み部分である。摘みの周囲は意識的に打ち欠いたものと考えられる。２は須恵器坏の底部のみで全体の器形ははっきりしない。平底で回転糸切り後、外周に手持ちヘラケズリ整形が施される。３の須恵器坏は平底で外傾し直線的に立ち上がる器形である。体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリ整形が施される。４は須恵器甕の頸部下端から肩部にかけての破片である。外面には平行タタキ目が、内面はあて具痕をナデ消している。５は円面硯である。脚部下半を欠損しているが、中程に方形の透かしが設けられる。硯側及び海は緩やかに窪み、堤は台形状である。外側面に回転ヘラケズリ調整が施される。６および７は土師器坏である。６は平底、７は丸底と考えられ、体部から口縁部にかけて緩やかに内湾して立ち上がり、外面の口縁と体部の境に稜を持たない器形である。調整は双方とも内面・外面ともヘラミガキが施され、内面はヘラミガキが施された後、黒色処理される。８・９は土師器甕口縁部から胴部の破片で、いずれも外面の口縁と胴部の境には段を持たず、口縁部は８がやや弱く、９がやや強く外反する。ともに、胴部の最大径は中位に持つものと考えられる。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、胴部が、８は内外面とも縦方向にハケメ調整が施される。９は外面にハケメの後ヘラナデ、内面はヘラケズリの後ヘラナデ調整が施される。10 は台状の底部から緩やかに内湾しながら立ち上がる甕の底部である。外面は体部下端にヘラケズリ、体部及び内面はヘラナデ調整が施される。



図版番号	登録番号	出土位置 グリッド	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm) 全長	幅	厚さ	調整角 (度)	重量 (g)	石材	母岩	自然面	備考	写真図版
23-1	Kd a-001	N168 E96	SI1	床面直上	石製品	砥石	10.0	3.9	1.3	—	86.04	粘板岩	—	無	孔１つ有（両面穿孔）、砥面４面。	11-19

図版番号	登録番号	出土位置 グリッド	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm) 全長	幅	厚さ	重量 (g)	備考	写真図版
23-2	N-003	N169 E95	SI1	Ⅲ b-2 層	金属製品	紡錘車	(2.6)	径 4.7	—	26.27		11-20
23-3	N-004	N164 ～ 167 E100 ～ 103	SI1	Ⅲ b-2 層	金属製品	刀子	(3.9)	(1.45)	0.6	5.33	柄の一部。	11-21

第 23 図　SI１竪穴住居跡 出土遺物（２）

第 23 図１は砥石である。砥面は４面である。表面上面に両面（表→裏）から穿孔され、表面には穿孔初期段階のものと考えられる窪みがある。上下両端部には溝状の風化面を留めており、粗い条痕は砥石成形時のものと思われる。石材は粘板岩である。

２は鉄製の紡錘車と思われる。３は刀子の柄の一部と考えられる破片である。両端を欠損する。

（２）SI ２竪穴住居跡（第 24・25 図、図版４・５・11）

【位置・確認】N145 ～ 146 － E88 ～ E92 グリッドで竪穴住居跡全体の 1/2 程を検出した。この周辺はⅤ層確認面の中で最も標高値の高い範囲に相当する。

【新旧関係】小溝状遺構 A14 群、B ５・７群と重複し、最も古い。調査最終時に SI ２を含めた調査区南壁断面の再確認を行い、拡張が行われたことを確認した。当初掘り方と認識していた上位床面下の堆積土 11 層は古い床面を埋めたものであり、新段階の床面構築時には住居西壁を共有しつつ北壁・東壁を若干拡張したものと考えられる。以下、新段階住居、古段階住居に分けて各床面で検出された遺構について記載する。

新段階住居

【規模・形態】東西軸約 4.2 m、南北軸は約 1.6m 以上で、遺構の南半部は調査区外へ延びる。

【主軸方位】煙道基準で E － 8°－ N である。

【堆積土・構築土】大別 11 層を確認した。１層は、黒褐色粘土質シルトで、堆積状況から小溝状遺構 A12 群および A14 群に伴う耕作土の可能性がある。２層は、住居西壁沿いに堆積する。３層から５層は煙道堆積土である。３層及び４層は、堆積状況からそれぞれ細別される。５層は、煙道底面直上の堆積土である。６層は、煙道天井がブロック状に残存する範囲である。７層は、煙道奥壁の被熱範囲である。８層は、黄灰色粘土層で、床直上に薄く堆積する。９層及び 10 層は周溝内堆積土で、９層は東壁から北壁にかけて、10 層は西壁沿いに堆積する。11 層は、新段階床面構築土である。層上位は、黄褐色土の割合が高い。

【壁面】やや外傾して立ち上がる。北壁は、小溝状遺構 B5 群に大きく削平される。

【周溝】残存範囲において、ほぼ全周する。西壁沿いの周溝は、やや深い。

【カマド】カマド本体は残存しないが、煙道位置から東側に構築されていたものと考えられる。調査区南壁において、煙道入り口から奥壁までを確認した。煙道天井が一部残存する。

【その他の施設】柱穴は確認されず、土坑状遺構 SK １を確認した。カマド火床面前面に位置していたと考えられ、焼土・炭化物を多量に含む。

【掘り方】掘り方は持たず、旧段階床面上から 10 ～ 15cm 前後床面を上げて構築している。

【出土遺物】新段階の床面直上で比較的残存状況の良好な土師器坏が出土した。うち２点を第 25 図に図示した。１は平底で、体部から口縁まで直線的に立ち上がり、口縁部と体部との間に段や稜を持たない。調整は外面口縁にヨコナデ、体部に一部ヘラミガキが観察される。また、体部下半から底部にはヘラケズリが施され、底部に「×」の刻書が見られる。内面は全面に磨きが施された後黒色処理が施される。２は丸底で口縁部まで緩やかに内湾して立ち上がる器形である。表面が摩耗しておりはっきりしないが、外面底部にヘラケズリ、内面口縁部付近に横方向のヘラミガキが観察される。

古段階住居

【規模・形態】東西軸約 4.4 m、南北軸は約 1.4m 以上で、遺構の南半部は調査区外へ延びる。

【主軸方位】煙道基準で N － 5°－ W である。

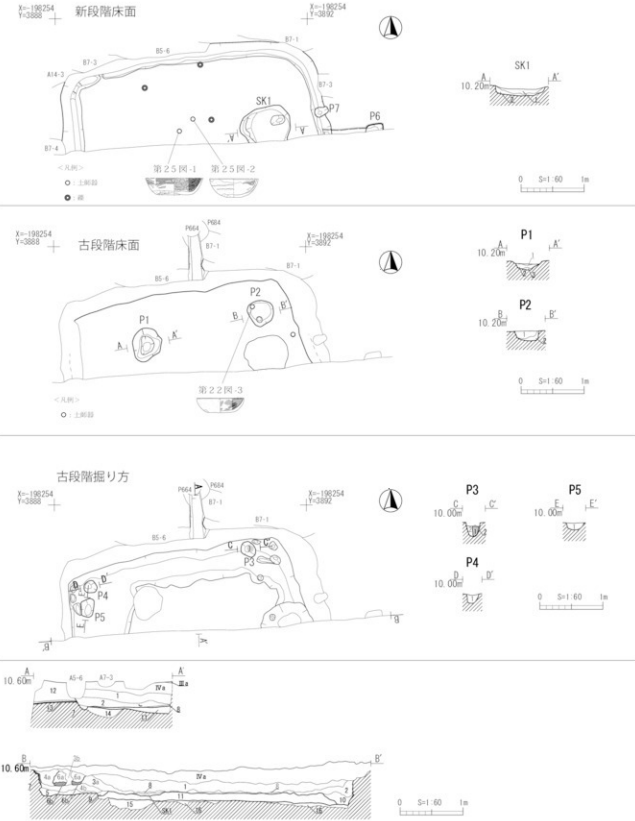
【堆積土・構築土】12 ～ 16 層の５層を確認した。12 ～ 14 層は、掘り方である。上面は、古段階住居床面である。12 層は溝状の掘り方で、13 層は焼土、炭化物を含む土坑状の落ち込み範囲である。14 層はⅥ層を主体とし、混入土をほとんど含まない。15・16 層は煙道堆積土である。15 層は煙道崩落土と思われる。16 層は煙道底面直上の堆積土で、炭化物を含む。

【壁面】東壁と北壁は、新段階住居の拡張により消失している。西壁は共有しているものと思われる。

【柱穴】P １～ P ５を確認した。P １及び P ２は、床面で確認した。P ２は焼土・炭化物を多く含む。いずれも浅く、主柱穴かは判然としない。P ３～ P ５は掘り方で検出した。P ３は小形だが、柱痕跡を持つ。

【カマド】カマド本体は残存していない。煙道の一部を、北壁を削平する小溝状遺構 A5 － 6 の壁面で確認した。煙出しは P684 及び P664 に削平され残存しない。

【掘り方】住居東側及び北側は、幅 30 ～ 50cm の溝状の掘り方を持つ。西壁沿いでは、ごく浅い掘り方が確認された。床面中央は掘り方を持たず、Ⅵ層を床面としている。



第 24 図　SI2 竪穴住居跡平面図・断面図

SI ２住居跡　土層注記表

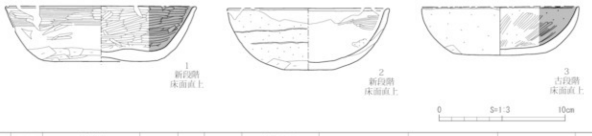
対応面	部位	層位	土色		土性	備考
新段階住居	住居堆積土	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトを少量、焼土粒・炭化物粒を少量含む。
		2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトを少量、焼土粒・炭化物粒を少量含む。
	煙道堆積土	3a	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5YR5/3 黄褐色粘土質シルトブロックをやや多く含む。焼土粒・炭化物粒を少量含む。
		3b	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5YR5/3 黄褐色粘土質シルトを多く含む。
		4a	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5YR5/3 黄褐色粘土質シルト粒を多く、炭化物粒を少量含む。
		4b	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5YR5/3 黄褐色粘土質シルト粒を多く、炭化物粒をやや多く含む。
		5	7.5YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5YR5/3 黄褐色粘土質シルト粒を多く、炭化物粒を多量含む。
	煙道天井	6a	2.5Y5/3	黄褐色	粘土質シルト	煙道天井残存範囲。
		6b	10YR1.7/1	黒色	粘土質シルト	天井内壁の被熱範囲。
	煙道奥壁	7	2.5Y5/3	黄褐色	粘土質シルト	被熱し炭化物が付着している。
	床直上堆積土	8	2/5Y4/1	黄灰色	粘土	2.5Y6/1 黄灰色粘土を含む。
	周溝	9	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	2.5YR5/3 黄褐色粘土質シルト粒を少量、焼土・炭化物粒をやや多く含む。酸化鉄斑紋状。
		10	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物粒を少量含む。
	新床構築土	11	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルトブロックを多量、焼土粒・炭化物粒を少量含む。
古段階住居	古段階住居煙道	12	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y4/4 オリーブ褐ブロックを多く含む。焼土粒・炭化物粒をやや多く含む。
		13	7.5YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	煙道底面。部分的に弱い被熱範囲が残存する。炭化物を含む。
	古床掘り方	14	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	2.5YR5/3 黄褐色粘土質シルトブロックをやや多く、焼土・炭化物粒を少量含む。
		15	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	2.5YR5/3 黄褐色粘土質シルトブロックを多量、焼土・炭化物粒をやや多く含む。
		16	2.5Y5/3	黄褐色	粘土質シルト	2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルトを少量含む。
新段階住居施設	SK1					施設土層注記表

SI ２竪穴住居跡　施設土層注記表

部位	層位	土色		土性	備考
SK1	1	7.5YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土ブロックを多量含む。
	2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックをやや多く、炭化物・焼土を多く含む。
P1	1	7.5YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土ブロックを多量含む。
	2	10YR4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色シルト質粘土ブロックをやや多く、焼土粒を微量含む。
	3	10YR4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土を多量含む。
P2	1	7.5YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土粒を多量含む。
	2	10YR4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	炭化物を多量、焼土粒・2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土を少量含む。
P3	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	柱痕跡。炭化物・焼土粒を微量含む。
	2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土をやや多く、炭化物・焼土粒を微量含む。
P4	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックをやや多く含む。
P5	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土を少量、焼土粒を微量含む。

第４表　SI ２竪穴住居跡土層注記表

【出土遺物】住居北東側の床面直上からほぼ完形の土師器坏が出土し、第 25 図３に図示している。平底の坏で、体部から口縁に向かって緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部と体部の間に段や稜を持たない。調整は外面底部にヘラケズリ、内面は全面にヘラミガキが施された後、黒色処理が施される。



図版番号	登録番号	出土位置			種別	器種	部位	法量（cm）			外面調整	内面調整	備考	写真図版
		グリッド	遺構	層位				口径	底径	器高				
25-1	C-009	N145E90	SI2	新 床面直上	土師器	坏	口縁～底	15.2	8.0～9.0	4.4	口縁：ヨコナデ→部分的にヘラミガキ、体：ヘラケズリ→部分的にヘラミガキ、底：ヘラケズリ	ヘラミガキ	内面黒色処理、半分黒色がとんでいる。外面底部に刻書「×」、布目状の圧痕	11-22
25-2	C-010	N145E91	SI2	新 床面直上	土師器	坏	口縁～底	12.9	5.0	4.9	口縁～体上半：摩滅、体下半～底：ヘラケズリ	ヘラミガキ	内外面摩滅、内面下半器面に剥離	11-23
25-3	C-011	N146E92	SI2	古 床面直上	土師器	坏	口縁～底	12.5	7.4	3.9	体下半：ヘラケズリ	ヘラミガキ	内面黒色処理、内外面摩滅	11-24

第 25 図　SI ２竪穴住居跡 出土遺物

２．掘立柱建物跡

Ｖ層上面では 900 基近くのピット・小柱穴を確認した。これらのピット・小柱穴の規模はおよそ 20 ～ 30cm で、平面形は円形ないしは不整円形を呈し、深さは 30cm 以上を測るものが多い。

一方、これらの小形のピット・小柱穴とは特徴が異なる柱穴跡が、調査区北西、調査区中央西側・調査区南側で確認された。調査区北西の一群は規模 50 ～ 60cm で、平面形は隅丸方形を呈し、深さは 40 ～ 60cm を測るものが多い。調査区中央西側の一群は、平面形は隅丸方形だが小形で角がやや張っている。規模は 30 ～ 50cm、深さは 80cm 以上を測るものがある。また一部の柱穴は上部を抜き取りのため大きく掘下げられ、下位から隅丸方形の柱穴プランが確認されている。調査区南側では規模が 50 ～ 70cm、深さ 50 ～ 60cm 前後を測るやや大形の柱穴が検出された。これらの柱穴の平面形は長楕円ないし不整円で一定しない。

検出した柱穴は各範囲のまとまりごとに並びを検討し、７棟の掘立柱建物跡を確認した。SB １は調査区南側において、SB ２～ SB ５は調査区北側においてそれぞれ同規模の柱穴の並びを想定したものである。また SB ６、SB ７は同規模の柱穴により構成される柱列の確認と、柱列との関連が予想される土坑として、北側に位置する SK ６・９、西側に位置する SK ７を確認した。以下、各建物跡について個別に記載するが、建物跡を構成する各柱穴の規模は遺構計測表に示す。

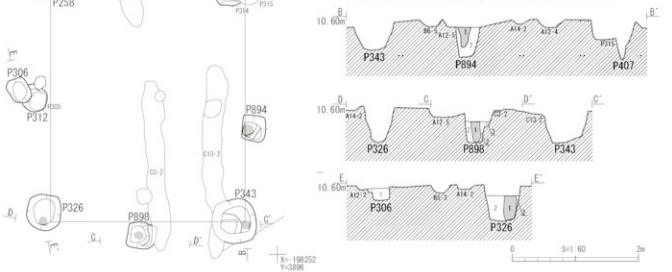
（１）SB １　掘立柱建物跡（第 26 図、図版 5）

【位置・確認】N148 ～ 152・E92 ～ 95 グリッドに位置する。

【新旧関係】小溝状遺構 B ６群、C ３・13 群、SD ５と重複関係にあり、B ６群より新しく他の遺構より古い。

【規模・形態】　東西２間×南北２間の建物跡で、南北方向に棟を持つ。P258・893・316・407・894・343・898・326・306・312 の 10 基の柱穴によって構成され、東西約 350cm 南北約 380cm を測る。柱間は約 360 ～ 380cm を測る。北東隅の柱穴は２基が重複関係にあり、新しい順に P316・407 である。西辺の柱穴は２基が重複関係にあり、新しい順に P306・312 である。柱痕跡が確認された柱穴は６基である。そのうち P893 と 326 は底面で柱痕跡を確認した。P893 は底面に柱痕跡の凹みが残る。また P326 は底面の隅で灰褐色に変色した柱痕跡を確認している。４隅の柱穴と同様の形状と規模を有する柱穴が周辺に確認されておらず、建物跡の展開上もやや不明な部分が多い。また中間の柱穴は柱筋に乗らず外側に位置するものが多い。

【主軸方位】N － 0° － W である。



第 26 図　SB １掘立柱建物跡平面図・断面図

SB１掘立柱建物跡　計測表・土層注記表

遺構	規模（cm）			層位	土色		土性	備考
SB１	長軸	短軸	深さ					
P258	59	(52)	48	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	柱痕跡。
				2	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む。
				3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR4/3 に ぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
				4	10YR4/3	に ぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルトブロックを含む。
P893	(49)	34	35	1	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/3 に ぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
P316	71	42	53	1	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/3 に ぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
P407	(46)	(22)	63	1	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/3 に ぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
P894	40	38	59	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	柱痕跡。10YR4/3 に ぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
				2	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/3 に ぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
P343	(72)	70	50	1	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/3 に ぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
P898	(40)	42	54	1	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	柱痕跡。
				2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR4/3 に ぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
				3	10YR4/3	に ぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルトブロックを含む。
P326	57	54	57	1	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	柱痕跡。
				2	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/3 に ぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを極微に含む。
P306	41	32	22	1	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/3 に ぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを極微に含む。
P312	(45)	42	54	1	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/3 に ぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
				2	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/3 に ぶい黄褐色シルト質粘土大ブロックを含む。
				3	10YR4/3	に ぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR2/3 黒褐色粘土質シルトブロックを含む。

第５表　SB１掘立柱建物跡計測表・土層注記表

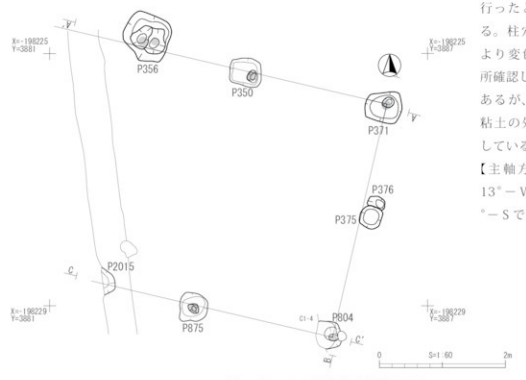
（２）SB２　掘立柱建物跡（第 27・28 図、図版５）

【位置・確認】　N170 ～ 175・E81 ～ 86 グリッドに位置する。

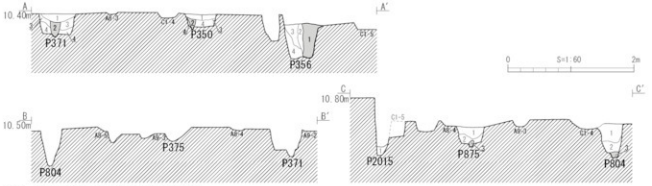
【新旧関係】　小溝状遺構Ａ８・９群、Ｃ１群と重複関係にあり、Ａ８・９群より新しく、Ｃ１群より古い。

【規模・形態】　東西２間以上×南北２間の建物跡で東西方向に棟を持つと考えられる。P356・350・371・375・376・804・875・2015 の８基の柱穴によって構成され、長軸は検出長で約 420cm、短軸は 360cm を測り、調査区西壁外へ伸びる。柱間は約 160 ～ 220cm である。東辺の柱穴は２基が重複関係にあり、新しい順に P375・376 である。柱痕跡を確認した柱穴は５基である。P804 は底面で深さ５cm 程の柱痕跡の凹みを確認している。その他の柱穴では断面で柱状の柱痕跡を確認している。また、断面観察から、P356 では柱の抜き取り並びに据え直しを行ったと見られる痕跡がある。柱穴の底面では土圧により変色した柱痕跡を２箇所確認した。１層は柱痕跡であるが、褐灰色に変色した粘土の外周に酸化鉄が集積している。

【主軸方位】南北軸でＮ－13°－Ｗ、東西軸でＥ－25°－Ｓである。



第 27 図　SB２掘立柱建物跡平面図



SB 2　掘立柱建物跡　土層注記表・計測表

遺構	規模（cm）			層位	土色		土性	備考
SB 2	長軸	短軸	深さ					
P356	72	64	69	1	2.5Y3/2	黒褐色	シルト質粘土	柱痕跡、外側に酸化鉄が集積し、内側は暗灰色に変色する。
				2	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土粒を含む。
				3	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土粒を多量含む。
				4	2.5Y3/2	黒褐色	シルト質粘土	2.5Y5/4 黄褐色粘土小ブロックを含む。旧柱穴掘り方。
P350	50	45	27	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
				2	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	柱痕跡、2.5Y5/4 黄褐色粘土粒を少量含む。
				3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土ブロックを多量含む。
				4	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土粒を含む。
P371	59	47	42	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
				2	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	柱痕跡、2.5Y5/4 黄褐色粘土粒を少量含む。
				3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土粒を含む。
				4	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土粒を多量含む。
P375	30	35	23	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y5/1 黄褐色粘土質シルトブロックを含む。
P376	(29)	18	44	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
				2	10YR4/3	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土小ブロックを含む。
P804	40	(32)	60	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。抜き取り。
				2	2/5Y4/3	オリーブ褐色	シルト質粘土	10YR4/2 灰黄褐色シルト質粘土ブロックを少量含む。抜き取り。
				3	2.5Y4/1	黄灰色	シルト質粘土	柱痕跡。
P875	51	49	43	1	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	2.5Y5/4 黄褐色粘土ブロックを多量含む。
				2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土ブロックを多量含む。
				3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	柱痕跡、2.5Y5/4 黄褐色粘土ブロックを多量含む。
P2015	43	(20)	53	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR3/2 黒褐色粘土質シルトブロックを多量含む。

第 28 図　SB 2 掘立柱建物跡断面図

（3）SB 3　掘立柱建物跡（第 29 図、図版 6）

【位置・確認】　N164 ～ 167・E91 ～ 92 に位置する。

【新旧関係】小溝状遺構 A 8・9 群、B 4 群と重複関係にあり、小溝状遺構 A 8・9 群より新しく、B 4 群より古い。

【規模・形態】　東西 2 間以上×南北 2 間の建物跡で、東西方向に棟を持つと考えられる。SK23・P388・866・666・787・409・2017 の 7 基の柱穴によって構成されており、長軸は検出長で約 340cm、短軸は 280cm を測り、調査区西壁外へ伸びる。P2016 は P2017 と同規模の柱穴であり、柱筋はずれるが構成する柱穴に含めて示した。この場合は東西 2 間×南北 2 間の建物跡の可能性が考えられる。柱間は約 125 ～ 160cm を測る。個々の柱穴は短軸約 40 ～ 55cm、長軸約 35 ～ 55cm の隅丸方形を呈しており、深さは 35 ～ 65cm とやや深い。径 10cm 前後の柱痕跡が確認された柱穴が 4 基ある。P787 は上層を抜き取り時に削平されている。

【主軸方位】南北軸で N － 0° － W、南北軸で E － 2° － N である。

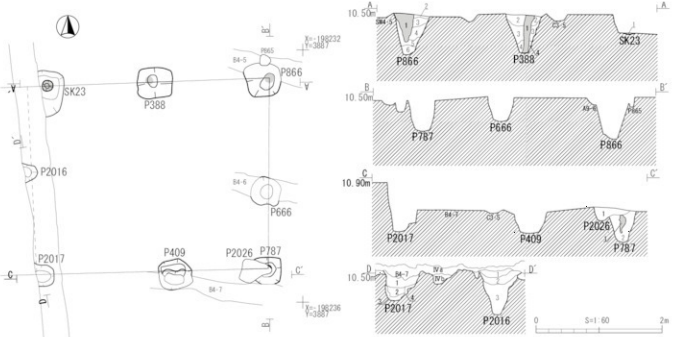
（5）SB 4　掘立柱建物跡（第 30 図、図版 6）

【位置・確認】　N169 ～ 173・E88 ～ 91 に位置する。

【新旧関係】小溝状遺構 A 8・9 群、C 1 群と重複関係にあり、A 8・9 群より新しく、C 1 群より古い。また SB 5 と建物範囲が重複するが、柱穴間の重複関係は無く、小溝状遺構群との重複関係からは、新旧は不明である。

【規模・形態】　東西 2 間×南北 1 間の建物跡である。P400・590・53・70・1037・871 の 6 基の柱穴によって構成され、東西 245 ～ 258cm、南北約 240 ～ 244cm を測る。柱間は東西で 119 ～ 125cm、南北で 225 ～ 240cm を測る。2 基の柱穴で柱痕跡を確認した。P74 底面では、褐灰色に変色し、浅く凹んだ柱痕跡を確認した。

【主軸方位】南北軸で N － 9° － W、東西軸で E － 8 ～ 11° － N である。



SB３掘立柱建物跡　土層注記表・計測表

遺構	規模（cm）			層位	土色		土性	備考
SB３	長軸	短軸	深さ					
SK23	72	(39)	32	1	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	柱痕跡、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
P388	57	52	64	1	2.5Y4/1	黒褐色	シルト質粘土	柱痕跡。
				2	2.5Y4/1	黒褐色	シルト質粘土	2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトブロックを多量含む。
				3	2.5Y4/1	黒褐色	シルト質粘土	2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトブロックをやや多量含む。
				4	5Y4/3	暗オリーブ色	シルト質粘土	2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトブロックをやや多量含む。
P866	54	(53)	65	1	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	柱痕跡、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
				2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
				3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
				4	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルトブロックを含む。
				5	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを少量含む。
				6	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
P666	(46)	(46)	40	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
P2026	--	--	--	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。抜き取り。
P787	(43)	(43)	55	1	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	柱痕跡、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
				2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
P409	51	46	37	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを少量含む。
				2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
P2017	(27)	33	39	1	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	5Y5/3 灰オリーブ色シルトブロックを多量含む。
				2	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	5Y5/3 灰オリーブ色シルトブロックを少量含む。
				3	5Y5/3	灰オリーブ色	シルト質粘土	2.5Y4/1 黄灰色シルトブロックを少量含む。
				4	5Y5/3	灰オリーブ色	シルト質粘土	
P2016	28	(19)	62	1	2.5Y6/3	にぶい黄色	粘土質シルト	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
				2	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y6/4 にぶい黄色粘土質シルトブロックを少量含む。
				3	5Y5/1	オリーブ黒色	シルト質粘土	地土層に 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土質シルトブロックを含む。

第 29 図　SB３掘立柱建物跡平面図・断面図

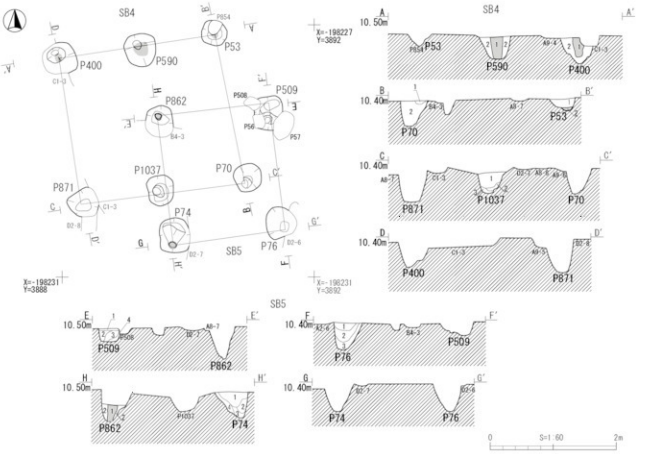
（4）SB５　掘立柱建物跡（第 30 図、図版６）

【位置・確認】　N169 ～ 171・E89 ～ 91 に位置する。

【新旧関係】小溝状遺構Ａ８・９群、Ｂ４群、Ｄ２群と重複関係にあり、小溝状遺構Ａ８・９群より新しく、Ｂ４群、Ｄ２群より古い。SB ４との新旧関係は不明である。

【規模・形態】　東西１間×南北１間の建物跡である。P862・509・76・74 の４基の柱穴によって構成されており、東西約 178 ～ 190cm、南北約 196 ～ 202cm を測る。３基の柱穴で柱痕跡を確認した。P53 は底面に深さ 10cm 程の柱痕跡の凹みが残る。

【主軸方位】南北でＮ－７～９°－Ｗ、東西でＥ－６～９°－Ｎである。



SB 4 掘立柱建物跡　柱穴土層注記表・計測表

遺構	規模（cm）			層位	土色		土性	備考
SB 4	長軸	短軸	深さ					
P400	(53)	51	44	1	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	柱痕跡、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
				2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを含む。
P590	53	50	38	1	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	柱痕跡、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
				2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを多量含む。
P53	42	41	15	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	柱痕跡、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを少量含む。
				2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。
P70	44	44	40	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
				2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土小ブロックを多量含む。
P1037	48	39	42	1	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
				2	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
				3	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	2.5Y5/4 黄褐色粘土粒を含む。
P871	46	(45)	55	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。

SB 5 掘立柱建物跡　柱穴土層注記表・計測表

遺構	規模（cm）			層位	土色		土性	備考
SB 5	長軸	短軸	深さ					
P862	50	43	50	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	柱痕跡、10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
				2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを含む。
P509	53	45	21	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを含む。
				2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
				3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土ブロックを多量含む。
				4	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土ブロックを含む。
P76	(69)	49	43	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土小ブロックを含む。
				2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土粒を含む。
				3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土粒を含む。
P74	55	(48)	44	1	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土ブロックを少量含む。
				2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土ブロックを少量含む。
				3	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土ブロックを多量含む。
				4	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土ブロックを少量含む。

第 30 図　SB 4・5 掘立柱建物跡平面図・断面図

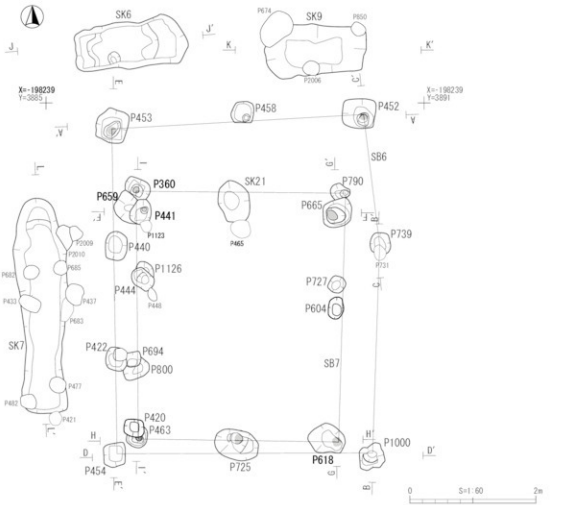
（６）SB ６掘立柱建物跡および周辺土坑 SK6・7・9（第 31・32 図、図版６・７・８）

調査区中央西側では SB ６・７の２棟の掘立柱建物跡を確認した。２棟の建物跡は主軸方位をほぼ同方位に持ち、SB ６の内側で SB ７を確認しているが、構成する柱穴の重複関係から、SB ６が新しいと考えられる。SB ６の北辺から北側約 50 ～ 60cm に東西に並列する SK ６・９、西辺から西側約 70cm に南北に長軸を持つ溝状の SK ７を確認し、関連する可能性のある施設として報告する。

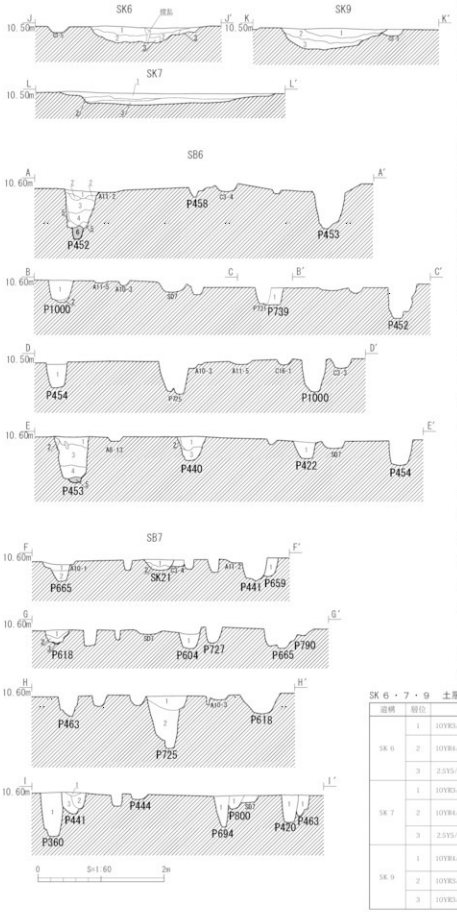
【位置・確認】　N155 ～ 163・E85 ～ 91 に位置する。

【新旧関係】　小溝状遺構 A ８～ 10 群、B ４群、C ３群と重複し、本遺構が新しい。

【規模・形態】　SB ６は東西２間×南北２間～３間の建物跡であり、南北方向に棟を持つ。P453・458・452・739・1000・454・422・440 の８基の柱穴によって構成されており、東西約 400 ～ 405cm、南北約 525 ～ 540cm を測る。柱間は東西で 152 ～ 187cm、南北で 187 ～ 209cm を測る。P453、P452 は底面で５～ 10cm 程の深さの柱痕跡を確認している。SK ６は隅丸長方形を呈し、規模は長軸 180cm、短軸 75cm、深さ 30cm を測る。断面形は幅広のＵ字型で、壁面は急角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は３層で、非ロクロ土師器細片が出土している。SK ７は溝状を呈し、規模は長軸 270cm、短軸 85cm、深さ 30cm を測る。断面形は幅広のＵ字型で、壁面は急角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は３層で、非ロクロ土師器細片が少量出土している。SK ９は隅丸長方形を呈し、規模は長軸 160cm、短軸 80cm、深さ 40cm を測る。断面形は幅広のＵ字型で、壁面は急角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は３層で、非ロクロ土師器細片が少量出土している。



第 31 図　SB ６掘立柱建物跡および周辺土坑・SB ７掘立柱建物跡平面図



【主軸方位】SB６の主軸方位は南北軸でＮ－０～２°－Ｗである。SK６・７・９の主軸方位はそれぞれ長軸基準でＮ－84°－Ｅ・Ｎ－２°－Ｗ・Ｎ－89°－Ｅである。

（７）SB７掘立柱建物跡（第31･32図、図版６）

【位置・確認】N155 ～ 163・E85 ～ 91に位置する。

【新旧関係】 小溝状遺構Ａ８～10群、Ｂ４群、SB６と重複し、小溝状遺構群より新しく、SB６より古い。

【規模・形態】東西２間×南北２～３間の建物跡で、南北方向に棟を持つ。９基の柱穴によって構成されているが、西辺の４基の柱穴と北東隅は２～３基の柱穴が重複関係にあり、建て替えがあったものと考えられる。北西隅の柱穴は３基が重複関係にあり、新しい順にP441・P659・P360である。西辺の柱穴は北から順に、P444・1126（重複関係にあり、新しい順にP444･1126)、P694･P800（重複関係にあり、新しい順にP694・800)、P420・P463（重複関係にあり、新しい順にP420・463）である。このうち、P694はSB６の構成ピットであるP422と重複し、これより古い。北東隅の柱穴は２基が重複関係にあり、新しい順にP665・P790

SK６・７・９　土層注記表

遺構	層位	土色	土性	備考
SK６	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y5/6黄褐色粘土質シルトラミ状、焼土粒・炭化物粒を含む。マンガン粒多量。
	2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/6黄褐色粘土質シルトブロックを中多く含む。焼土粒・炭化物粒を微量。
	3	2.5Y5/4	黄褐色	シルト質粘土	10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトブロックを多く含む。
SK７	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y5/6黄褐色粘土質シルト少量、焼土粒・炭化物粒を含む。
	2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/6黄褐色粘土質シルトブロックを中々多く含む。焼土粒・炭化物粒を微量。
	3	2.5Y5/4	黄褐色	シルト質粘土	10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトブロックを多く含む。
SK９	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/6黄褐色粘土質シルトブロックを中々多く含む。焼土粒・炭化物粒を微量。
	2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y5/6黄褐色粘土質シルト少量、焼土粒・炭化物粒を含む。
	3	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを中々多く含む。

第 32 図　SB６掘立柱建物跡および周辺土坑・SB７掘立柱建物跡断面図

である。ほか北辺中央のSK21、南東隅のP618は平面形が不整円形で、他の柱穴と形状・規模ともにやや異なる。底面に柱痕跡の凹みがある。南辺中央のP725は柱を抜き取られており、底面から隅丸方形の柱痕跡が確認された。ほかP463・665・441・360で、柱穴底面に深さ5～10cm程の柱痕跡の凹みを確認した。東西約330cm、南北約390cmを測る。柱間は東西で150～168cm、南北は西辺で108～132cm、東辺で150～210cmである。主軸方位は南北軸でN－0～1°－Wである。

SK６・７・９遺構観察表

遺構	グリッド	重複		主軸方位	規模（cm）			平面形	断面形	底面	遺物・備考
		新しい遺構	古い遺構	（長軸基準）	長軸	短軸	深さ				
SK６	N162～163 W86～88	－	SK20、小溝状遺構群A3・C8群	N－84°－E	180	75	30	隅丸長方形	U字型	平坦	遺物出土無し。
SK７	N157～160 W85～86	P433・477・482・682・685・2010	SD10・11、小溝状遺構A12群	N－2°－W	270	85	30	長楕円形	U字型	平坦	非ロクロ土師器の破片少量出土。
SK９	N162～163 W88～91	－	小溝状遺構C3・A８群	N－89°－E	160	80	40	隅丸長方形	U字型	平坦	非ロクロ土師器の破片少量出土。

SB６掘立柱建物跡　柱穴土層注記表・計測表

遺構	規模（cm）			層位	土色		土性	備考
SB６	長軸	短軸	深さ					
P453	53	50	72	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y5/4黄褐色粘土質シルト小ブロックを少量含む。
				2	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y5/4黄褐色粘土質シルト小ブロックをやや多く含む。
				3	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y5/2暗灰黄色粘土粒を少量含む。
				4	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2/5Y5/4黄褐色粘土質シルトブロックを多量含む。
				5	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	柱痕跡。2/5Y5/4黄褐色粘土質シルト小ブロックを多量含む。
P458	34	33	15	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y3/2黒褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
P452	52	47	80	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y5/4黄褐色粘土質シルト小ブロックを少量含む。
				2	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y5/4黄褐色粘土質シルト小ブロックをやや多量含む。
				3	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y5/2暗灰黄色粘土粒を少量含む。
				4	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y5/2暗灰黄色粘土小ブロックを少量含む。
				5	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y5/2暗灰黄色粘土小ブロックを多量含む。
				6	2.5Y2/1	黒色	粘土	柱痕跡。
P739	32	（19）	52	1	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロックやや多量、炭化物・焼土粒を少量含む。
P1000	47	41	52	1	5Y4/2	灰オリーブ色	粘土質シルト	酸化鉄斑紋状。
				2	5Y3/2	オリーブ黒色	粘土質シルト	マンガン粒状。
P454	38	34	40	1	5Y3/1	オリーブ黒色	シルト	５Y4/3暗オリーブ粘土粒多量、炭化物を微量含む。
P422	（36）	35	27	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4黄褐色粘土質シルト小ブロックをやや多量含む。
P440	45	34	38	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトブロックを少量含む。
				2	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y5/4黄褐色粘土質シルト小ブロックを少量含む。
				3	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4黄褐色粘土質シルトブロックを多量含む。

SB７掘立柱建物跡　柱穴土層注記表・計測表

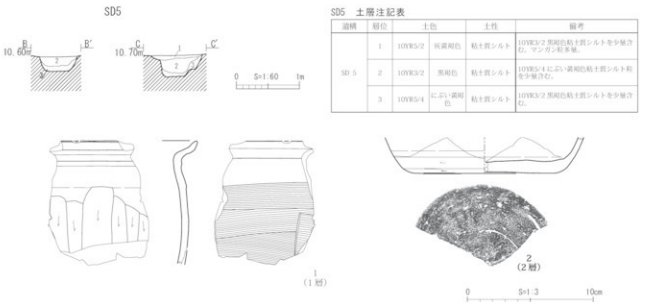
遺構	規模（cm）			層位	土色		土性	備考
SB７	長軸	短軸	深さ					
P441	41	32	32	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4黄褐色粘土質シルト粒を少量含む。
				2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4黄褐色粘土質シルト小ブロックを少量含む。
				3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4黄褐色粘土質シルト小ブロックをやや多量含む。
P659	40	（27）	35	1	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2/5Y5/4黄褐色粘土質シルト粒・炭化物・焼土粒を少量含む。
P360	42	(29)	69	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4黄褐色粘土質シルト小ブロックをやや多量含む。
SK21	（66）	50	20	1	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2/5Y5/4黄褐色粘土質シルト粒・炭化物・焼土粒を少量含む。
				2	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR5/2黒褐色シルト粒を少量含む。
P665	45	44	33	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。抜き取り。
				2	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
P790	29	25	11	1	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2/5Y5/4黄褐色粘土質シルト粒・炭化物・焼土粒を少量含む。
P727	27	25	27	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトブロックをやや多量含む。
P604	36	25	36	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトブロックをやや多量含む。
P618	53	50	31	1	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2/5Y5/4黄褐色粘土質シルト粒・炭化物・焼土粒を少量含む。
				2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトブロックを少量含む。
				3	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	柱痕跡。2.5Y5/4黄褐色粘土質シルトブロックを多量含む。
P725	72	49	82	1	10YR3/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトブロックをやや多量、炭化物・焼土粒を少量含む。
				2	10YR3/2	灰黄褐色	粘土質シルト	下部は柱痕跡。10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトブロックをやや多量含む。
P420	32	28	42	1	10YR2/1	黒色	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色粘土粒をやや多量含む。
P463	（36）	（33）	32	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4黄褐色粘土質シルト小ブロックをやや多量含む。
P694	（24）	22	55	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを多量含む。
P800	44	（19）	19	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを多量含む。
P444	39	26	42	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y3/2黒褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
P1126	39	26	42	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを含む。

第６表　SB６掘立柱建物跡および周辺土坑・SB７掘立柱建物跡計測表・土層注記表

３．溝跡

（１）SD ５溝跡（第 18･33 図）　N151 ～ 155･E85 ～ 100 グリッドで検出した。SK ５､小溝状遺構 A10･11 群、B ５群、C ３･16 群と重複関係にあり、SK ５より古く、その他の遺構より新しい。主軸方向はＮ－ 78°－Ｅで、検出した長さは 16.0m を測り、遺構の東端・西端は調査区外へ延びる。幅 50 ～ 70cm、深さ 18 ～ 37cm で、断面形はＵ字型である。傾斜方向は判然としない。溝の底面には工具痕跡が明瞭に観察される。堆積土は３層で、１層は主に溝跡西側で堆積が確認された。３層は基本層Ⅴ層のブロックを多く含む。遺物は土師器および須恵器の破片が出土しており、西側の１層中で出土した土師器甕１点と､２層中から出土した須恵器坏１点を図示した。第 33 図１はロクロ整形の甕である。口縁から胴部上半の破片のため、全体の器形は不明であるが、胴中央部付近に最大径を持ち、頸部にかけて緩やかにすぼまる。口縁はやや内湾しながら立ち上がる器形である。調整はロクロ整形後、外面胴部で縦方向のヘラケズリ、内面胴部に横方向のヘラナデの施された痕跡が観察された。２は須恵器坏の底部である。口縁から体部上半は欠損しており全体の形状は不明であるが、平底で外傾して直線的に立ち上がる器形を呈するものと思われる。体部下半から底部は回転ヘラケズリ調整が施される。

（２）SD ７溝跡（第 18・33 図）　N157 ～ 159・E85 ～ 100 グリッドで検出した。SK ７・15・22、小溝状遺構 A10・11 群、C ３群と重複関係にあり、小溝状遺構 A10・11 群より新しく、その他の遺構より古い。主軸方向はＮ－ 82°－Ｅで、検出した長さは 16.0m を測り、遺構の東端・西端は調査区外へ延びる。、幅 40cm、深さ 14cm で、断面形はＵ字型である。傾斜方向は判然としない。底面には工具痕が明瞭に観察される。堆積土は２層であり、２層は基本層Ⅴ層のブロックを多く含む。遺物は土師器細片が出土している。



SD5　土層注記表

遺構	層位	土色	土性	備考
SD 5	1	10YR5/2　灰黄褐色	粘土質シルト	10YR3/2 黒褐色粘土質シルトを少量含む。マンガン粒を少量。
	2	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト粒を少量含む。
	3	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR3/2 黒褐色粘土質シルトを少量含む。

図版番号	登録番号	出土位置 グリッド	遺構	層位	種別	器種	部位	法量 口径	底径	器高	外面調整	内面調整	備考	写真図版
33-1	D-001	N152 E86	SD5	1 層	土師器	甕	口縁～体	—	—	(9.8)	ロクロ調整、体：ヘラケズリ	ロクロ調整		11-25
33-2	E-014	N153 E90	SD5	2 層	須恵器	坏	体下半～底	—	(11.4)	2.8	ロクロ調整 体下半～底部：回転ヘラケズリ	ロクロ調整		11-26

SD7　土層注記表

遺構	層位	土色	土性	備考
SD 7	1	10YR5/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR3/4 にぶい黄褐色粘土質シルト粒を少量含む。
	2	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR3/2 黒褐色粘土質シルトを少量含む。

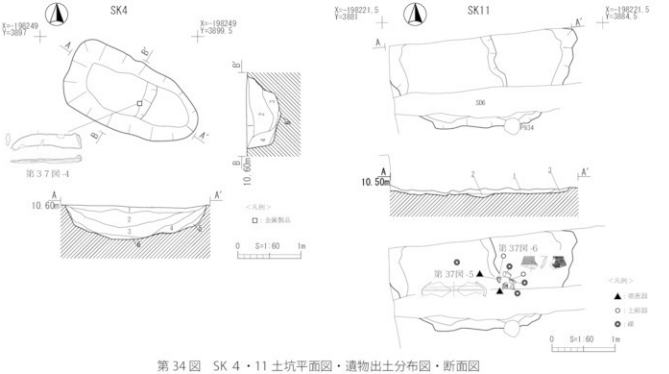
第 33 図　SD ５溝跡断面図・出土遺物、SD ７溝跡断面図

４．土坑

Ⅴ層上面で検出した土坑は 19 基を数える。このうち SB ６、SB ７掘立柱建物跡関連の遺構として取り上げた SK ６・７・９、掘立柱建物跡の柱穴とした SK21・23 を除く 14 基のうち、SK ４・11・13 以外の土坑については観察表で報告する。なお、SK18 は調査の結果、土坑とは認定されなかったため欠番とした。

（１）SK ４土坑（第 34･37 図、図版７）　N149 ～ 151･E97 ～ 100 で検出した。小溝状遺構 A12･14 群、B ６群、C13 群、SK17 と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形は長楕円形で、主軸方位は長軸基準で N － 64° － W である。規模は長軸 220cm、短軸 120cm、深さ 40cm で、壁面は急角度で立ち上がる。断面形は幅広のＵ字型で、底面はほぼ平坦である。堆積土は６層に分層される。遺物は主に３層中で出土したものが多い。鉄製の鎌の刃のほか、土師器坏・甕破片および須恵器破片がやや多く出土している。また被熱した礫が出土している。土師器・須恵器はいずれも細片であったが、これらの内から須恵器坏１点、土師器坏２点、鉄製鎌を図示した（第 37 図）。土師器には、製作にロクロを使用した坏破片が含まれている。

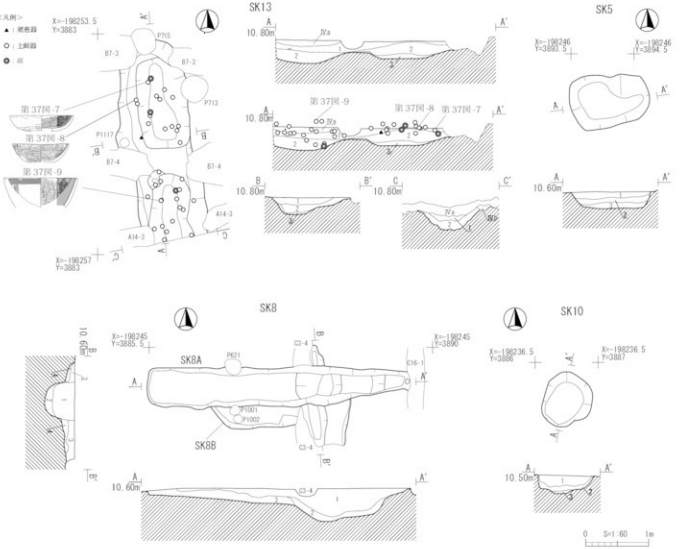
（２）SK11 土坑（第 34･37 図、図版８）　N177 ～ 179･E81 ～ 84 で検出し、北側と西側は調査区外へ延びる。SD ６、SK14 と重複関係にあり、SD ６より古く SK14 より新しい。平面形は不整円形と思われ、規模は長軸 300cm、短軸 140cm、深さ３～ 10cm を測り、壁面はやや外傾し立ち上がるが、残存状況が悪く不明な箇所が多い。底面はほぼ平坦である。堆積土は３層である。遺物は遺構底面でややまとまりが見られ、土師器坏の破片・須恵器甕の破片、被熱を受けた礫などが出土している。このうち土師器坏１点と須恵器長頸瓶１点を第 37 図に図示した。



第 34 図　SK ４・11 土坑平面図・遺物出土分布図・断面図

（３）SK13 土坑（第 35・37 図、図版９）　N143 ～ 146・E83 ～ 85 で検出し、南側は調査区外に延びる。小溝状遺構 A12・14 群、B7 群と重複し、本遺構が古い。平面形は長楕円で、主軸方位は長軸基準で N － 9° － W である。規模は長軸 320cm、短軸 100 ～ 110cm、深さ 25 ～ 35cm で、壁面は急角度で立ち上がる。堆積土は３層で、1・2 層には炭化物や焼土が多く混入する。また 1 層上面は小溝状遺構群を伴う耕作により削平されており、遺構周辺の小溝状遺構や基本層Ⅳ層中には炭化物・焼土が多く含まれている。遺物は 1 層中から出土し、土師器坏および甕の破片が多い。他、須恵器甕破片が少量、被熱した礫が多く出土しており、長さ 20cm 程度の大型の

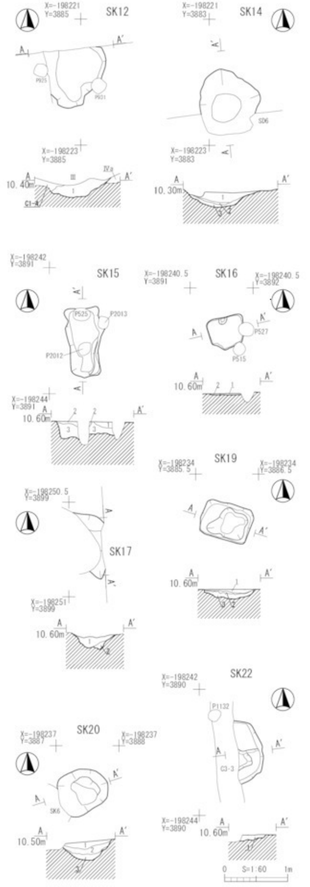
礫も２点程出土している。出土状況は遺構範囲の基本層Ⅳ層中で出土したものを含め第 35 図に図示した。またこれらの遺物から土師器坏２点、鉢１点を第 37 図に図示した。



土坑　計測および観察表

遺構	グリッド	重複		主軸方位（長軸基準）	規模（cm）			平面形	断面形	底面	遺物・備考
		新しい遺構	古い遺構		長軸	短軸	深さ				
SK 5	N152～154 E93～95	—	SD 5、小溝状遺構 C3・A10 群	N－79°－E	125	90	30	隅丸長方形	U 字型	平坦	土師器細片少量・須恵器細片 1 点が出土。須恵器細片は SK17 出土の須恵器細片と同一個体の可能性。
SK 8A	N153～155 E85～90	小溝状遺構 C3 群、P672	小溝状遺構 A10・11 群	N－89°－E	415	60	60	長楕円形	U 字型	一部西へ抉り込む	新旧関係あり。土師器杯および鉢細片・須恵器細片・瓦細片が出土。
SK 8B	N153～155 E85～90	小溝状遺構 C3 群、P1001・1002	小溝状遺構 A10・11 群	N－89°－E	285	158	5～10	不整形	—	—	
SK10	N162～164 W86～87	—	小溝状遺構 A8 群	N－37°－E	85	75	35	楕円形	U 字型	平坦	
SK12	N177～179 E84～86	小溝状遺構 C1 群、SD 6	P2034	—	95	90	40	不整形	逆台形	平坦	土師器細片が少量出土。
SK14	N178～179 E83～84	SD6、SK11	—	N－7°－W	100	95	20～25	—	U 字型	平坦	遺物出土無。
SK15	N144～147 E84～85	P525・2011・2012	SD 7、小溝状遺構 A10・11 群	N－8°－W	320	115	40	隅丸長方形	逆台形	平坦	土師器杯・甕の細片が少量出土。
SK16	N159～160 E92～	P515・527	小溝状遺構 A10・11 群	—	55	50	5	隅丸方形	—	平坦	土師器甕の細片が少量出土。
SK17	N150～151 E100	SK 4	—	—	90	50	35	不明	U 字型	平坦	須恵器甕の細片が少量出土。
SK19	N166・E86～87	—	小溝状遺構 A8 群	N－72°－W	80	60	15	平面形	U 字型	平坦	壁面は全周掘熱。
SK20	N161～162 E88	SK 6 土坑、P625	小溝状遺構 A3・C3 群	N－61°－E	80	65	40	不整楕円	U 字型	平坦	2 種土師小型鉢と須恵土師と最平な礫、礫は掘が中央とまって出土（礫実土測は第 45 図、8 図参）。
SK22	N157～158 E91	小溝状遺構群 C3 群	SD 7、小溝状遺構群 A 群	N－12°－W	100	40	15	楕円形	U 字型	平坦	土師器甕細片が少量出土。

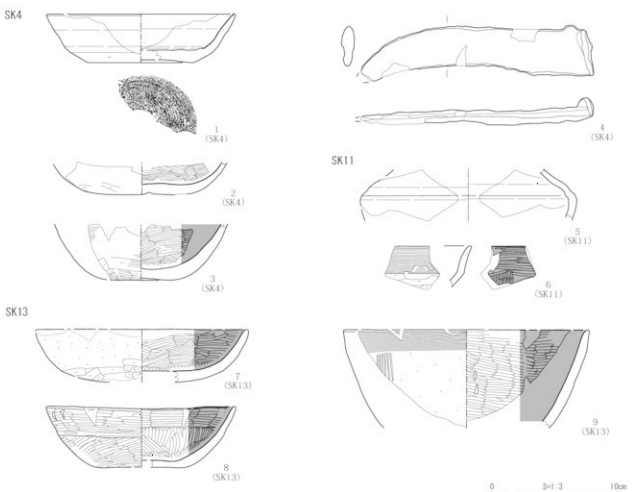
第 35 図　SK13 土坑平面図・遺物出土分布図・断面図、SK 5・8・10 土坑平面図・断面図



土坑　土層注記表

遺構	層位	土色		土性	備考
SK 4	1	7.5YR4/2	灰褐色	粘土質シルト	7.5YR4/1 褐灰色粘土・10YR5/4 鈍い黄褐色シルト質粘土、炭化物を少量、酸化鉄を斑紋状に少量、マンガン粒を多量含む。
	2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックをやや多量、焼土粒・炭化物粒を少量含む。酸化鉄斑紋状。
	3	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質粒を少量、焼土粒・炭化物粒をやや多量含む。酸化鉄斑紋状。
	4	10YR2/3	黒褐色	シルト質粘土	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトを少量。酸化鉄斑紋状。
	5	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトをやや多量含む。酸化鉄斑紋状。
	6	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを多量、炭化物を少量含む。酸化鉄斑紋状。
SK5	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/2 灰黄褐色粘土・10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト。
	2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトを多量。
	3	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルトを少量。
SK 8 A	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを含む。焼土粒・炭化物粒を含む。
	2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを含む。
SK 8 B	3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト粒を少量含む。
	4	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトを多量含む。
SK10	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土粒を含む。
	2	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR5/1 褐灰色粘土を少量含む。
	3	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	砂を少量含む。酸化鉄斑紋状。
SK11	1	2.5Y3/2	黄褐色	シルト質粘土	2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトブロック、焼土粒・炭化物粒をやや多量含む。底面に酸化鉄斑紋状。
	2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトを多量含む。
	3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトを多量含む。
SK12	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロック、焼土粒・炭化物粒を少量含む。
SK13	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	焼土粒・炭化物粒を少量含む。
	2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	径２～３㎝焼土ブロック少量、焼土粒・炭化物粒を多量含む。
	3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトを多量含む。
SK14	1	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土粒少量、焼土粒・炭化物粒をやや多量含む。
	2	2.5Y5/4	黄褐色	粘土質シルト	炭化物粒を少量含む。
	3	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトを少量含む。
SK15	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトを少量含む。炭化物粒を少量含む。
	2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトを多量含む。
	3	2.5Y5/3	黄褐色	粘土質シルト	10YR3/2 黒褐色粘土質シルトを少量含む。
SK16	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトを少量、焼土ブロック・炭化物粒を少量含む。
	2	2.5Y5/4	黄褐色	シルト質粘土	10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルトブロックを多量含む。
SK17	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトを少量含む。
	2	2.5Y5/4	黄褐色	シルト質粘土	10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルトブロックを多量含む。
SK19	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト粒を多量。径１～2㎝の焼土ブロック・炭化物ブロックを少量含む。
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト粒を多量。径１～2㎝の焼土ブロック・炭化物ブロック極めて多量含む。
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを多量含む。
SK20	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト粒を少量含む。マンガン粒集積。
	2	10YR5/1	褐灰色	シルト質粘土	炭化物粒を少量含む。
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルトブロック・10YR4/1 褐灰色粘土質シルトブロックを多量、焼土粒・炭化物粒を少量含む。
SK22	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトをやや多量含む。マンガン粒集積。

第 36 図　SK12・14・15～17・19・20・22 土坑平面図・断面図



図版番号	登録番号	出土位置			種別	器種	部位	法量（cm）			外面調整	内面調整	備考	写真図版
		グリッド	遺構	層位				口径	底径	器高				
37-1	E-007	N176～183 E96～99	SK4	2層	須恵器	坏	口縁～底	（15.0）	（8.3）	3.9	ロクロ調整、体下半～底外周：回転ヘラケズリ、底：回転糸切り痕	ロクロ調整		12-1
37-2	C-003	N176～183 E96～99	SK4	2層	土師器	坏	体下半～底	—	9.1	（2.6）	ヘラケズリ	ヘラミガキ	底部に墨書「×」、朱痕	12-2
37-3	C-002	N176～183 E96～99	SK4	2層	土師器	坏	体～底	—	（5.0）	（4.4）	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	内面黒色処理	12-3
37-5	E-013	N178 E83	SK11	1層	須恵器	長頸瓶	肩	最大径 （17.2）	—	（4.0）	ロクロ調整	ロクロ調整		12-5
37-6	C-015	N178 E83	SK11	1層	土師器	坏	口縁～体下半	—	—	（3.4）	口縁：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	ヘラミガキ	内面黒色処理	12-6
37-7	C-013	N146 E84	SK13	1層	土師器	坏	口縁～底	（16.9）	—	4.2	体下半：摩滅、体下半：ヘラケズリ	ヘラミガキ	内面黒色処理、外面摩滅	12-7
37-8	C-012	N146 E84	SK13	1層	土師器	坏	口縁～底	15.5	7.0	4.8	口縁～体：ヘラミガキ 底：ヘラケズリ	ヘラミガキ	内面黒色処理	12-8
37-9	C-014	N144 E85	SK13	Ⅳa層	土師器	鉢	口縁～体	（19.5）	—	（7.8）	口縁：ヨコナデ、体：ハケメ	ヘラミガキ	内面黒色処理、外面摩滅	12-9

図版番号	登録番号	出土位置			種別	器種	法量（cm）			重量	備考	写真図版
		グリッド	遺構	層位			全長	幅	厚さ	(g)		
37-4	N-002	N150 E99	SK4	3層	金属製品	鎌	（18.5）	4.0	（1.2）	91.6		12-4

第 37 図　SK 4・11・13 土坑出土遺物

第 37 図 1 ～ 4 は SK 4 で出土した遺物である。1 は須恵器坏である。器形は、平底で厚い底部から直線的に立ち上がり、わずかに外反する。切り離し後、体部下端から底部外周に、回転ヘラケズリ調整が施される。2・3 は土師器の坏である。いずれも口縁が欠損しており全体の形状は不明である。2 は平底、3 はやや丸底気味で緩やかに内湾しながら立ち上がるものと推測される。調整は、2 は外面底部にヘラケズリ、内面にヘラミガキが施され、外面底部に「×」の刻書が見られる。3 は外面上部はミガキ、底部付近でヘラケズリ後ヘラミガキ、内面は全面にヘラミガキが施されたのち黒色処理される。4 は鉄製の鎌と思われる。錆びのため全体の形状は判然としない。

５・６はSK11で出土した遺物である。５は須恵器長頸瓶の肩部の破片である。全体の形状は判然としないが、肩が張り明確な稜を有する器形を呈するものと推測される。６は土師器坏の破片である。全体の器形は判然としないが、外面の口縁と体部との境に稜を持ち、口縁は短く外反して立ち上がる器形である。調整は、外面が口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリで、内面は口縁部に横方向、体部に縦方向のヘラミガキが施された後、黒色処理が施される。

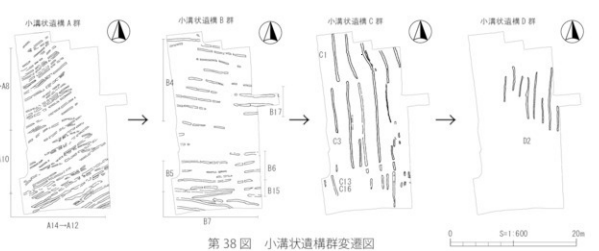
７～９はSK13で出土した遺物である。７・８は土師器の坏である。いずれも堆積土中より出土した。７は８に比して口径が大きく、平底気味の底部から内湾して立ち上がり、外面に稜や段を持たない。調整は、外面体部上半は摩耗しており判然としないが、体部下半から底部にかけてヘラケズリが施され、内面は全面にヘラミガキ調整後黒色処理が施される。８は平底で緩やかに内湾しながら立ち上がり、外面の口縁部と体部との境にわずかに段を有する器形である。調整は内外面ともヘラミガキが施され、内面は黒色処理が施される。

９は土師器の鉢である。底部を欠損している。緩やかに内湾しながら立ち上がり、口唇部に向かってやや内傾する器形である。調整は外面口縁はヨコナデ、体部は摩耗しているが一部にハケメ調整が残る。内面は全面にヘラミガキ調整後、黒色処理が施される。

５．小溝状遺構群

基本層Ⅳ層は、調査区内が生産域であった際に畑の耕作に伴って形成された耕作土である。このため、下面は当時の耕作の深さの下限により形成されたものとして、上面は後続する耕作の影響によって削平されたものとして、それぞれ認識することができる。Ⅳ層の細分層であるⅣａ層とⅣｂ層についても、これと同様の形成過程が存在していたものと考えられ、その結果、両層の土質には若干の違いが生じたと考えられる。調査の結果、Ⅴ層上面で検出した小溝状遺構群は、その耕作の方向性と重複関係、土質の違いなどから、大別して４群（A～D群）に区分されることが明らかとなった。これらの小溝状遺構群は基本層Ⅳ層からⅢｂ層にかけて、ある程度の時間差をもって存在していた遺構であると考えられることから、今回の調査における遺構変遷を辿るうえで一つの基準軸としている。

大別した小溝状遺構群は後続する小溝状遺構群と直接の重複関係を持つことにより新旧を確認している。また並行する溝間の間隔やその分布域の違いなどからさらに細分することが出来るが、これが同一時期での耕作単位の違いを示すものであるのか、耕作単位の時間差を示すものであるのかについては、出土遺物が少ないため判断することが出来なかった。以下では、確認した小溝状遺構群について時期の古いものから順に記載する。各時期の小溝状遺構群内で細分された群における重複関係は第38図に示し、文章中においては新旧を→、重複がない場合は・で示した。



第38図　小溝状遺構群変遷図

（１）小溝状遺構Ａ群（第 18・38・40 図）　北東から南西に斜行する小溝状遺構群である。分布域の違いから、北側の２群（Ａ８→Ａ９）と南側の４群（A10→A11・A12→A14）の６群に細分することができる。いずれもⅣ層を母材とし、Ⅳｂ層を形成した耕作に伴う遺構である。SI ２、SK13 と重複し、これらより新しい。また、SI １との重複関係は持たないが、その周辺で消失するように耕作深度が浅くなる状況が確認された。

（２）小溝状遺構Ｂ群（第 18・38・40 図）　東西方向に展開する小溝状遺構群である。調査区中央では分布が少なく北側の２群（Ｂ４・B17）と南側の３群（Ｂ５→Ｂ６・７）の５群に細分することが出来るが、南北間の重複関係は無いため、南北に展開する小溝状遺構群の耕作が平行して行われていたかは不明である。Ｂ７群は調査区南端付近で確認したが、傾斜方向が若干異なる。ほか調査区中央で検出した SD10・11、調査区北側で検出した SD ６は遺構の規模、堆積状況からこの時期の小溝状遺構とした。いずれの小溝状遺構もⅣｂ層を母材とし、Ⅳａ層を形成した耕作に伴う遺構である。小溝状遺構以外の遺構との重複関係において、Ｂ４群は SB ２、SB ３と重複関係にあり、これより新しい。また B17 群は埋没過程にあった SI １を耕作域に含む。Ｂ６群は SB １と重複関係にあり、これより新しい（第４章第２節参照）。

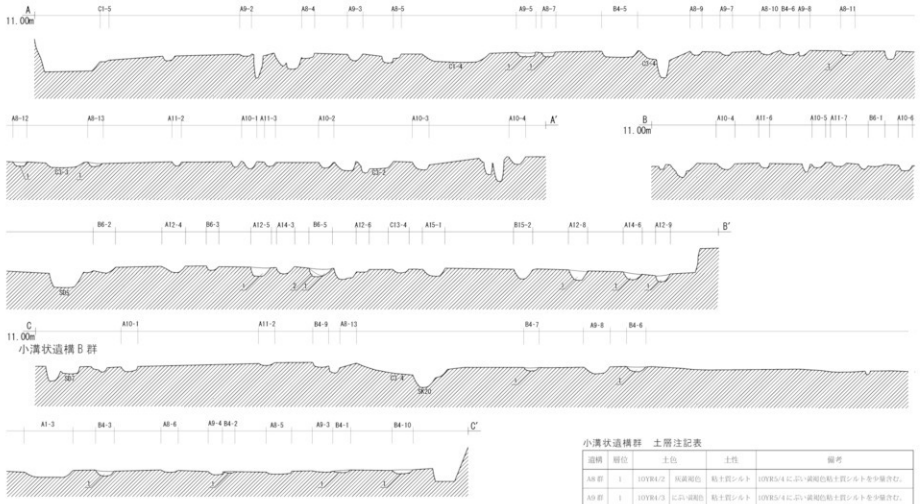
（３）小溝状遺構Ｃ群（第 18・38・39・41 図、図版 12）　南北方向に展開する小溝状遺構である。Ｃ１・３・13・16 の４群に細分することができる。いずれも先行する小溝状遺構Ｂ群とはその耕作の方向性が大きく異なり、遺構の重複関係も比較的明瞭に観察されることから、ある程度の時間差をもって成立していたものと考えられる。Ⅳａ層の耕作に伴う遺構だが、先行する小溝状遺構Ｂ群の耕作範囲との境を基本層内で明確に区分できるものではない。この小溝状遺構群と直接重複関係を有する遺構のうち、新しい遺構は SB ６・７、SK ４・５・７・９・17、SD ５であり、古い遺構は、SB １・２・４・５、SK8・12・22、SD7 等がある（第４章第２節参照）。

（４）小溝状遺構Ｄ群（第 18・38・41 図）　調査区東側において検出した SI １の堆積土上層では、南北方向の小溝を数条検出した。これらの小溝状遺構群の分布は SI １周辺に限られており、断面観察において SI １周辺に限って確認された Ⅲｂ-1 層に関連する小溝状遺構群の可能性がある。小溝状遺構Ｃ群以降に堆積した自然堆積層とⅣ層を母材としていたと考えられるが、検出が部分的であったため詳細は不明である。Ⅴ層上面で検出した遺構の中では、ピット・小柱穴の一部を除き、最も新しい遺構である（第４章第２節参照）。

図版番号	登録番号	出土位置			種別	器種	部位	法量（cm）			外面調整	内面調整	備考	写真図版
		グリッド	遺構	層位				口径	底径	器高				
39-1	C-016	N160～163 E88～91	C3-3	１層	土師器	甕	底	－	(8.0)	(2.7)	摩滅	ヘラナデ、指頭圧痕→下端ヘラケズリ	焼成前穿孔、外面摩滅	12-10

第 39 図　小溝状遺構群出土遺物

第 39 図１は土師器甕の底部の破片と推測される。全体の形状は不明である。底部から胴部下半にかけて外反する器形を呈する。Ⅲ層遺物集中範囲で出土した第 16 図２と同様に胴部下端付近に焼成前に施された穿孔を四方に有するものと推測される。底部下端は内外面ともわずかにつまみ出され面を有する。調整は、外面は摩滅して判然としないが、内面はヘラナデ、ユビオサエの痕が確認される。



第40図　小溝状遺構群断面図・エレベーション図（1）

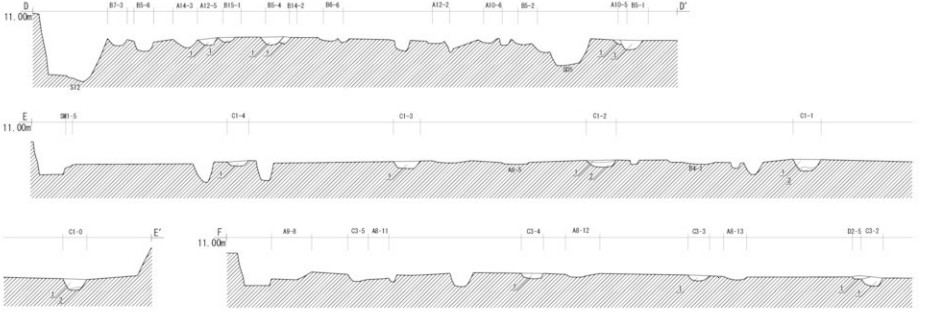
小溝状遺構群　土層注記表

遺構	層位	土色	土性	備考
A8群	1	10YR4/2	灰褐暗色	粘土質シルト	10YR5/4 に ぶい黄褐色粘土質シルトを少量含む。
A9群	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 に ぶい黄褐色粘土質シルトを少量含む。
A10群	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 に ぶい黄褐色粘土質シルトをやや多量含む。
A11群	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 に ぶい黄褐色粘土質シルトをやや多量含む。
A12群	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 に ぶい黄褐色粘土質シルトをやや多量含む。
A14群	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 に ぶい黄褐色粘土質シルトをやや多量含む。炭化物粒やや多量含む。

小溝状遺構群　土層注記表

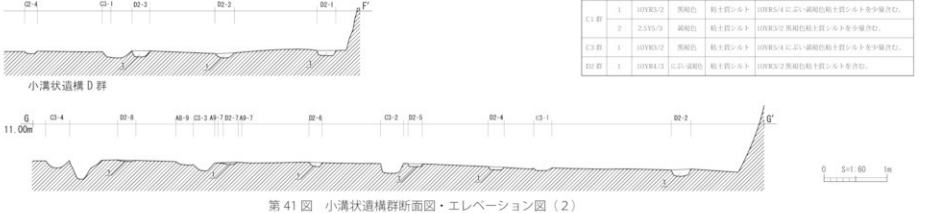
遺構	層位	土色		土性	備考
B4 群	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 に示い黄褐色粘土質シルトをやや多量含む。
B5 群	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 に示い黄褐色粘土質シルトをやや多量含む。
B6 群	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 に示い黄褐色粘土質シルトをやや多量含む。
	2	10YR4/3	に示い黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4 に示い黄褐色粘土質シルトを多量含む。

小溝状遺構 C 群



小溝状遺構群　土層注記表

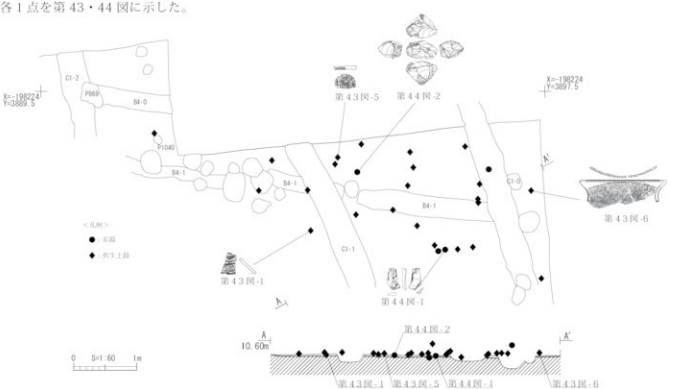
遺構	層位	土色		土性	備考
C1 群	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 に示い黄褐色粘土質シルトを少量含む。
	2	2.5Y5/3	黄褐色	粘土質シルト	10YR3/2 黒褐色粘土質シルトを少量含む。
C3 群	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4 に示い黄褐色粘土質シルトを少量含む。
D2 群	1	10YR4/3	に示い黄褐色	粘土質シルト	10YR3/2 黒褐色粘土質シルトを含む。



第 41 図　小溝状遺構群断面図・エレベーション図（２）

６．遺構外出土遺物

（１）Ⅳ層出土遺物範囲（第 42 ～ 44 図、図版 12）　調査区北東側では、Ⅳ層中から弥生時代の土器片が比較的多く出土している。第 42 図は調査区北東隅の出土状況を分布図として示した。この範囲における出土遺物は、弥生土器が 23 点、石器４点が確認された。これらの遺物のうち器形が判別できた弥生土器８点と石器・石核各１点を第 43・44 図に示した。



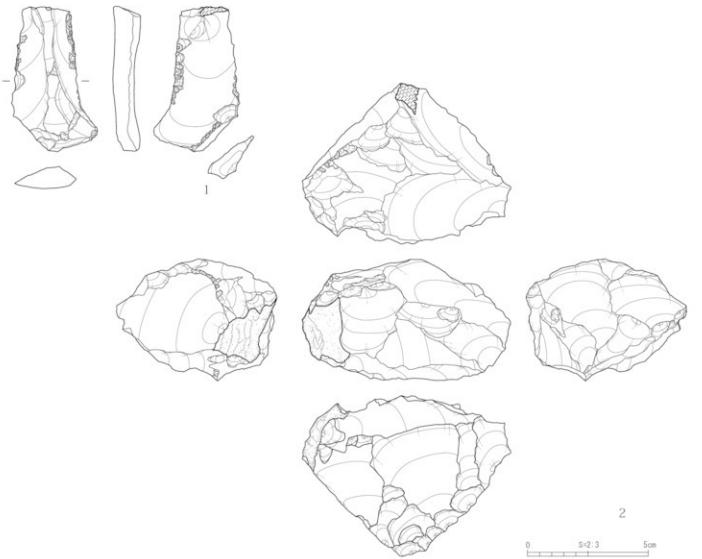
第 42 図　Ⅳ層遺物出土分布図

図版番号	登録番号	出土位置 グリッド	遺構	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考	写真図版
43-1	B-001	N174 E94	—	Ⅳ層	弥生土器	壺	体部下半～口縁	横羽縄文　沈線文（連続山形文・横位直線文）	ミガキ		12-11
43-2	B-005	N164 ～ 167 E92 ～ 95	—	Ⅳ層	弥生土器	鉢	口縁～体部	LR 縄文　平行沈線文	沈線文　ミガキ		12-12
43-3	B-002	N172 ～ 175 E92 ～ 95	—	Ⅳ層	弥生土器	深鉢	体部	LR 縄文　平行沈線文	ミガキ		12-13
43-4	B-012	N164 ～ 167 E92 ～ 95	—	Ⅳ層	弥生土器	深鉢	体部	LR 縄文　沈線文	ミガキ		12-14
43-5	B-003	N175 E95	—	Ⅳ層	弥生土器	鉢 or 深鉢	体部下半～底部	植物繊維回転文　沈線文	ナデ	底部木葉痕	12-15
43-6	B-006	N175 E98	—	Ⅳ層	弥生土器	壺	口縁～頸部	口縁部：口縁部：LR 縄文　頸部：ミガキ	ミガキ		12-16
43-7	B-004	N172 ～ 175 E92 ～ 95	—	Ⅳ層	弥生土器	甕	体部	刺点列突文	ミガキ		12-17
43-8	B-020	N172 ～ 175 E92 ～ 95	—	Ⅳ層	弥生土器	甕	口縁～体部上半	口縁部：LR 縄文　体部：刺点列突文　ミガキ	ミガキ		12-18

第 43 図　Ⅳ層出土遺物（１）

第 43 図１は蓋の体部下半～口縁部である。LR 縄文を横位に半単位ずらして層状に回転施文した後、幅２～2.5mm の沈線で連続山形と横位直線文が施文され、沈線間はミガキ調整により地文が磨消される。２は鉢の口縁部～体部上半である。外面は LR 縄文を回転施文施の後、口縁部に２条の平行沈線、内面には１条の沈線文が施文される。３・４は深鉢の体部である。ともに LR 縄文の回転施文の後、３は２条の平行沈線が、４は沈線が１条施文される。５は鉢もしくは深鉢の底部である。外面には植物茎回転文が施された後、沈線文が施文される。底面には木葉痕がある。６は壺の口縁～頸部で、口唇部に LR 縄文が回転施文される。７・８は甕である。ともに、体部に列点刺突文が施され、８は口唇部に LR 縄文が回転施文される。１～８のいずれも内面はミガキ調整が施される。

第 44 図１は、不定形石器である。流紋岩の縦長の剥片を素材とし、主に右側縁部に部分的に二次加工が施され、刃部が形成されている。２は流紋岩の石核である。



図版番号	登録番号	出土位置 グリッド	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm) 全長	幅	厚さ	剥離角 (度)	重量 (g)	石材	母岩	自然面	備考	写真図版
44-1	Ka-e6-001	N174 E96	–	Ⅳ層	打製石器	不定形石器	5.8	3.4	1.1	–	17.15	流紋岩	–	–	R.F	12-19
44-2	Ka-m-001	N175 E95	–	Ⅳ層	打製石器	石核	4.8	8.3	6.4	–	197.98	流紋岩	–	–	自然面有。	12-20

第 44 図　Ⅳ層出土遺物（２）

（２）縄文土器・弥生土器（第 45・46 図、図版 13）　今回の調査では縄文土器・弥生土器の破片が約 260 点程出土している。縄文土器は調査区全体にわたり出土しており、基本層Ⅲ～Ⅳ層および検出遺構堆積土中から約 80 点が出土しているが、遺構に伴うものでは無く、混入したものである。

弥生土器は破片約 180 点を数え、前述したⅣ層遺物集中範囲付近ないしは調査区北側での出土が 125 点と多い。他、ピット、小溝状遺構群等から出土しているが、これらは混入したものである。

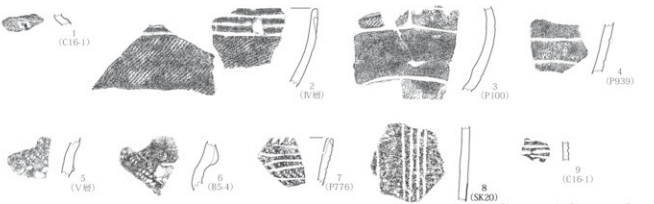
以下、縄文土器と弥生土器に分けてその概要を報告する。

縄文土器は壺１点、鉢２点、深鉢６点を第 45 図に示した。すべて破片資料であり全体の形は判然としないが、その文様等から縄文時代後期から晩期初頭にかけてのものと考えられる。

第 45 図１は壺の体部上半と考えられる。無文の表面上に瘤状の突起が貼り付けられる。後期後葉の金剛寺式に位置づけられる。２は鉢の口縁～体部である。LR 縄文が施された後、口縁部に３条の平行沈線文が施文され、ヘラ状工具により刺突される。３・４は深鉢の体部と考えられる。３は LR 縄文の地文に沈線文を施文し、ミガキ調整で縄文が磨消される。４は表面が摩滅しており判然としないが、ミガキ調整後に平行沈線文が２条施文される。５・６は深鉢の体部上半である。いずれも RL 縄文の地文に刺突文が施文される。６は粘土を貼り付けた突起の下に横位の沈線文が施文される。７は RL 縄文の地文に、口縁端部に刻みが施され、横位の沈線文が施文される。８は深鉢の体部で４条１単位の沈線文が縦方向に施文される。９は鉢の体部で、４条の平行沈線文が施文される。

弥生土器は、壺２点、高坏１点、鉢及び深鉢９点、甕４点の計 16 点を第 46 図に示した。弥生時代中期前葉～後期の遺物が出土している。第 45 図－ 17 は、種別不明である。

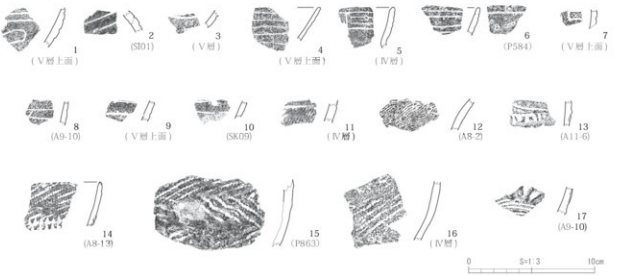
第 46 図１は鉢の体部である。LR 縄文を横位に回転施文された後、沈線文が施文される。２は壺の体部である。２条の平行沈線文が斜行する。３は高坏と思われる。無節１縄文の地文に幾何学文が施文される。４は鉢の口縁部で、５条以上の沈線文が横位に施文される。５・６は深鉢の口縁部で、５は四角文が、６は外面に複線変形工字



図版番号	登録番号	出土位置 グリッド	遺構	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考	写真図版
45-1	A-004	－	C16-1	１層	縄文土器	壺	頸部	瘤状突起	ナデ		13-1
45-2	A-005	N168～175 E80～99	－	攪乱	縄文土器	鉢	口縁～胴部	口縁部：平行沈線文　刺突文　体部：LR縄文	ミガキ		13-2
45-3	A-006	N160～163 E92～95	P100	１層	縄文土器	深鉢	体部上半	撚糸縄文（LR）　沈線文	ナデ		13-3
45-4	A-007	－	P939	－	縄文土器	深鉢	体部上半	平行沈線文　ミガキ	摩滅		13-4
45-5	A-008	N144～147 E80～91	－	V層上面	縄文土器	深鉢	体部上半	RL 縄文　刺突文	ミガキ		13-5
45-6	A-009	－	B5-4	１層	縄文土器	深鉢	体部上半	RL 縄文　沈線文　突起	ナデ		13-6
45-7	A-010	－	P776	１層	縄文土器	深鉢	口縁部	口縁部：キザミ　体部：RL 縄文　沈線文	ナデ		13-7
45-8	A-011	－	SK20	２層	縄文土器	深鉢	体部	平行沈線文	ナデ		13-8
45-9	A-012	－	C16-1	１層	縄文土器	鉢	体部	平行沈線文	ナデ		13-9

第 45 図　遺構外出土遺物（縄文土器）

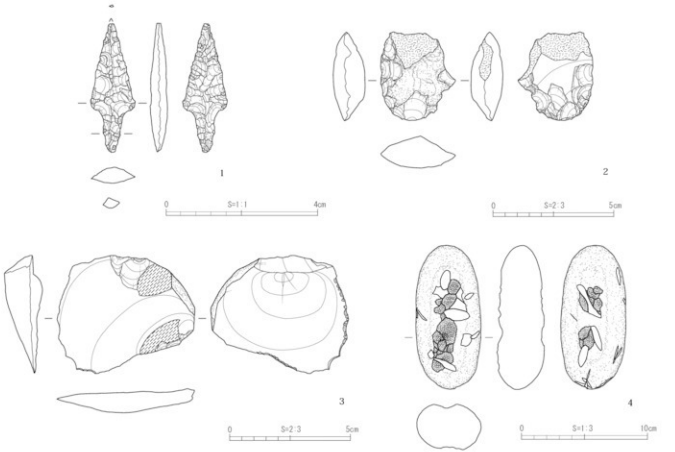
文が、内面には沈線文が横位に施文される。7 ～ 11 は鉢または深鉢の体部である。7 は LR 縄文に四角文が施文され、ミガキ調整により磨消される。8 は LR 縄文の地文に平行沈線文が、9 は撚糸文の地文に平行沈線文が弧状に施文される。10 は無文の表面に、11 は無節 l 縄文の地文に横位の沈線文が施文される。12 は壺の頸部で、R 撚糸文の地文に、２本１組の波状の平行沈線文が施文される。13 ～ 16 は弥生後期に属するものと考えられる。13 は沈線文と横位の交互刺突文が施文され、14 は口縁端部に刻みが、頸部に複数の横位の沈線上に交互刺突文が施文される。15 は外面に LR 縄文と RL 縄文が羽状に施文される。胎土中に籾殻が混入した痕跡がある。16 は外面に LR 縄文が施文され、胎土中に籾殻が混入した痕跡が見られる。17 は深鉢の体部である。RL の帯縄文と微隆起線文、三角形の刺突文が施文されている。



図版番号	登録番号	出土位置			種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考	写真図版
		グリッド	遺構	層位							
46-1	B-009	N152 ～ 155 E96 ～ 99	—	Ⅴ層上面	弥生土器	鉢	体部	LR 縄文　沈線文	摩滅		13-10
46-2	B-013	—	SI01	埋積土	弥生土器	壺	体部	斜行する平行沈線文	摩滅		13-11
46-3	B-008	N180 ～ 183 E85 ～ 87	—	Ⅴ層上面	弥生土器	高杯	杯部	磨消縄文（1）　幾何学文	ミガキ		13-12
46-4	B-014	N177 E86	—	Ⅴ層	弥生土器	鉢	口縁	平行沈線文	ミガキ		13-13
46-5	B-010	N172 ～ 175 E86 ～ 91	—	各層	弥生土器	深鉢	口縁～頸部	沈線文（四角文）	ミガキ		13-14
46-6	B-011	—	P584	埋積土	弥生土器	深鉢	口縁部	幾何変形工字文	沈線文　摩滅		13-15
46-7	B-015	N180 ～ 183 E80 ～ 87	—	Ⅴ層上面	弥生土器	深鉢	体部	磨消縄文（LR）　四角文	ミガキ		13-16
46-8	B-016	—	A9-10	埋積土	弥生土器	深鉢	体部	LR 縄文　平行沈線文	ミガキ		13-17
46-9	B-017	N176 ～ 179 E87 ～ 87	—	Ⅴ層上面	弥生土器	鉢 or 深鉢	体部	撚糸文　弧状の平行沈線文	ミガキ		13-18
46-10	B-018	—	SK9	埋積土	弥生土器	深鉢	体部	沈線文	ミガキ		13-19
46-11	B-021	—	—	各層	弥生土器	鉢 or 深鉢	体部上半	1 縄文　沈線文	ミガキ		13-20
46-12	B-007	N176 E85	A8-2	Ⅴ層	弥生土器	壺	頸部	R 撚糸文　波状の平行沈線文（2 本一組）	ナデ		13-21
46-13	B-022	N155 E92	A11-6	埋積土	弥生土器	甕	体部上半	沈線文　交互刺突文	摩滅		13-22
46-14	B-023	—	A8-13	埋積土	弥生土器	甕	口縁～頸部	口縁部：ナデ　口縁部：LR 縄文 体部上端：沈線文→交互刺突文	ナデ		13-23
46-15	B-024	N173 E90	P863	Ⅴ層	弥生土器	甕	体部	LR 縄文・RL 縄文（羽状）	摩滅	胎土に籾殻混入痕	13-24
46-16	B-025	N168 ～ 171 E87 ～ 89	—	各層	弥生土器	甕	体部	LR 縄文	ナデ	胎土に籾殻混入痕	13-25
46-17	B-019	—	A9-10	埋積土	不明	深鉢	体部	RL 帯縄文　微隆起線文　三角形の刺突文	ナデ		13-26

第 46 図　遺構外出土遺物（弥生土器他）

石器は、石鏃１点、不定形石器１点、微細剥離痕のある石器１点、敲石１点を第 47 図に示した。１は有茎石鏃である。先端部をわずかに欠損している。細かな二次加工が施されており、最後に基部を成形している。断面形状は、身部がレンズ状、茎部は菱形を呈する。石材は珪質頁岩である。２は不定形石器である。表面に自然面がある。全体的に被熱しており、上半部は剥落している。側縁部から基部に二次加工が残されている。石材は鉄石英である。３は微細剥離痕のある剥片である。横長の剥片を素材とし、腹面の右側縁には、使用に伴うものと考えられる微細剥離痕がある。石材は流紋岩である。４は敲石である。表裏面の中央に複数の敲打痕があり、表面の中央よりやや下側の敲打痕は敲打の累積により凹んでいる。石材は石英安山岩である。

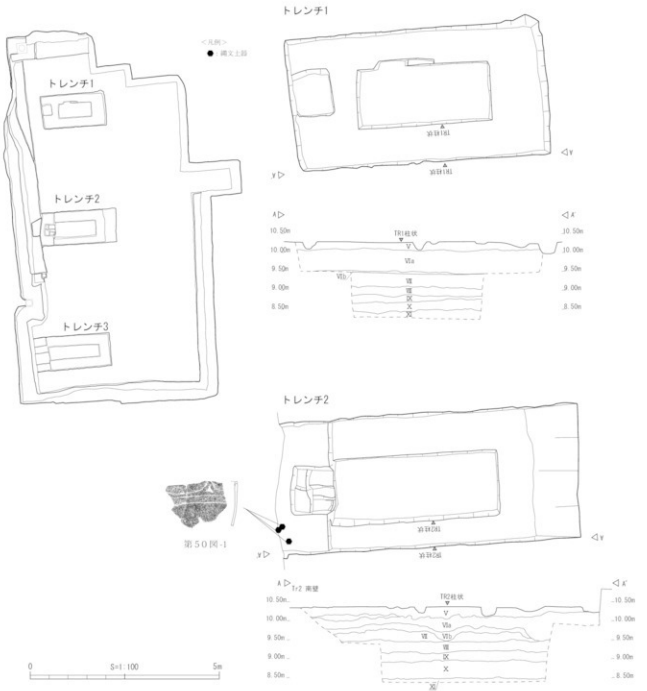


図版番号	登録番号	出土位置 グリッド	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm) 全長	幅	厚さ	剥離角 (度)	重量 (g)	石材	母岩	自然面	備考	写真図版
47-1	Ka-a1-001	N180～183 E92～95	SI1	—	打製石器	石鏃	(3.4)	1.2	0.5	—	1.01	珪質頁岩	—	無	有茎、先端部欠損	13-27
47-2	Ka-e6-002	N164～167 E92～95	SI1	—	打製石器	不定形石器	3.6	3.0	1.4	—	11.93	鉄石英	—	有	RF	13-28
47-3	Ka-k-001	N172～175 E88～91	SI02	—	打製石器	微細剥離痕のある剥片	4.7	5.5	1.5	—	25.69	流紋岩	—	有		13-29
47-4	Kc-c-001	N165 E102	SI1	—	礫石器	敲石	11.4	5.2	3.8	—	269.73	石英安山岩	—	有		13-30

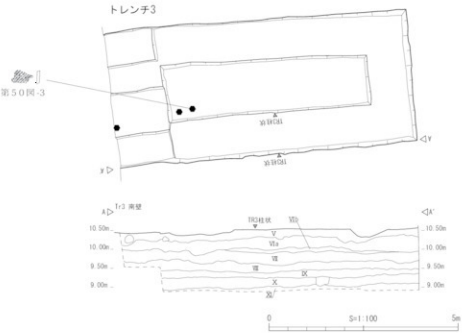
第 47 図　遺構外出土遺物（石器）

第３節　下層部の調査

基本層Ⅴ層上面での調査終了後、調査区内に３箇所下層調査トレンチを設定し、弥生時代以前の遺構・遺物の確認・記録を目的とした調査（下層トレンチ調査）を実施した（第 48・49 図）。調査は、基本層Ⅴ層上面から XI 層まで層位的に掘り下げ、各層離面で遺構や遺物の残存状況を確認した。その結果、いずれのトレンチからも遺構は検出されず、トレンチ２のⅥａ層上面及びトレンチ３のⅧ層とⅩ層で縄文時代後期から晩期の土器が３点出土した。各トレンチの基本層は大きな差はないが、基本層Ⅵ層は北に向かい層厚を増し、Ⅵ層以下は北側に下り傾斜する傾向がある。Ⅷ層以下では層厚に大きな変化は無い。

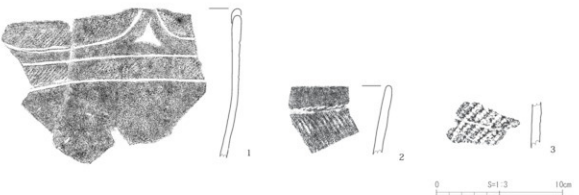


第 48 図　トレンチ１・２平面図・断面図・遺物出土分布図



第 49 図　トレンチ３平面図・断面図・遺物出土分布図

下層トレンチからは３点の縄文土器が出土した。第 50 図１は２トレンチⅥａ層より出土した深鉢の口縁から体部上半の破片である。口縁は波状を呈し、LR 縄文の地文に沈線文及び三叉文が施文される。沈線文で区画された内部は、磨き調整が施される。縄文時代後期末葉から晩期初頭に位置づけられる。２は３トレンチⅧ層より出土した深鉢の口縁から体部上半の破片である。RL 縄文を施した後口縁部を磨消し、境界部分に無節 R の原体で横位に側面押圧を施している。３は深鉢体部の破片である。LR 縄文の地文のみ観察される。



図版番号	登録番号	出土位置 グリッド	遺構	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考	写真図版
50-1	A-001	N160 E84	Tr2	Ⅵａ層	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	波状口縁　擬沈線文（LR）　沈線文　三叉文	ミガキ		13-31
50-2	A-002	N144～147 E80～83	Tr3	Ⅷ層	縄文土器	深鉢	口縁～体部	RL 縄文　側面押圧 R	ミガキ		13-32
50-3	A-003	N147 E85	Tr3	Ⅸ層	縄文土器	深鉢	体部	LR 縄文	ナデ		13-33

第 50 図　下層トレンチ出土遺物

第4章　まとめ

第 1 節　出土遺物について

六反田遺跡では、総数 1873 点の遺物が出土した。その内訳は、土器 1808 点、金属製品 14 点、石器 51 点である。また、土器の内訳は、縄文土器 82 点、弥生土器 180 点、古代の須恵器 189 点・土師器 1357 点である。ここでは土器を中心に当遺跡の時期ごとの様相を概観していきたい。

（1）縄文土器

縄文土器は遺構堆積土、並びにⅢ・Ⅳ層から 79 点が出土した。出土位置は調査区全域に疎らに見られ、特別のまとまりは見られない。また下層トレンチ調査において 3 点が出土した。土器片は瘤状突起を有する第 45 図 1 や、三叉文が施文される第 50 図 1 等、概ね縄文時代後期から晩期初頭にかけてのものと考えられる。

（2）弥生土器

破片数約 180 点の出土が見られ、このうちの約 7 割が調査区北東部のⅣ層から出土している。それらの時期は、弥生時代中期前葉から中葉を主体とし、そのほか、中期後葉と後期の遺物が少量出土している。特筆されるものに、破片資料であるが、胎土に籾殻を混入した破片第 46 図 15・16 が上げられる。類例は仙台市内では、沼向遺跡（仙台市教育委員会 2010b）や富沢遺跡（仙台市教育委員会 1999a）等で出土している。これらの資料は弥生時代後期後半に限定されており、何らかの特別な場合のみ籾殻を混入して土器を製作した可能性を示唆するものと考えられている（仙台市教育委員会 1999a）。今後の出土事例の蓄積が望まれる。

（3）須恵器・土師器

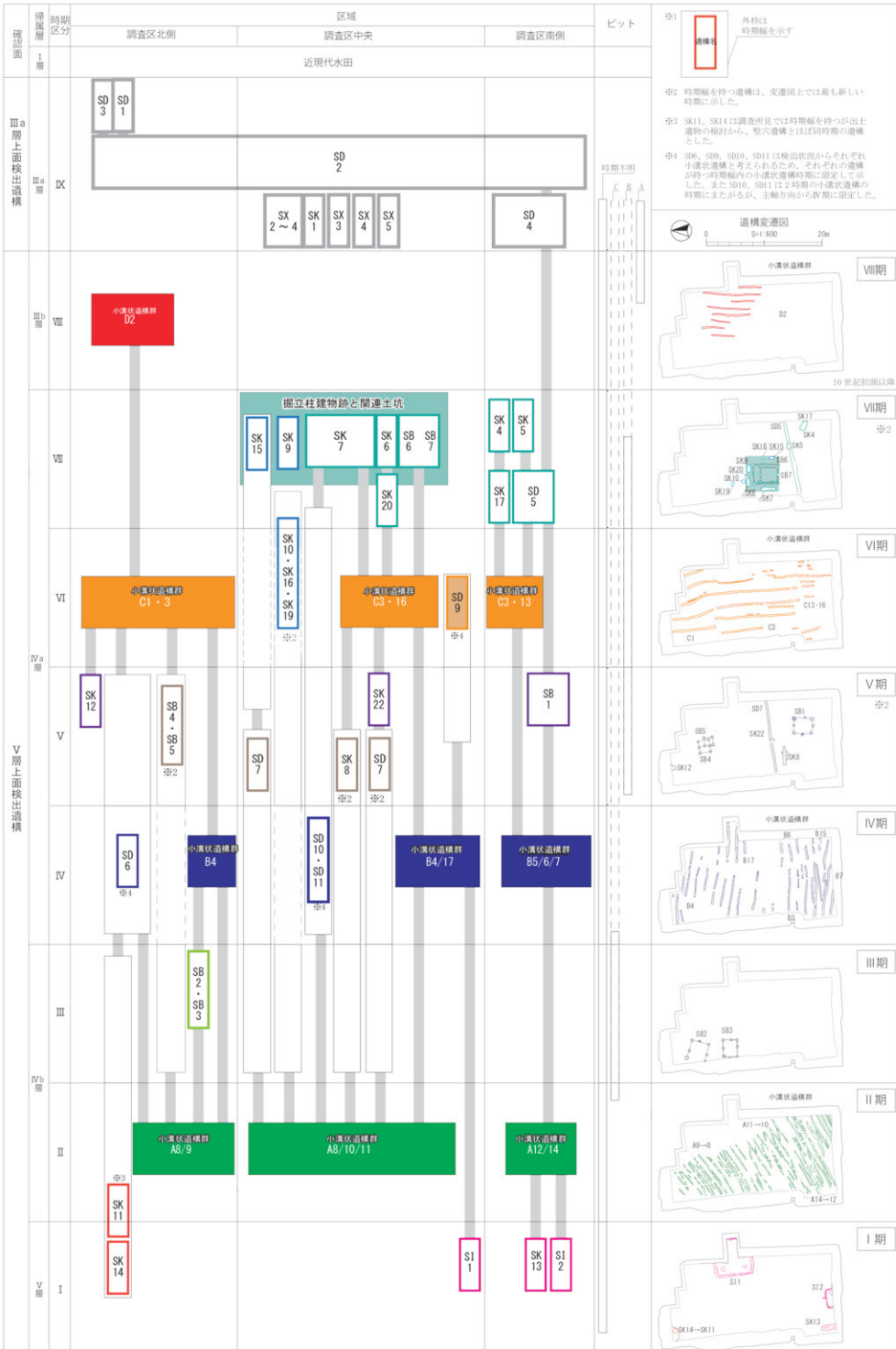
今回の調査で出土した須恵器・土師器は基本層Ⅲ～Ⅳ層中および各遺構堆積土から出土している（註 2）。これらの遺物の中で、遺構に共伴する遺物は限られており、SI 1・2 竪穴住居跡床面および施設で出土した遺物、SK11 土坑底面直上の出土遺物が相当する。また SK13 土坑堆積土において一括廃棄と思われる 1 層出土遺物がある。これらの出土遺物の中で、土師器は国分寺下層式（氏家 1967）に相当するもの、古墳時代終末期の末葉（7 世紀末葉～ 8 世紀初頭）の特徴を有するものに分けられるが、それらの国分寺下層式を前後する範囲の検討については、『沼向遺跡第 4 次～ 34 次調査』（仙台市教育委員会 2010b）に詳述されている。国分寺下層式の時期は奈良時代の 8 世紀前葉から後葉と推定されており、以下、出土遺物を遺構ごとに報告する。

SK11 土坑：底面直上で出土した土師器坏第 37 図 6 は、口縁部と体部の境に稜を持ち、口縁部は外反し、外面はヨコナデ調整されており、国分寺下層式に先行し、古墳時代後終末期の末葉の特徴を有する。

SK13 土坑：土師器坏 2 点と鉢 1 点が出土している。第 37 図 8 は、内外面ともに口縁部と体部の境に段があり、内外面をミガキ調整する平底の坏である。第 37 図 7 は器高に比して口径・底径が大きく、丸底の坏であるが、底部と体部の境に不明瞭な稜を持つ。第 37 図 9 の鉢は口縁部と体部の境となる稜がほとんど消失した形であるが、口縁部はやや外反し、国分寺下層式に先行する形態的特徴がある。これらは国分寺下層式の中でも古い様相を示していると考えられる。

SI1 竪穴住居跡：主な遺物は、床面施設から出土した土師器坏 2 点、土師器甕 2 点、須恵器坏 1 点である。第 22 図 6 と第 22 図 7 は、カマド推定位置の西側に位置する SK2 土坑状遺構から出土した土師器坏である。いずれも内外面ともに丁寧にミガキが施されている。第 22 図 6 はほとんど底部が残存しないが、平底と推定される。第 22 図 7 は丸底の坏で底部までミガキが施される。ともに国分寺下層式に相当する。第 22 図 8・9 は同じ土坑で出土した土師器甕である。第 22 図 3 は SK3 土坑状遺構から出土した須恵器坏であり、器形・調整から 8 世紀前葉～中葉と考えられる。

SI2 竪穴住居跡：新段階の床面出土遺物として、第 25 図 1 と第 25 図 2、古段階の床面出土遺物として第 25 図 3 がある。第 25 図 1 は外面のミガキは部分的で段は有さず、底部から体部にかけてヘラケズリの残る平底の坏である。また内


確認面
帰属層
時期区分
区域
調査区北側
調査区中央
調査区南側
ピット
※1
遺構名
外枠は時期幅を示す
※2 時期幅を持つ遺構は、変遷図上では最も新しい時期に示した。
※3 SK11、SK14は調査所見では時期幅を持つが出土遺物の検討から、竪穴遺構とほぼ同時期の遺構とした。
※4 SD6、SD9、SD10、SD11は検出状況からそれぞれ小溝状遺構と考えられるため、それぞれの遺構が持つ時期幅内の小溝状遺構時期に限定して示した。またSD10、SD11は2時期の小溝状遺構の時期にまたがるが、主軸方向からⅣ期に限定した。
遺構変遷図
0
S=1:600
20m
Ⅲa層上面検出遺構
Ⅴ層上面検出遺構
I層
近現代水田
Ⅲa層
Ⅲb層
Ⅳa層
Ⅳb層
Ⅴ層
Ⅸ
Ⅷ
Ⅶ
Ⅵ
Ⅴ
Ⅳ
Ⅲ
Ⅱ
I
SD 3
SD 1
SD 2
SX 2～4
SK 1
SX 3
SX 4
SX 5
SD 4
時期不明
C
B
A
小溝状遺構群 D2
掘立柱建物跡と関連土坑
SK 15
SK 9
SK 7
SK 6
SB 6
SB 7
SK 20
SK 4
SK 5
SK 17
SD 5
SK 10・SK 16・SK 19
※2
小溝状遺構群 C1・3
小溝状遺構群 C3・16
SD 9
※4
小溝状遺構群 C3・13
SK 12
SB 4・SB 5
※2
SD 7
SK 8
※2
SK 22
SD 7
※2
SB 1
SD 6
※4
小溝状遺構群 B4
SD 10・SD 11
※4
小溝状遺構群 B4/17
小溝状遺構群 B5/6/7
SB 2・SB 3
小溝状遺構群 A8/9
小溝状遺構群 A8/10/11
小溝状遺構群 A12/14
※3
SK 11
SK 14
SI 1
SK 13
SI 2
10世紀初頭以降
Ⅷ期
Ⅶ期
※2
Ⅵ期
Ⅴ期
※2
Ⅳ期
Ⅲ期
Ⅱ期
Ⅰ期

第51図　遺構変遷図

面の黒色処理は完全ではない。第 25 図２は器高がやや高い丸底の坏であるが、体部下半から底部はヘラケズリ調整が施されている。第 25 図３は最大径を体部上位に持ち口縁部はやや内傾して立ち上がる。いずれも国分寺下層式に相当するが、底部は平底あるいはそれに近い形態であり、新しい様相を示していると考えられる。

このように、これらの遺構の時期は、国分寺下層式期に先行する SK11、国分寺下層式期でも前半の８世紀前葉～中葉の SK13、SI １、後半の８世紀中葉～後葉の SI ２の２時期に大きく分けられる。

また、六反田遺跡のこれまでの調査成果をみると、国分寺下層式期の遺構は第２次調査第１号住居跡、第３次調査７号住居跡、第５次調査 SI111 住居跡などがあり、これらを含めて、この時期の居住域と生産域の展開を考えていく必要がある。

第２節　遺構の変遷について

Ⅴ層上面で検出した遺構については、４群に区分される小溝状遺構群との重複関係を軸とし、それぞれの遺構の帰属時期を整理した（第３章参照）。４群の小溝状遺構群は、A 群がⅣ b 層、B 群および C 群がⅣ a 層、D 群がⅢ b-1 層を耕作土としており、これらとの重複関係や調査区壁土層断面における確認状況、出土遺物の検討などから、今回の調査で確認した遺構をⅦ期に区分し、その前後関係を示したものが第 51 図である。本図中では個々の遺構の帰属時期において、その上限あるいは下限のみが判別し得たもの、あるいは他の遺構との重複関係が確認されず時期幅があるものについては、最も新しい時期とした。また、出土遺物から１期は古墳時代終末期の末葉から奈良時代にかけての遺構群であり、８世紀末葉以降は、居住域と生産域としての土地利用をを繰り返していたことが知られる。そのうち灰白色火山灰堆積以降のⅧ～ IX 期は 10 世紀初頭以降の平安時代と考えられる。以下、各時期に該当する遺構の変遷である。

Ⅰ期

今回の調査において確認された最も古い遺構の時期である。主に居住域として使用されていた時期で、調査区東側で SI １竪穴住居跡、南側で SI ２竪穴住居跡および SK13 土坑、調査区北側で SK11 土坑が検出された。

Ⅱ期

小溝状遺構 A 群の時期であり、居住域から生産域へと土地利用が変化した。なお、小溝状遺構 A 群は先行する SI １竪穴住居跡と直接的な重複関係を持たない。

Ⅲ期

調査区北側で SB ２・SB ３掘立柱建物跡が建てられた時期で、生産域から居住域へ再び土地利用が変化した時期である。Ⅲ期の遺構は、平面的な遺構の重複関係に加え、西壁断面の観察において、Ⅳ b 層に伴う小溝状遺構 A 群とⅣ期以降の小溝状遺構（B 群）を伴うⅣ a 層との層間に、これらの柱穴断面が確認されたことにより分離したものである。

Ⅳ期

小溝状遺構 B 群の時期である。本期の小溝状遺構群はⅡ期のそれに比してその検出密度がやや低く、特に調査区中央付近ではほとんど確認できなかった。なお SI １竪穴住居跡はその埋没過程で、小溝状遺構 B17 群の耕作によって削平されていることが判明している。

Ⅴ期

調査区南側で SB １掘立柱建物跡が建てられた時期である。北側では SK12 土坑がある。SB １掘立柱建物跡はⅣ期・Ⅵ期の小溝状遺構群との重複関係が確認されている。SK12 土坑はⅥ期の小溝状遺構（C 群）より古いことが北壁断面で確認されており、当期に帰属すると判断した。このほか当期にその上限を持つ遺構には、調査区中央で確認された SD7、SK8、北側の SB4、SB5 がある。いずれもⅥ期の小溝状遺構群（C 群）より古いが、

Ⅳ期の小溝状遺構群（B 群）との重複関係が不明な遺構である。このためⅢ期もしくはⅤ期に帰属する遺構として時間幅をもって示した。

Ⅵ期

小溝状遺構 C 群が相当し、小溝の方向性が南北方向へ大きく変化した時期である。

Ⅶ期

調査区中央で確認した SB ６・７掘立柱建物跡と SK ６・７・９土坑、SD ５溝跡、調査区南東で確認した SK ４・５・17 土坑がそれぞれ帰属する。また SK10・16・19 土坑は小溝状遺構 A 群に先行することが重複関係から明らかであるが、それ以外の遺構との重複関係が確認できなかった。このためⅦ期以前の遺構として表現している。なお、この時期には SB ６・７掘立柱建物跡の外側に SK ６・７・９土坑が検出されている。これと類似する遺構が大野田遺跡第２次調査（仙台市教育委員会 2001）で SB １掘立柱建物跡として報告されている。SB ６掘立柱建物跡および周辺土坑の帰属する時期や施設の性格などについては、今後の検討課題である。

Ⅷ期

小溝状遺構群 D 群が展開する時期であり、小溝の方向性は先行する小溝状遺構 C 群に類似した南北方向に認められる。SI １竪穴住居跡において灰白色火山灰を含むⅢ b-2 層があることから、10 世紀初頭以降の遺構群であるが、先行するⅧ期の遺構群の中で出土遺物から明確に時期を推定し得るものは限られており、Ⅶ期とⅧ期との間にどれだけの時期幅があったかは明確ではない。

Ⅸ期

Ⅲ層上面において検出した SD ２～SD ４溝跡、SK １土坑、SX ２・３・５・７性格不明遺構が相当する。

第３節　まとめ

1. 六反田遺跡は、仙台市太白区大野田に所在する。学校校舎増築計画に伴い、第９次調査を行った。
2. 今回の調査では古墳時代終末期の末葉から平安時代にかけての遺構が検出され、Ⅰ～Ⅸ期の９時期にわたる遺構の変遷が明らかにされ、大きな成果となった。Ⅰ期は古墳時代終末期の末葉の土坑と奈良時代の竪穴住居跡・土坑、Ⅱ期は畑跡、Ⅲ期は掘立柱建物跡、Ⅳ期は畑跡、Ⅴ期は掘立柱建物跡・土坑・溝跡、Ⅵ期は畑跡、Ⅶ期は掘立柱建物跡・溝跡・土坑、Ⅷ期は平安時代の畑跡、Ⅸ期は平安時代の溝跡・性格不明遺構等が検出された。
3. 遺物は、縄文時代後期から近世にかけて出土している。近世の遺物は極めて少なく、古代の遺物は８世紀前葉から８世紀後葉を中心とする。弥生時代の遺物は中期前葉から中葉を主体とし、中期後葉と後期の遺物も少量出土している。縄文時代の遺物は後期から晩期初頭にかけて少量出土している。
4. 今回の調査区は大野田官衙遺跡の西辺区画溝から約 35m ほど西側に位置している。大野田官衙遺跡（仙台市教育委員会 2011b）では官衙を構成する建物跡は８世紀第Ⅱ四半期には廃絶していたと考えられている。今回の調査では、直接官衙に関連すると推測される遺構は検出されていないが、遺構変遷Ⅰ期の古い時期は官衙の時期と平行している。また、大野田官衙遺跡では官衙に後続する時期には鉄滓や鞴の羽口片が出土しており、大野田古墳群 9A 区でも広範囲で鉄滓や鞴の羽口の破片が出土している。鍛冶関連遺構は下ノ内遺跡においては、８世紀後半から９世紀とされる竪穴住居が鍛冶関連遺構として報告されているが、今回の調査においては鞴の羽口の破片の出土はあるが、鉄滓等の出土は無く、調査範囲における鍛冶関連遺構の展開に関しては不明である。

註

1：松本秀明 1994「仙台平野の成り立ち」『仙台市史・自然編』仙台市史編さん委員会

2：遺構の時期は異なるが、SK ４土坑からは、国分寺下層式期の土器が多く出土しており、第 37 図に３点を図示した。第 37 図２は平底の坏である。残存する外体部にはミガキの痕跡は無い。また内面は黒色処理されておらず、外面が一部炭化している。第 37 図３は内外面が底部までミガキが施される平底の坏である。これらの土師器と同一層から出土した須恵器坏第 37 図１は器高がやや高く、体部から口縁部は直線的に外傾する傾向を示す。底部は回転糸切り後、底部外周から下端に回転ヘラケズリが施されており、８世紀中葉から後葉のものと考えられる。

引用・参考文献

石川日出志他 2005『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年－』科研報告書

氏家和典 1967「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』

小林達雄他 2008『総覧　縄文土器』総覧　縄文土器刊行会

斎野裕彦 2011「東北地域」『講座日本の考古学５弥生時代（上）』青木書店

須藤　隆 1998『東日本先史時代文化変化・社会変動の研究－縄文から弥生へ－』纂修堂

仙台市教育委員会 1984a『山口遺跡Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第 61 集

仙台市教育委員会 1984b『六反田遺跡Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第 72 集

仙台市教育委員会・日本電信電話株式会社東北総支社 1987『六反田遺跡Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第 102 集

仙台市教育委員会 1990『下ノ内遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅱ－』仙台市文化財調査報告書第 136 集

仙台市教育委員会 1996『中在家南遺跡他』仙台市文化財調査報告書第 213 集

仙台市教育委員会 1999『富沢遺跡第 104 次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 235 集

仙台市教育委員会 2000a『高田Ｂ遺跡』仙台市文化財調査報告書第 242 集

仙台市教育委員会 2000b『大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡』仙台市文化財調査報告書第 243 集

仙台市教育委員会 2001『大野田遺跡第２次調査』仙台市文化財調査報告書第 252 集

仙台市教育委員会 2004a『元袋遺跡－都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡－他発掘調査報告書Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第 272 集

仙台市教育委員会 2009『養種園遺跡第２次　保春院前遺跡 発掘調査報告書－都市計画道路「南小泉茂庭線」－関連遺跡調査報告書Ⅱ

仙台市教育委員会 2010a『西台畑遺跡第１・２次調査－仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅴ－』
仙台市文化財調査報告書第 359 集

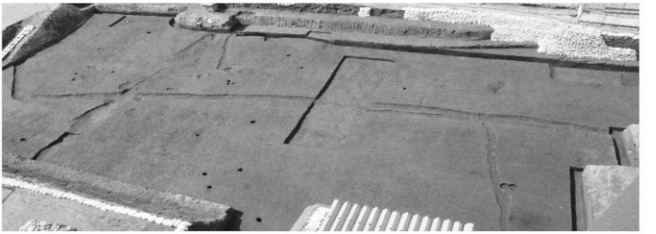
仙台市教育委員会 2010b『沼向遺跡第４～34 次調査－宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ－』
仙台市文化財調査報告書第 360 集

仙台市教育委員会 2011a『西台畑遺跡第３次調査－仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ－』仙台市文化財調査報告書第 388 集

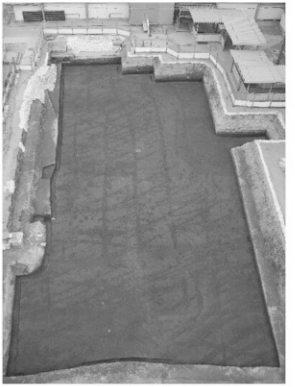
仙台市教育委員会 2011b『下ノ内遺跡・春日社古墳・大野田官衙遺跡ほか－仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ－』

写真図版

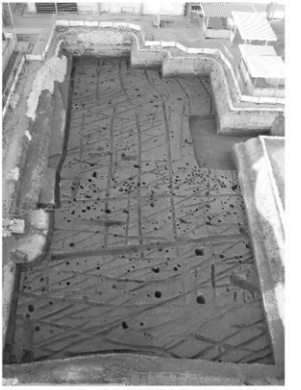
1．調査区周辺



2．Ⅲ層上面遺構完掘全景（東から）



3．Ⅴ層上面遺構検出全景（南から）

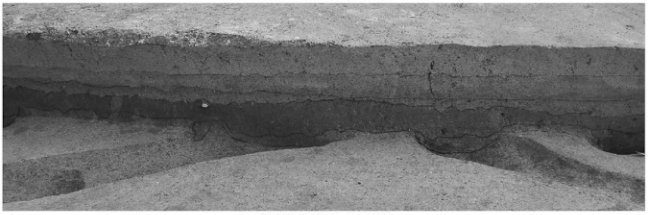


4．Ⅴ層小溝状遺構完掘全景（南から）

写真図版１　調査区周辺・調査区全景

1．調査区北壁断面（南から）

2．調査区西壁断面（北から）



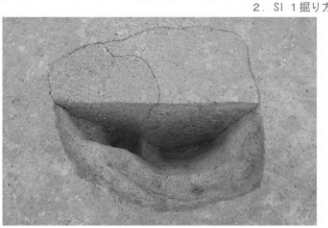
3．調査区東壁断面（西から）

4．調査区西壁断面（東から）

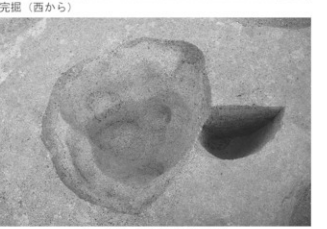
写真図版２　基本層序

1．SI 1床面遺構完掘（西から）

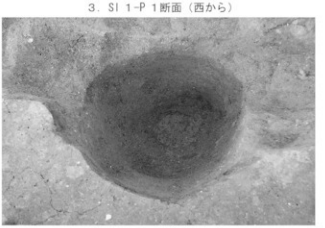
2．SI 1掘り方完掘（西から）



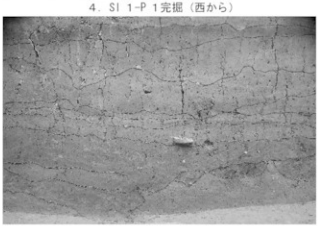
3．SI 1-P 1断面（西から）



4．SI 1-P 1完掘（西から）



5．SI 1-P 5完掘（西から）



6．SI 1円面硯出土（北から）

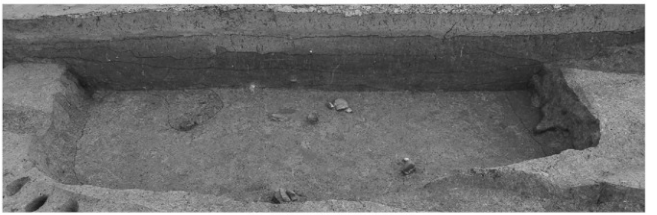
写真図版3　SI 1竪穴住居跡（1）

1．SI 1-SK 1遺物出土（北西から）

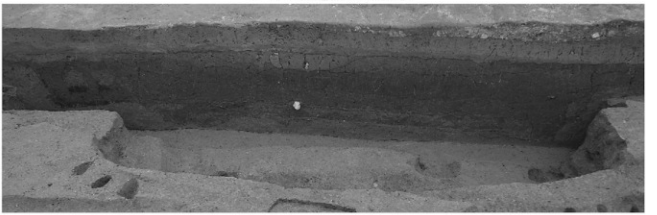
2．SI 1-SK 1遺物出土（西から）

3．SI 1遺物出土（北から）

4．SI 1-SK 3遺物出土（東から）

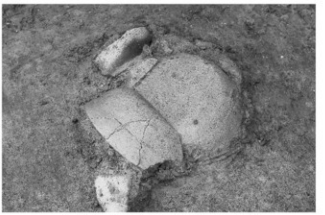


5．SI 2床面遺物出土（北から）



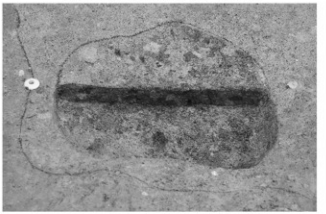
6．SI 2掘り方断ち割り断面（北から）

写真図版4　SI 1竪穴住居跡（2）・SI 2竪穴住居跡（1）

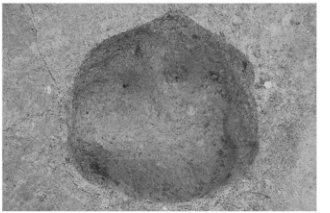


1．SI 2新段階床面遺物出土（北から）

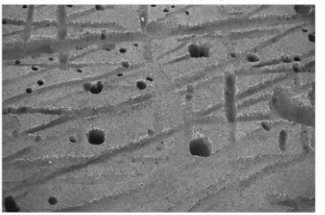
2．SI 2古段階床面遺物出土（北から）

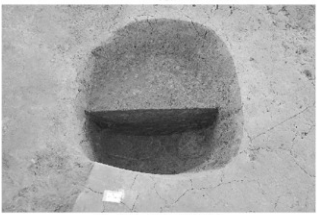


3．SI 2-P 1断面（北から）



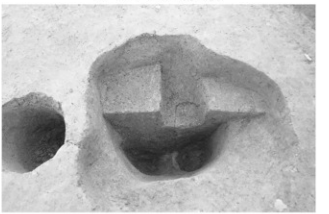
4．SI 2-P 1完掘（北から）





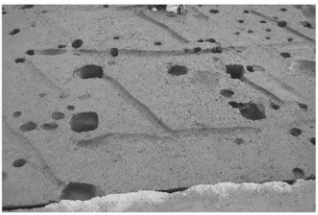
6．SB 1-P343（南から）

7．SB 2全景（東から）



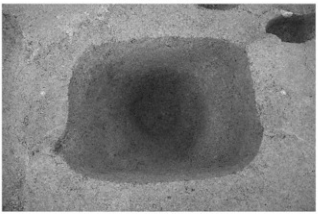
8．SB 2-P356断面（北から）

写真図版5　SI 2竪穴住居跡（2）・掘立柱建物跡（1）

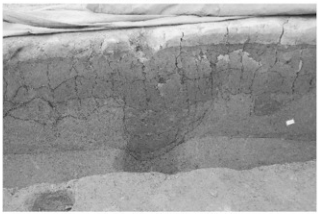


1．SB 3全景（西から）

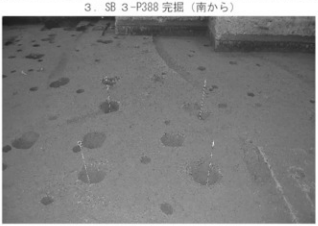
2．SB 3-P388 断面（南から）



3．SB 3-P388 完掘（南から）

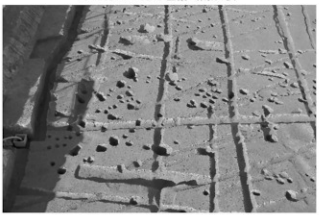


4．SB 3-P2017 断面（東から）



5．SB 4・SB 5全景（南から）

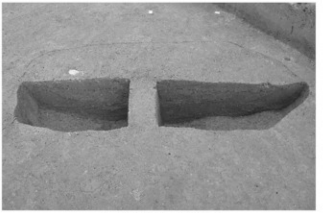
6．SB 4-P400 断面（南から）



7．SB 6・SB 7・周辺土坑（南から）

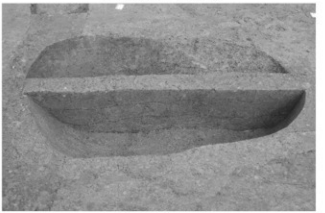
8．SB 6-P452 断面（南から）

写真図版6　掘立柱建物跡（2）



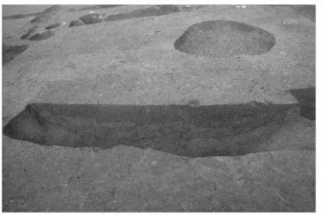
1．SK４断面（南から）

2．SK４完掘（南から）



3．SK５断面（南から）

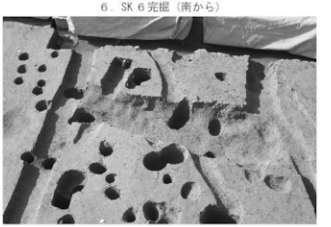
4．SK５完掘（南から）



5．SK６断面（南から）

6．SK６完掘（南から）

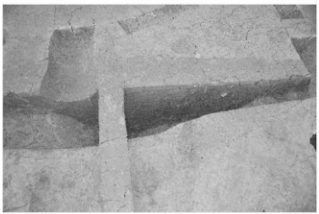
7．SK７断面（北から）



8．SK７完掘（東から）

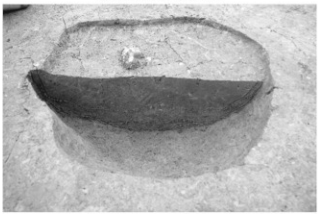
写真図版７　土坑（１）

1．SK 8検出（南から）



2．SK 8断面（南から）

3．SK 9断面（南から）



4．SK10 断面（南から）

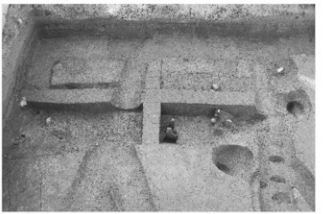
5．SK11 遺物出土（南から）

6．SK11 完掘（西から）

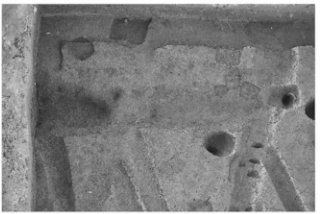
7．調査区北端検出（東から）

8．調査区北壁 SK12 断面＿南

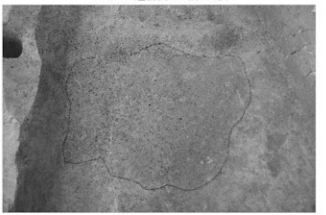
写真図版8　土坑（2）



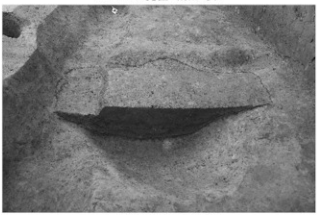
1．SK13 遺物出土（東から）



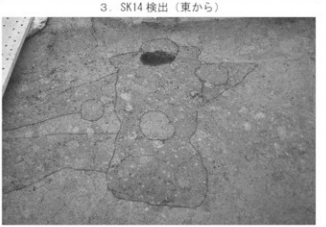
2．SK13 完掘（東から）



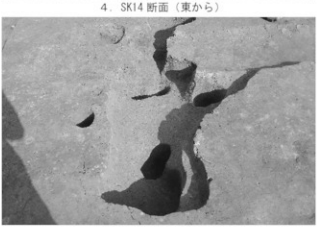
3．SK14 検出（東から）



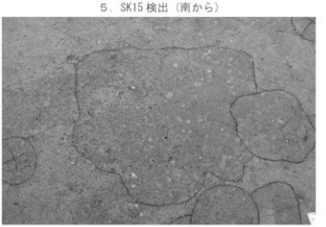
4．SK14 断面（東から）



5．SK15 検出（南から）



6．SK15 完掘（南から）



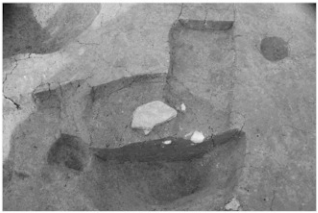
7．SK16 検出（南から）

8．SK16 断面（南から）

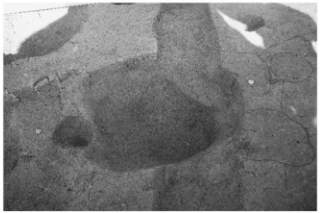
写真図版９　土坑（３）

1．SK19 焼土・炭化物層検出（南から）

2．SK19 断面（南から）

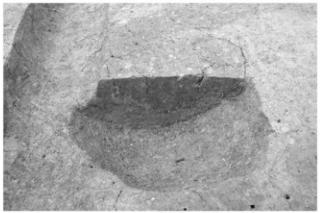


3．SK20 断面（南から）



4．SK20 完掘（南から）

5．SK21 検出（南西から）

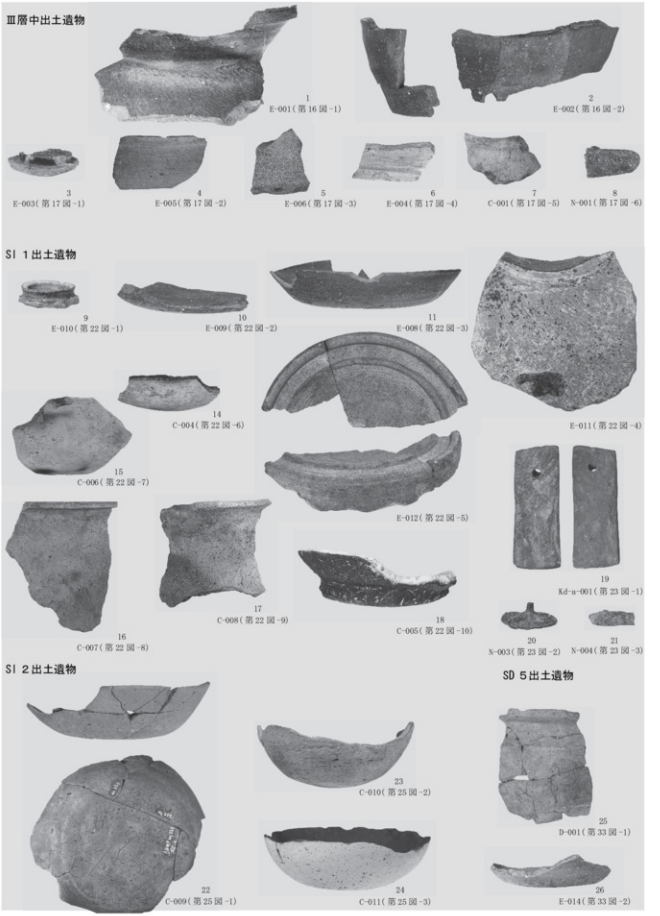


6．SK21 断面（南から）

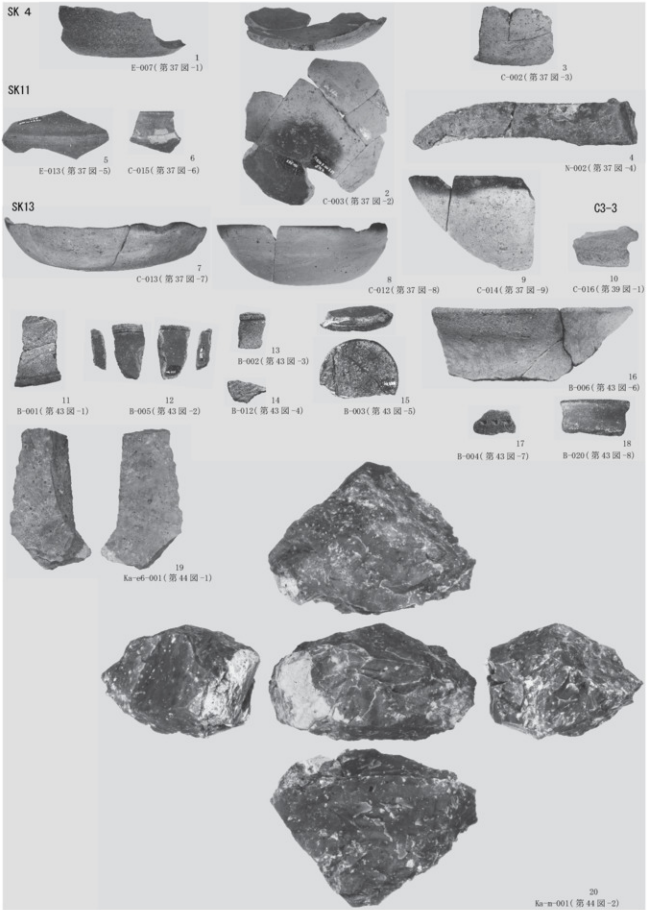
7．SK22 検出（南西から）

8．SK22 断面（南から）

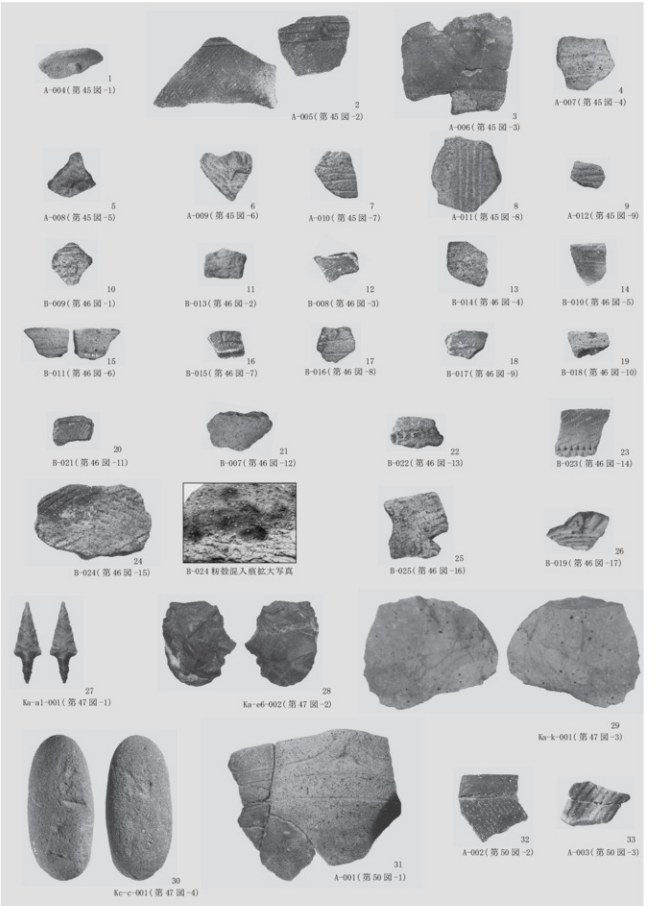
写真図版 10　土坑（4）



写真図版11　出土遺物（1）



写真図版12　出土遺物（2）



写真図版13　出土遺物（3）

報告書抄録

ふりがな	ろくたんだいせきだい９じちょうさ　はっくつちょうさほうこくしょ
書名	六反田遺跡第９次調査　発掘調査報告書
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 398 集
編著者名	庄子裕美　川又理枝
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒 980-8671　宮城県仙台市青葉区二日町１番１号　TEL022（214）8839
発行年月日	2012 年３月 23 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ろくたんだいせき 六反田遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 たいはくくおおのだ 太白区大野田 あざろくたんだ 字六反田 10-5	4100	01189	38 度 13 分 1 秒	140 度 52 分 28 秒	2011.8.8 ～ 2011.12.19	760㎡	学校校舎 増築計画

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
六反田遺跡	集落跡 畑跡	縄文時代 弥生時代 古代～中世	住居跡 掘立柱建物跡 小溝状遺構 土坑 性格不明遺構	縄文土器 弥生土器 石器 土師器 須恵器 近世陶磁器	奈良時代の一辺が約８ｍの大型の竪穴住居跡を検出。

要約

六反田遺跡は名取川左岸に、笊川が形成した自然堤防上に立地する縄文時代から弥生・古墳時代・古代・中世と営まれた遺跡である。

今回の調査の結果、縄文時代から近世までの遺物と古代の住居跡、古代から中世にかけての土坑や掘立柱建物跡、畑の耕作の痕跡と考えられる小溝状遺構群が検出された。主体を占める遺構の時期は概ね８世紀～９世紀であり、その間に居住域と耕作域としての土地利用がなされていた。

仙台市文化財調査報告書　第398集

六反田遺跡第9次調査発掘調査報告書

2012年3月

発行　仙台市教育委員会
宮城県仙台市青葉区二日町１番１号
文化財課022（214）8839

印刷　今野印刷株式会社
宮城県仙台市若林区六丁の目西町2-10
022（288）6123